

深い学びで目指す姿を実現する

単元構成の視点

上川教育研修センター

研究紀要 第44号

平成31年3月



第17次研究 2年次

「深い学びを実現する学習指導の在り方」

～各教科における主体的・対話的な学びを通して～



研究紀要第44号の発刊に当たって

上川教育研修センター所長 佐 藤 保

「未来を予測する最善の方法は、それを発明することだ」（アラン・ケイ）という言葉に象徴されるように、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を確実に育成することを目指して、平成29年3月、新しい学習指導要領が示されました。

そこでは、これまで蓄積してきた我が国の優れた教育実践、とりわけ普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を一層進めることが求められています。

このため上川教育研修センターでは、平成29年度に新たに研究主題を「深い学びを実現する学習指導の在り方」と設定し、3か年計画に基づく研究に着手しました。

2年次にあたる平成30年度は、具体的な研究内容を「単元の指導計画・評価計画の作成」と「本時の授業展開の工夫」という2つに分け、理論研究と実践検証の両輪で進めてまいりました。

実際の研究推進にあたっては、所属校の御理解・御協力を得て研究事業部長（教頭）と5名の研究員（教諭）が毎週火曜日午後、当センター研究室に集まり専心努めてまいりました。

そして今年度は、比布町立比布中学校、旭川市立朝日小学校、旭川市立大町小学校、旭川市立高台小学校の4校が研究協力校となつて、授業仮説に基づく検証として公開授業と研究協議に取り組んでくださいました。

このたび、今年度取り組んできた理論研究と実践検証、各実践結果の考察、及び今後に残された課題などを取りまとめ、研究紀要第44号を発刊する運びとなりました。

これまでもセンター研究発表会等を通して研究成果の発信と還流に努めてきたところですが、この研究紀要が新しい学習指導要領の実施に備える各学校の校内研修や、先生方の日常実践のよき参考資料として役立てていただければ幸いです。

結びに、これまで御指導・御助言を賜りました北海道教育庁上川教育局、旭川市教育委員会の皆様に厚くお礼申し上げ、発刊にあたっての御挨拶といたします。

（平成31年3月31日）

目 次

発刊に当たって

第Ⅰ章 研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

- 1 研究主題及び副主題
- 2 求める児童生徒像
- 3 研究の仮説
- 4 研究内容
- 5 研究の進め方
- 6 研究計画の概要
- 7 研究の全体構造

第Ⅱ章 研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

- 1 第17次研究のねらい
- 2 研究の具体

第Ⅲ章 研究員の授業実践

- 美瑛町立美瑛小学校 第2学年 国語科・・・・・・・・・・ 15
授業者 田 村 仁 研究員

第Ⅳ章 研究協力校の授業実践

- 旭川市立朝日小学校 第5学年 理科・・・・・・・・・・ 39
授業者 福 嶋 顕 勝 教 諭
研究部 石 塚 泰 鑑 教 諭

- 旭川市立高台小学校 第4学年 算数科・・・・・・・・・・ 57
授業者 森 走 平 教 諭
研究部 関 山 雅 人 教 諭

- 旭川市立大町小学校 第6学年 国語科・・・・・・・・・・ 75
授業者 鈴 木 一 朗 教 諭
研究部 荒 井 香 織 教 諭

- 比布町立比布中学校 第1学年 社会科・・・・・・・・・・ 91
授業者 梶 田 貴 裕 教 諭
研究部 渡 邊 舞 子 教 諭

研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 105

あとがき

第 I 章 研 究 の 概 要

- 1 研究主題及び副主題
- 2 求める児童生徒像
- 3 研究の仮説
- 4 研究内容
- 5 研究の進め方
- 6 研究計画の概要
- 7 研究の全体構造

1 研究主題及び副主題

深い学びを実現する学習指導の在り方 ～各教科における主体的・対話的な学びを通して～

(1) 主題設定の理由

グローバル化をはじめ、人工知能の飛躍的な進化は、大きな社会変化をもたらし、将来を見通すことが困難な時代に入った。学校教育においては、目指すところを社会と共有・連携していく「社会に開かれた教育課程」を実現する中で、社会の変化に主体的に対応し課題を解決する資質・能力を児童生徒に育成することが求められている。教育基本法が目指す教育の目的に基づき、児童生徒の現状を踏まえ、2030 年以降の社会の在り方を見据えながら、「生きる力」の理念を具体化すると、児童生徒に目指すべき姿を次のように描くことができる¹。

- ・ 社会的・職業的に自立した人間として、我が国や郷土が育んできた伝統や文化に立脚した広い視野をもち、理想を実現しようとする高い志や意欲をもって、主体的に学びに向かい、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができる。
- ・ 対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝えとともに、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりをもって多様な人々と協働したりしていくことができる。
- ・ 変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができる。

こうした中、教育の直接の担い手である教師には、教職に対する責任感や専門家としての高度な知識・技能、総合的な人間力などのこれまで不易とされてきた資質能力に加え、自律的に学ぶ姿勢をもち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や、情報を適切に収集・選択し、活用する能力や知識を有機的に結び付け構造化する力などが必要である²。とりわけ、新しい学習指導要領の全面実施を見据え、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善の取組を活性化していくことは、児童生徒一人一人が「どのように学ぶか」という学びの質や深まりにつながるものとして重要であり、「カリキュラム・マネジメント」と連動してすべての教育活動の質の転換を図ることにつながる。

これらの状況を踏まえ、上川教育研修センターでは、第 16 次研究において明らかにしてきた「学び合いで確かな学力を育てる学習指導の在り方 ～思考力・判断力・表現力を育む指導と評価～」についての成果を踏まえ、児童生徒一人一人が深い学びを実現することを目指し、次のように研究を進めることとした。

¹ 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（H28.12.21）参照。

² 中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」（H27.12.21）参照。

第Ⅰ章

(2) 研究主題のおさえ

① 研究主題～「深い学びを実現する学習指導の在り方」

「深い学び」とは、児童生徒一人一人が、各教科等で習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成し表したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう状況を指している。

「見方・考え方」は、学びの過程の中で、“どのような視点で物事を捉え、どのように思考していくのか”という、物事を捉える視点や考え方を指しており、各教科を学ぶ本質的な意義をなすものである。

「学習指導の在り方」で目指すことは、学習の内容と方法の両方を重視し、目標・指導・評価の一体化を図りながら、児童生徒の学びの過程を質的に高めていくことであり、幅広い授業改善の工夫が期待できる。

そして、こうした児童生徒の学びの基盤となるものは、学年・学級の支持的風土をはじめ、教室環境の整備や学習規律の確立など、組織的に学びの環境を整える日々の営みである。

② 副主題～各教科における主体的・対話的な学びを通して

児童生徒一人一人が「どのように学ぶか」という学びの質は、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり、多様な人との対話で考えを広げたり、各教科等で身に付けた資質・能力を様々な課題の解決に生かすよう学びを深めたりすることによって高まる。

こうした「主体的・対話的で深い学び」が実現するように、日々の授業を改善していくための視点を共有し、学習の在り方そのものの問い直しを目指す。

「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」は、児童生徒の学びの過程の中で一体となって実現されるものであり、相互に影響し合うものである。当センターでは、2年次の研究を進めるに当たり、各教科における「主体的な学び」「対話的な学び」を研究の切り口として捉え、研究主題に迫っていくこととした。

2 求める児童生徒像

各教科等において生きて働く「知識・技能」を習得し、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を高めながら、「主体的に学習に取り組む態度」を身に付けた児童生徒。

3 研究の仮説

目標と手立てが合致した単元の指導計画及び具体的な児童生徒の姿を見取る評価計画を作成するとともに、自己の学習を見直し振り返る主体的な学びと、思考を広げ確かな学びに向かう対話的な学びを重視した本時の授業展開を工夫することにより、児童生徒の深い学びを保障できるであろう。

4 研究内容

深い学びを実現する学習指導の在り方を検証するために、次の内容について研究する。

研究内容 1 ～単元の指導計画・評価計画の作成～

(1) 指導計画

- ① 指導内容の明確化（学習指導要領を基にした分析，目標・課題・まとめ・評価の整合）
- ② 深い学びを実現する単元構成（深い学びを充実させる視点，主体的・対話的な学びの位置付け）

(2) 評価計画

- ① 評価内容の焦点化（観点別評価，指導に生かす評価・記録に残す評価）
- ② 見取りの具体化（児童生徒の具体的な姿，評価の場面と方法）

研究内容 2 ～本時の授業展開の工夫～

(1) 主体的な学び

- ① 見通し（学習課題の提示，課題解決の方法や手順）
- ② 振り返り（学びの成果，解決の過程）

(2) 対話的な学び

- ① 思考を広げる対話（論点の明確化，互いの考えの見える化）
- ② 確かな学びに向かう対話（教科の特性に応じたまとめ，思考の活性化）

5 研究の進め方

- ◇ 文献や実践資料に基づく理論研究を週 1 回の定例研究室会議及び夏季，冬季の集中研究室会議において進める。
- ◇ 各年次とも，上川教育研修センターの研究員及び，研究協力校の授業実践を基にして理論を検証し，研究紀要にまとめる。
- ◇ 研究紀要にまとめた内容は，「センター研究発表会」において発表し，研究協議で明らかにされた成果と課題を基に，研究の深化・発展を図る。
- ◇ 新しい学習指導要領に示されている教科を主体として研究を進める。

6 研究計画の概要

平成 29 年度から平成 31 年度にわたる 3 か年において，単元の指導計画・評価計画の作成及び本時の授業展開の工夫を研究内容の柱として研究を推進する。

2 年次 平成 30 年度 授業実践（所員 1 名，研究協力校 4 校）

○研究員の授業実践

美瑛町立美瑛小学校 国語科（第 2 学年「見つけたことをわかりやすく書こう」）
研究員 田村 仁

○協力校の授業実践

旭川市立朝日小学校 理科（第 5 学年「流れる水のはたらき」）
教諭 石塚 泰鑑・福嶋 顕勝

旭川市立高台小学校 算数科（第 4 学年「角」）
教諭 関山 雅人・森 走平

旭川市立大町小学校 国語科（第 6 学年「自分の感じたことを，朗読で表現しよう」）
教諭 荒井 香織・鈴木 一朗

比布町立比布中学校 社会科（第 1 学年「アフリカの人々の暮らしとその変化」）
教諭 渡邊 舞子・梶田 貴裕

研究主題

深い学びを実現する学習指導の在り方

～各教科における主体的・対話的な学びを通して～

求める児童生徒像

各教科等において生きて働く「知識・技能」を習得し、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を高めながら、「主体的に学習に取り組む態度」を身に付けた児童生徒。

研究の仮説

目標と手立てが合致した単元の指導計画及び具体的な児童生徒の姿を見取る評価計画を作成するとともに、自己の学習を見直し振り返る主体的な学びと、思考を広げ確かな学びに向かう対話的な学びを重視した本時の授業展開を工夫することにより、児童生徒の深い学びを保障できるであろう。

研究内容

【研究内容1】

単元の指導計画・評価計画の作成

(1) 指導計画

- ①指導内容の明確化
 - ・学習指導要領を基にした分析
 - ・目標・課題・まとめ・評価の整合
- ②深い学びを実現する単元構成
 - ・深い学びを充実させる視点
 - ・主体的・対話的な学びの位置付け

(2) 評価計画

- ①評価内容の焦点化
 - ・観点別評価
 - ・指導に生かす評価・記録に残す評価
- ②見取りの具体化
 - ・児童生徒の具体的な姿
 - ・評価の場面と方法

【研究内容2】

本時の授業展開の工夫

(1) 主体的な学び

- ①見直し
 - ・学習課題の提示
 - ・課題解決の方法や手順
- ②振り返り
 - ・学びの成果
 - ・解決の過程

(2) 対話的な学び

- ①思考を広げる対話
 - ・論点の明確化
 - ・互いの考えの見える化
- ②確かな学びに向かう対話
 - ・教科の特性に応じたまとめ
 - ・思考の活性化

学びの基盤

支持的風土の醸成

教室環境の整備

学習規律の確立

第Ⅱ章 研 究 の 内 容

1 第 17 次研究のねらい

2 研 究 の 具 体

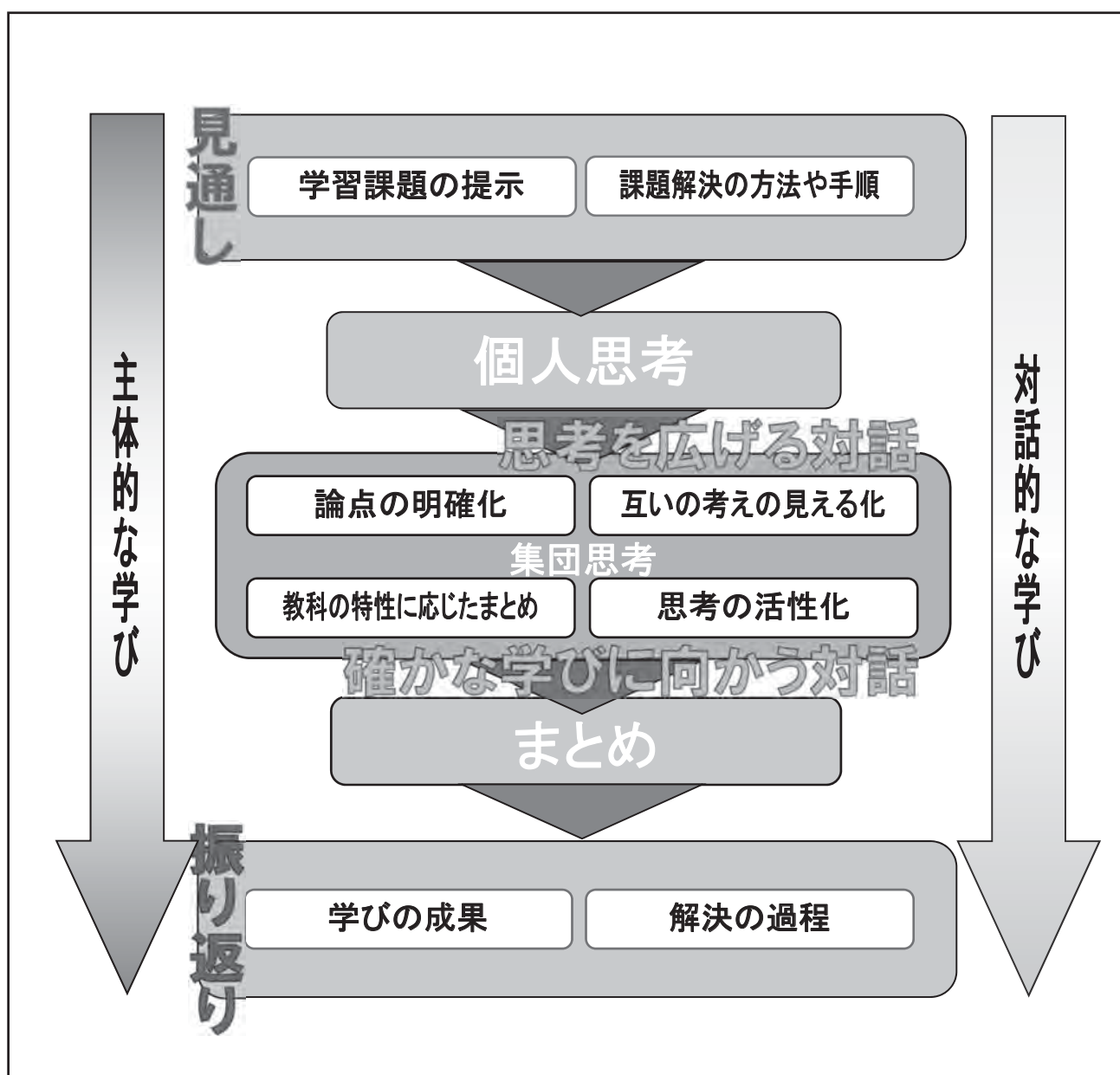
1 第17次研究のねらい

本研究は、児童生徒一人一人が、各教科等において生きて働く「知識・技能」を習得し、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を高めながら、「主体的に学習に取り組む態度」を身に付けることを目指している。そのため、当センターでは、「深い学びを実現する学習指導の在り方」を研究主題に掲げ、第17次研究では、研究内容を次の2つに分け研究を進める。

- 1 目標と手立てが合致し主体的・対話的な学びを位置付けた単元の指導計画及び具体的な児童生徒の姿を見取る評価計画を作成すること。
- 2 自己の学習を見通し振り返る主体的な学びと、思考を広げ確かな学びに向かう対話的な学びを重視した本時の展開を工夫すること。

なお、2年次では、原則、現行の学習指導要領の基で検証を行う。

◆各教科における主体的・対話的な学びを実現するための1単位時間の授業モデル◆



2 研究の具体

研究内容1 単元の指導計画・評価計画の作成

新しい学習指導要領においては、児童生徒が「何を学ぶか」という指導内容を見直すとともに、「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」までを見据えた授業改善を進めることが求められている。

そのためには、目標と手立てが合致した単元の指導計画及び具体的な児童生徒の姿を見取る評価計画を作成することが大切である。指導計画では、①指導内容の明確化 ②深い学びを実現する単元構成、評価計画では、①評価内容の焦点化 ②見取りの具体化 を研究内容とすることとした。

(1) 指導計画

①指導内容の明確化とは、学習指導要領を基に指導事項や系統性などを明らかにし、目標・課題・まとめ・評価の整合を図ることである。

学習指導要領を
基にした分析

児童生徒の実態や教師の願いを踏まえ、確実に目標に到達できるようにするためには、学習指導要領に示されている各教科等の目標について理解し、指導事項を押さえることが必要である。

単元の指導計画を作成するためには、学習指導要領から、「目標（ねらい）」「指導事項」「学年間・単元間の系統性」などの指導内容を明確にすることが大切である。

指導計画を作成する過程において、学習指導要領を基に指導内容の分析を十分に行うことは、児童生徒に確実に目標を達成させるために欠かすことのできない工程である。

目標・課題・まとめ・
評価の整合

目標と手立てが合致した単元の指導計画を作成するためには、目標・課題・まとめ・評価の整合を図ることが大切である。

指導内容を明確にしたのち、単元や授業で児童・生徒がねらいを達成した姿を基にした目標を設定し、目標に応じた課題とまとめを設定する。また、本時の目標の達成状況を、いつ、どのような方法で見取るのかという評価を位置付ける。

目標に応じた課題・まとめ・評価を適切に位置付けることにより、目標と手立てが合致した指導計画を作成することができ、学習内容の確実な定着に結び付く。

②深い学びを実現する単元構成とは、深い学びを充実させるための「授業改善の4つの視点」を意識しながら、主体的な学びや対話的な学びを単元で意図的に位置付け、指導計画を作成することである。

「深い学び」
を充実させる
視点

深い学びを実現させるためには、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、単元の構成を行う必要がある。

児童・生徒が、次の4つの姿（知識を相互に関連付けて①より深く理解する姿、②情報を精査して考えを形成する姿、③問題を見出して解決策を考える姿、④思いや考えを基に創造する姿）を実現する学習を通して、深い学びを充実させることが大切である。

そこで、以下の4点を意識した単元構成を行う。

なお、一単元のみで下記の4点がすべて網羅されるものではない。

■既習内容や経験と関連付けた思考の促進を意識した単元構成

より深く理解する姿を目指し、単元の学習過程が、児童・生徒が既習の内容や経験などと関連付けて考えられる場面を設定する視点での単元構成

■児童・生徒が思考して問い続ける過程の重視を意識した単元構成

情報を精査して考えを形成する姿を目指し、単元の学習過程が、児童・生徒の意識に沿って、思考が連続するよう意図的に計画する視点での単元構成

■個の問いの顕在化、切実な課題の設定を意識した単元構成

問題を見出して解決策を考える姿を目指し、児童・生徒の意識に沿った個の課題意識を高める場面を設定する視点での単元構成

■資質・能力が活用・発揮される場面の設定を意識した単元構成

思いや考えを基に創造する姿を目指し、単元を通して身に付けた力を活用する場面を設定する視点での単元構成

◆「思考して問い続ける過程の重視」の視点での実践例

※小学校第6学年 国語科「自分の感じたことを、朗読で表現しよう」第Ⅳ章 協力校の授業実践pp.75～90

知識を相互に関連付けて「情報を精査して考えを形成する姿」を目指し、「思考して問い続ける過程を重視」した単元を構成

優れた表現を味わいながら読み、自分の感じたことを朗読で表現する学習

②～④：人物像、情景を読みとる時間を設定

⑤：前時までの情報（人物像、情景）から
題名について考える時間を設定

①：「自分の感じたことを朗読で表現して、
全校児童に聞いてもらう」という単元を通
した課題の設定

⑥～⑧：2～5時間目で得た情報から、自
分なりの朗読を考える活動の設定



【児童の姿】

自分なりの朗読を考えるために、読みを深める必要があること、そのために人物像、情景、題名について考える必要感をもって学習へ取り組むことで、思考し問い続ける姿が見られた。

人物像、情景、
題名などの情報
を精査して考え
を形成する姿



【教師の実感】

児童が朗読を考えていくにあたり、どのような情報と読みが必要かということ、意図的に位置付けることで、児童が思考し問い続け、いくつかの情報をもとに朗読に活かすことができた単元となった。

◆「既習内容や経験と関連付けた思考の促進」の視点での実践例

※小学校第5学年 理科「流れる水のはたらき」 第四章 協力校の授業実践pp. 39～56

知識を相互に関連付けて「より深く理解する姿」を目指し、「既習内容や経験と関連付けた思考の促進」が行われる単元を構成

学んだことを自然現象に当てはめる活用的な学び

②：学習計画を立て見通しをもつ時間を設定

③～④：川の上流、中流、下流の違いについて、資料を使って表や図にまとめる時間を設定

⑧～⑨：前時までの知識を関連付けて、流れる水の量を増やした時の働きを追究する時間を設定

①：身近にある川が増水した時の写真や映像を見て、流れる水がもつ力の強さについて興味をもたせる時間を設定

⑤～⑦：流れる水の働きには侵食、運搬、堆積があることを実験を通して知る活動の設定

⑩：長雨や集中豪雨で川が増水することについて、資料を使ってまとめる時間を設定

⑪～⑫：今までの知識を相互に関連付け、水害のメカニズムを説明し、それを防ぐ工夫を考える時間を設定

【児童の姿】

児童は、水害発生メカニズムについて、獲得した知識や技能を関連付けながら、自分の言葉で科学的に分かりやすく説明する姿が見られた。活用の場面では、川による災害とその対策を考えさせることで、災害を防ぐための工夫や取り組みについて理解を深める姿が見られた。

流れる水のはたらきについてより深く理解する姿

【教師の実感】

水害発生メカニズムについて自分の言葉で科学的に分かりやすく説明するというゴールの見通しをもたせ、児童の思考の流れを想定し、「習得—活用」を意識した単元構成や見通しと振り返りを継続したことで、より深く理解する姿につながる単元となった。

主体的・対話的な学びの位置付け

主体的・対話的な学びは、毎時間の授業改善の視点として有効であるが、深い学びをより充実させるためには、児童の思考の流れや単位時間のつながりを考慮しながら、単元に位置付けることが大切である。

そこで、主体的な学びや対話的な学びが中心となる時間や場面を意図的に単元に位置付ける。

(2) 評価計画

①評価内容の焦点化とは、単元レベルで観点別評価を位置付け、目的に応じた評価を行うことである。

観点別評価

児童生徒一人一人に学習の確実な定着を図るためには、学習指導要領に示された目標に準拠した評価を焦点化して実施することが大切である。しかし、1単位時間に複数の評価の観点を設定したり、多くの評価場面を設

指導に生かす評価
記録に残す評価

定したりすることは、評価を行うこと自体が負担となり、その結果を授業改善に生かすことができなくなるおそれがある。

そこで、単元の評価計画においては、それぞれの時間の目標や内容に応じて、観点別評価（「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」）をバランスよく位置付けることが大切である。

さらに、評価を焦点化するためのもう一つの手立てとして、本研究では、「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」のどちらを目的とするのかを明らかにすることとした。「指導に生かす評価」は、観察や発言、ワークシート等への記述内容などを基に、個に応じた指導や授業改善に生かすことを目的として日常的に行うものである。一方「記録に残す評価」は、ノートや作品など、全ての児童生徒から集める成果物を参考にしながら、主として総括的評価の資料とすることを目的として行うものである。2つの視点から評価を捉えることで、評価の観点や評価の回数を精選し、効果的・効率的な評価となることを目指した。なお、評価の方法については、ノートやレポート、ワークシート、作品など、授業後に教師が確認しながら評価できるもののほか、発言の様子をはじめとする授業中の学習状況を見取りながら評価するものなど、目的に応じた方法を選択して行うこととした。

このように、4観点による観点別評価を行うとともに、「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」のどちらを目的とするのかを明確にすることにより、効果的・効率的な評価を行うことができる。

②見取りの具体化とは、目標を達成した児童生徒の具体的な姿を想定することである。

児童生徒の
具体的な姿

評価を行う際には、教科の特性、本時のねらい、学習内容等に応じて、妥当性と信頼性を高めるよう留意する必要がある。

そのため、本研究では、学習活動における具体の評価規準から目標に達成したと判断する具体的な姿を想定し、評価の妥当性を高め、適切な評価を行えるようにした。

特に、「思考力・判断力・表現力等」の評価においては、各教科の内容に即して思考・判断したことについて評価する。評価に当たっては、単に児童生徒の正答率を見て評価するのではなく、自分の考えを記述させたり、発表させたりして、児童生徒の思考したことを見取ることが必要である。その際、児童生徒がどのようなことを発言、記述できれば目標を達成したと言えるのかという具体的な姿を想定しておくことが大切である。

評価の場面と方法

これらを踏まえた上で、評価の場面と方法を学習指導案に位置付けることが、教科の特性、本時のねらい、学習内容等に応じて目標を確実に達成させることに結び付く。

研究内容2

本時の授業展開の工夫

児童生徒に確かな学力を育成するためには、「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」ということを見据えて作成した指導計画に基づきながら、日常の授業を充実させていくことが求められている。

そのためには、主体的な学びと対話的な学びの視点を重視した学びの質を高める本時の授業展開を工夫することが大切である。主体的な学びでは、①見通し ②振り返り、対話的な学びでは、①思考を広げる対話 ②確かな学びに向かう対話 を研究内容とすることとした。

(1) 主体的な学び

①見通しとは、児童生徒が問題意識から課題を設定し、課題解決に向けた方法や手順を見定めることである。

学習課題の提示

児童生徒一人一人が、目標を理解し、学習への興味・関心を高め、主体的に課題解決に取り組むようにするためには、単に目標を示すのではなく、児童生徒が単元の学習で何を学ぶのか、どのような解決方法があるのかなどを見通すことができるようにする必要がある。

学習課題の設定に当たっては、課題意識を高める問題場면을提示した上で、次の点に配慮することが大切である。

- 学習の目標や内容を理解できる学習課題
- 学習への興味・関心や問題意識を高める学習課題
- 主体的に学ぶ意欲を高める学習課題
- 学習の見通しをもつことができる学習課題

◇「学習課題の提示」の実践例

～学習の見通しをもつことができる学習課題～

※小学校第4学年 算数科「角」 第四章 協力校の授業実践 P. 57～74

【問題】

⑤の角度は何度でしょう。



問題場면을確実に捉えさせるために、全体で問題を整理する場面を設けました。

180°より大きい角を測定するために、「1直角」「2直角」「3直角」「4直角」などの既習事項を活用して答えの見通しをもたせたり、必要な用具（分度器の活用）や演算の決定などを確認して方法の見通しをもたせたりしました。

【課題】180°より大きい角度をもとめるにはどうする？



課題解決の方法や手順

本研究では, 上記のような学習課題を発達の段階に応じて提示することにより, 児童生徒の主体的な学びを促すことができるようにした。

また, 児童生徒が見通しをもって課題を解決するためには, 課題解決の方法や手順の確認が必要であることから, 既習事項や生活経験を想起させたり, 学習過程を確認させたりする学習活動を取り入れた。

このように, 個人思考に入るまでに学習課題を理解させ, 課題解決の方法や手順を確認する中で見通しをもたせることにより, 児童生徒の主体的な学びが可能となる。

◇「課題解決の方法や手順」の実践例

～既習事項を活用した課題解決への見通し～

※小学校第5学年 理科「流れる水のはたらき」 第四章 協力校の授業実践 pp. 39～56

【課題】

流れる水の量を増やすと, 流れる水の働きはどのようなようになるのだろう。

水の量を変化させると流れる水のはたらきがどのように変化するかを確かめるために, 「侵食・運搬・堆積」のいずれが作用しているのかについて予想させました。

教師の手立て

- 3 条件制御で水の量を変えること, 今までに学んだ知識も十分に活用しながら検証実験をすることを確認させる。
- 4 検証実験をさせる。
・ i P a d を活用して記録させる。
- 5 実験結果を記録させる。

課題解決に向け, 条件を変えるのは水の量を2倍にするだけで, あとは前時と全く同じ実験や記録(タブレットを使った映像記録, 予想と結果が一目で分かるワークシート)の方法で行うことを確認させ, 課題解決に向けた見通しをもたせることができました。



②振り返りとは, 児童生徒が学んだことを自分自身の言葉で自己評価することである。

学びの成果

解決の過程

児童生徒が学習の終末において, 何をどのように学んで, 何ができるようになったのかを実感して次時への学習意欲を高めるためには, 振り返りの時間を設定し, 「学びの成果」や「解決の過程」を主体的に振り返らせる必要がある。

「学びの成果」の振り返りでは, その時間に学習したことで, 何が分かり, 何ができるようになったのかを自己評価させる。

「解決の過程」の振り返りでは, 問題解決的な学習過程とその方法や手段を通して学びの成果を得るに至った自分自身の学習の足跡を自己評価させる。

学習の終末で行う学習過程には, 次のようなものが考えられる。

【学習の終末で行う学習過程】

- ① 学習課題に対するまとめを行う。
- ② 練習問題に取り組む。

- ③ 個人思考の段階における自分の考えを見直し更新する。
- ④ 学びの成果を振り返る
 - ・ 本時の学習の理解度を「4件法」等で表す。
 - ・ 本時の学習で分かったことを書く。
 - ・ 本時の学習で分からなかったことを書く。
 - ・ 本時の学習から新たな疑問を書く。
- ⑤ 解決の過程を振り返る
 - ・ 本時の学習の解決の過程を振り返る。

→ 自己評価

||
振り返り

本研究では、④「学びの成果」と⑤「解決の過程」の内容について短時間で自己評価する。なお、⑤については、学習内容や児童生徒の発達の段階に応じて適宜行うものとする。

このように、1単位時間の終末の場面で「学びの成果」や「解決の過程」を振り返らせることにより、主体的な学びが次時につながるものとなり、個の学びを豊かなものにすることができる。

◇「解決の過程」の実践例

～自分の学びにつなげる自己評価～

※小学校第2学年 国語「見つけたことを分かりやすく書こう」第Ⅲ章 研究員の授業実践pp. 15～37

ふりがたり 月 日 名前 ()

(1) 「わかりやすいほうこく文を書くためには、はじめ、中、おわりに分けて書くことのたいせつさについてわかりましたか。」

4 3 2 1

(2) 「みんなようになった考え方や友だちのはっぴょうを書きましょう。」

本時の課題「分かりやすい報告文を書くために、書き方の秘密を発見する」に正対した質問とし、主に「学習内容」について自己評価させました。

勉強になった考え方や、友達の発表を振り返らせ、自分の学習にどうつながったのかを考えさせることで、主に「解決の過程」について自己評価させました。

【児童の感想から】

- ・ ○○さんのはっぴょうで、はじめ、中、おわりに気をつけて書くと分かりやすくなることに気づきました。
- ・ ほうこく文を書くときには、りゅうを入れてかくといいことが分かりました。



(2) 対話的な学び

①思考を広げる対話とは、児童生徒が様々な考えを知り、互いの考えを共有し合う対話である。

論点の明確化

児童生徒が課題意識を高めたり、解決の方法や手順を理解したりしながら、自分の考えをもつことができた次の段階では、対話を通して多様な考えに触れ、自分の考えを広げさせることが必要である。

そのためには、対話の論点を明確にしたり、互いの考えを見える化したりをすることが大切である。

対話を生み出すためには、児童生徒の中で課題意識が高まっていること、その課題に対して自分の考えをもっていることなど、いくつかの条件が挙げられるが、「これから何について話し合うのか」という「論点」が明確になっていなくては、意味のある対話は成立しない。教師は、集団思考などの対話の前に、もう一度課題に立ち返らせたり、対話により考えを収束させるのか、多様な考えを出させるのかなど、対話の方向性を示したりするなどして、論点を明確にする。

◇「論点の明確化」の実践例

～付箋による論点の明確化の手立て～

※小学校第2学年 国語「見つけたことをわかりやすく書こう」 第三章 研究員の授業実践pp. 15～37

【本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いた教師の報告文例】



【教科書の報告文例】





本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いた報告文と教科書の報告文例を並べて配置することで、違いを見つけやすくしました。



並べた2つの報告文例で違う部分に付箋を貼らせ、交流する観点を明確にしました。
同じ場所に付箋を貼った者同士で交流させることで、話し合う論点を明確にしました。



付箋が多く貼られた部分を中心に、構成の工夫等に注目させることで、本時のねらいを達成させることができました。

互いの考えの見える化

また、個々の児童生徒が発言しても、自分の考えの言いつ放しでは、思考が広がったとは言えない。互いの発言の内容や違いを理解するために、教師は、キーワードでまとめたり、構造的な板書を行ったりするなどの工夫を行う。

このように、「論点の明確化」と「互いの考えの見える化」を行うことによって、児童生徒は自分の考えを広げいくことができる。

②確かな学びに向かう対話とは、児童生徒が学習した内容についての理解を確かなものにする対話である。

教科の特性に応じたまとめ

児童生徒が、集団思考において、対話を通して多様な考えに触れ、自分の考えを広げることができた次の段階では、単元や本時の目標に迫り、学習内容のより確実な定着を図ることが必要である。

そのためには、「教科の特性に応じたまとめ」に向かう対話や「思考の活性化」を目指す対話を設定することが大切である。

「教科の特性に応じたまとめ」とは、教科等固有の目標や学習活動に応じたまとめを行うことである。例えば、前時との違いを明確にして文章で

まとめること、学習内容に関連するキーワードによるラベリング、上手な作品や演技の鑑賞などが考えられる。

なお、これらのまとめは、教師が一方的に与えるのではなく、教師と児童生徒または児童生徒同士の対話を通して行う。

◇「教科の特性に応じたまとめ」の実践例

～国語科の特性に応じたまとめ～

※小学校第6学年 国語「やまなし」学習指導案から抜粋 第四章 協力校の授業実践 pp. 75～90

- | | |
|--|---|
| 6 全体で交流させる。
「なぜ題名を『やまなし』としたのでしょうか。」 | 6 全体で考えを交流する。
・相づちを打ったり反論したり質問したりしながら交流する。 |
| 7 各自の考えを交流させながら、共有できる部分を考えさせる。 | 7 それぞれの考えを交流しながら、『やまなし』について共有できる部分を捉える。 |
| 8 題名『やまなし』について、自分の考えをまとめさせ、ノートに書かせる。 | 8 自分の考えを整理して、ノートに書く。 |

教科の特性に応じたまとめ

【本時の評価場面】〈読む②〉発言、ノート

「五月」と「十二月」の世界観や宮沢賢治の思想を踏まえて、自分なりに題名『やまなし』について考えることができた。
く手立てで二枚の幻灯、作者像から出てくる言葉の共通点に着目させる。

わたしは…（以降、『自然の恵み』『本当の豊かさ』『命の大切さ』といった共有した文言をもとにして自分の考えを書いて、本時の学習のまとめとする）。

共有した部分（自然の恵み、本当の豊かさ、命の大切さ等）をもとに、改めて自分の考えを整理し、本時のまとめとしました。



【児童のまとめから】

宮澤賢治は、農家の人たちが不作で傷ついている心を少しでも和らげようと思ったところから、題名を『やまなし』にしたと思う。

思考の活性化

また、課題を解決したにもかかわらず、適用問題に取り組ませると、問題が解けないことがある。「分かったつもり」を「確かに分かった」となるように揺さぶりをかけたり、本時で扱ったものとは異なる状況や文脈に当てはめて考えさせたりするなど、思考を活性化させる対話を意図的に設定する。

このように、「教科の特性に応じたまとめ」や「思考の活性化」を目的とした対話を行うことにより、児童生徒は学習内容の確実な理解を深めることができる。

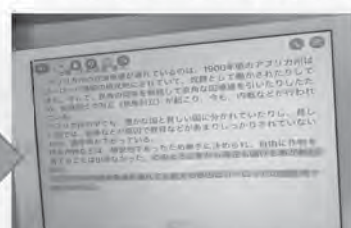
◇「思考の活性化」の実践例

～自分の考えを再構築する対話～

※中学校第1学年 社会「アフリカの人々の暮らしとその変化」 第四章 協力校の授業実践 pp. 91～104



代表的な考えを例示し、共通点を探させることで考える観点を明確にしました。



既習事項を関連付けながら、自分なりの考えを文章で表現し、単元の課題の解決に向かわせました。



他者との対話を通して、自分の考えを深めさせました。

交流する事でわかったことをもとに、自分の考えを再構築しました。

第Ⅲ章 研究員の授業実践

○美瑛町立美瑛小学校 第2学年 国語科
授業者 田 村 仁 研究員

単元の展開		主な学習活動
1	時	○生活科で行った町探検をもとに、『町探検報告文』を書き、クラスの友達に紹介するという学習の見通しをもつ。 ○単元を通した課題を設定する。 「町探検報告会」を開き、美瑛のまらの良いところを報告文で伝えよう。 ○課題を把握する。 報告文をどのように作成させるのか、学習の計画を立てよう。 ○生活科で書いた記録カードを準備させ、読みさせる。 ○まずは書いてみて、その後に改善するという見通しをもたせつつ、学習計画を立てる。 ○教科書の報告文例を読み、報告文とは何かを知るとともに、ゴールに対する意識を明確にする。 ○本時の学習を振り返る。
2	時	○課題を把握する。 記録カードをもとに、報告文①を書こう。 ○記録カードに書かれていることをもとに、報告文を書く。 ○報告文を書く。 ○報告文①の出来栄を考えよう。 生活科の記録カードだけでは分かりやすい報告文を書くことは難しい。 ○報告文を書くために、 ①探検カードの秘密 ②書き方の秘密 を探る必要があることを確認する。 ○本時の学習を振り返る。
3	時	○課題を把握する。 分かりやすい報告文を書くために、「探検カード」の秘密を発見しよう。 ○生活科で作った「記録カード」と教科書の「探検カード」を比較し、自分達でカードに書く視点を明確にする。 ○①見つけたこと ②聞いたこと ③思ったことに分けて書く点に着目する。 「探検カード」は、①見つけたこと ②聞いたこと ③思ったこと の3つに分けて書くことよ。 ○見つけたことや聞いたことには、場所や具体的な数字等を書くことよことを確認する。 ○「探検カード」を作成するために、改めて見学に向かうことを確認する。 ○本時の学習を振り返る。
4・5	時	○課題を把握する。 分かりやすい報告文を書くために、再び見学を行い、3つに分けた「探検カード」を書こう。 ○見学を通し、①見つけたこと ②聞いたこと ③思ったことの3つの視点をもとに、「探検カード」を書く。 ○場所や具体的な数字などが書かれているかも含め、友達と交流する。 ○「記録カード」と比較し、変化に気付く。 「探検カード」を3つに分けて書くことで、自分の伝えたいことがはっきりする。 ○本時の学習を振り返る。
6	時	○課題を把握する。 分かりやすい報告文を書くために、書き方の秘密を発見しよう。 ○教師の報告文例（本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いたもの）と教科書の文例を比較し、形式を発見する。 ○はじめ、中、おわりに分かれていることに気付く。 ○はじめの構成で、探検場所を選んだ理由が書かれていることに気付く。 ○中の構成で、順序を表す言葉が配置されていることに気付く。 ○おわりの構成で、思ったことについて書かれていることに気付く。 はじめ、中、おわりに書くことを分けることで、分かりやすい報告文になる。 ○以前の報告文を振り返り、改善点を見付ける。 ○本時の学習を振り返る。

研究内容 1-(1)②

深い学びを充実させる視点

【問題を見出して解決策を考える姿を目指し、個の課題意識を高める場面を設定する】

そのために

児童の書きたいという思いを逃さずに書く活動に転化する場면을意図的に設定する。

2時間目

まず、生活科で書いた記録カードで書いてみる場面



3時間目

「探検カード」の秘密を探る場面

4・5時間目

再度、見学場所に行って「探検カード」を書き直す場面



報告文がうまく書くことのできないもどかしさ、書いてはみたものの、情報が足りないことへの気付き、疑問、思い等から、個の課題へとつなげ、児童自らが問題点を見出し、解決策を考える力を身に付けることができると考える。

分かりやすく伝えるために 構成を考えて書く学習

日 時 平成30年6月29日（金）5校時実施

児 童 美瑛町立美瑛小学校2年1組 22名

指導者 田 村 仁

- 1 単元名 「見つけた ことを わかりやすく 書こう」
教材名 「たんけんした ことを つたえよう」 （教育出版 2年上）

2 単元について

(1) 教材観

本単元に関わる学習指導要領の目標および内容（抜粋）は、次のとおりである。

【学習指導要領】～第1学年及び第2学年（国語科）の目標と内容～

1 目 標

- (2)経験したことや想像したことなどについて、順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身に付けさせるとともに、進んで書こうとする態度を育てる。

2 内 容

B 書くこと

- (1) 書くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。
- イ 自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。
 - エ 文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いなどに気付き、正すこと。
- (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
- イ 経験したことを報告する文章や観察したことを記録する文章などを書くこと。

児童は、昨年度、「しらせたいことをかこう」の単元で、相手を意識して書くという活動をしてきている。本単元では、身の回りのことを見学したり、調べたりしたことを報告する文章を書く単元である。複数のことを羅列的に書くのではなく、一つのことを詳しく、具体的に書く方法を学ぶ。

低学年の「書くこと」では、事柄の順序を意識させて書くことが重要である。本単元で学習する報告文は、自分の経験したことを報告する文章である。経験した順に書くことで、読んでいる児童にも分かりやすい報告文になる。さらに、自分の思い（驚いたこと、嬉しかったこと、感動したことなど）も追記することで、この報告文がコミュニケーションの手段にもなり、書いてよかった、楽しかった、また書きたいという思いをふくらませる学習になる。

(2) 児童観

国語科の学習においては、単元を通して問題を解決する言語活動を設定し、目的意識をもたせた交流をする機会を設け、自分の考えを伝える場面を設定してきた。

本学級の児童にアンケートをとったところ、国語の学習は大切であると答えた児童は約95%であり、国語の学習の内容が分かると答えた児童は全体の約80%であった。しかし、国語の学習が好きだと答えた児童は、半数を少し超える程度である。また、自分の考えを順序立てて書いたり、理由を明確にして表現したりすることに抵抗感をもつ児童が約67%と非常に多い。さらに、原稿用紙の使い方、句読点の付け方、促音の表し方などに苦労している児童も多い。

これらの現状から、授業の中で自分の考えを書く活動を設定するとともに、他者との交流を通して、互いに褒め合ったり、確認したりすることで、書くことに対する自信をもたせたい。また、記述の方法についても確認する時間を設定することで、書くことの技能の向上を目指したい。

(3) 指導観

報告文は、自分が経験したことを整理して報告するという意識をもたせて取り組ませることが大切である。そこで本単元では、第2学年の児童に対し（相手）、経験したことを伝えるために（目的）、探検報告会で（場面）、報告文を使って経験したことを伝え合う活動を行う。

ここで取り扱う報告文は、低学年として「みんなに分かりやすく伝える」ためのものであり、「構成」と「経験した順に書く」ということを中心に指導する。さらに、教科書で学んだことを活用して、単元を通して自分の報告文を書き直し、身に付けた力の更なる定着を図りたい。

(4) 学びの基盤

学びの基盤に関わり、本学級では以下の点を大切にしてきた。

- ① 「教室環境の整備」について
 - ・学習用具がすぐに取り出せるよう、教具の配置の工夫に心掛けてきた。
 - ・「声のものさし」など、学習における伝え方等を掲示してきた。
- ② 「学習規律の確立」について
 - ・チャイムが鳴る前に学習準備をし、チャイムと同時に学習が始まるよう指導してきた。
 - ・学習用具の必要なものだけを机上に出したり、学習時に正しい姿勢をとったりするなど、学習に向かう心構えを整えるよう指導してきた。
- ③ 「支持的風土の醸成」について
 - ・考えや意見を最後まで聞くことやそれぞれの考えの違いを認め合うこと、発表したことに対する意見や感想をもつことを指導してきた。
 - ・話している人の方に体を向けたり、うなずく、共感するなどの反応を示したりするなど、話を聞く姿勢を中心に指導してきた。

3 単元目標

報告する内容がよく伝わるように、「はじめ」「中」「おわり」の構成を考えながら書くとともに、書いた文章を読み返し、間違いなどを正すことができる。（指導事項イ・エ）

4 評価規準

単元の評価規準		
国語への 関心・意欲・態度	書く能力	言語についての 知識・理解・技能
○町探検で分かったことを、 相手によく伝わるように報 告しようとしている。	○自分の考えが明確になるよ うに、事柄の順序に沿って 簡単な構成を考えている。 （イ） ○文章を読み返す習慣を付け るとともに、間違いなどに 気づき、正している。（エ）	○句読点の打ち方や、かぎ （「」）の使い方を理解して 使っている。（イ（オ））
学習活動における具体的評価規準		
①町探検報告文を書くことに ついて関心をもち、学習の 見通しをもとうとしている。	①知らせたいことを決め、自 分の言葉で報告文を書いて いる。 ②書くために必要な事柄を、 観点別に分けている。 ③書くために必要な事柄を、 観点に沿ってメモをとった り整理したりしている。 ④報告文を書く上での順序と 構成の工夫を探し、全体の 文章の構成を考えている。 ⑤自分の思いや考えが明確に なるように、事柄の順序や 伝えたい内容に沿って構成 を組み立てている。 ⑥探検カードのようなメモか ら、記録文へと書き換えて いる。 ⑦自分の組み立てたカードを もとに、語と語や文と文と の続き方に注意しながら、 内容のまとまりが分かる文 章を書いている。 ⑧自分の文章の間違いを正し	①読みやすい報告文になるこ とを目指して、文のつなぎ 方、句読点の打ち方や、か ぎ（「」）の使い方を理解し ている。

	たり，語と語や文と文の続き方を確かめたりしている。 ⑨文章の報告会を開き，文章の内容や表現のよいところを伝え合い，自分の考えを広げたり深めたりしている。	
--	--	--

5 単元の指導計画と評価計画

(1) 単元の指導計画における17次研究との関わり

研究内容 1－(1)② 「深い学び」を充実させる視点

問題を見出して解決策を考える姿を目指し，個の課題意識を高める場面を設定する。

本単元の学習では，「報告文を書いて，町探検の様子を紹介」し合う言語活動に取り組む。国語の学習では，単元の学習過程が児童の課題解決の過程となるよう，単元を通して問題を解決する言語活動を設定し，課題意識を持続させることが大切である。

そこで，本単元の指導計画では，児童の書きたいという思いを逃さずに書く活動に転化する場面を意図的に設定した。2時間目のまず書いてみる場面，3時間目の「探検カード」の秘密を探る場面，4，5時間目の再度見学場所に行って「探検カード」を書き直す場面等がこれにあたる。報告文がうまく書くことのできないもどかしさ，書いてはみたものの，情報が足りないことへの気付き，疑問，思い等から，個の課題へとつなげ，児童自らが，問題点を見出し，解決策を考える力を身に付けることができると考える。

(2) 単元の展開

☐ 1 単位時間の学習課題 ☒ 単元を通して問題を解決する言語活動 ☐ まとめ

時	目 標	主な学習活動	評価規準及び方法
1	◎町探検報告文を書くことについて関心をもち，学習の見通しをもつことができる。 主体的な学び	○生活科で行った町探検をもとに、『町探検報告文』を書き，クラスの友達に紹介するという学習の見通しをもつ。 ○単元を通した課題を設定する。 「町探検報告会」を開き，美瑛のまちの良いところを報告文で伝えよう。 ○課題を把握する。 報告文をどのように完成させるのか，学習の計画を立てよう。	指導 →指導に生かす評価 記録 →記録に残す評価

		○生活科で書いた記録カードを準備させ、読ませる。 ○まずは書いてみて、その後に改善するという見通しをもたせつつ、学習計画を立てる。 ○教科書の報告文例を読み、報告文とは何かを知るとともに、ゴールに対する意識を明確にする。 ○本時の学習を振り返る。	指導 <関①> 発言，ノート
2	◎知らせたいことを決め、自分の言葉で報告文を書くことができる。 主体的な学び	○課題を把握する。 記録カードをもとに、報告文①を書こう。 ○記録カードに書かれていることをもとに、報告文を書く。 ○報告文を書く。 ○報告文①の出来栄を考える。 生活科の記録カードだけでは分かりやすい報告文を書くことは難しい。 ○報告文を書くために、 ①探検カードの秘密 ②書き方の秘密 を探る必要があることを確認する。 ○本時の学習を振り返る。	記録 <書①> 報告文
3	◎書くために必要な事柄を、観点別に分けることができる。	○課題を把握する。 分かりやすい報告文を書くために、「探検カード」の秘密を発見しよう。 ○生活科で作った「記録カード」と教科書の「探検カード」を比較し、自分達でカードに書く観点を明確にする。 ○①見つけたこと ②聞いたこと ③思ったことに分けて書く点に着目する。	

		「探検カード」は、①見つけたこと ②聞いたこと ③思ったこと の 3つに分けて書くとよい。 ○見つけたことや聞いたことには、場所や具体的な数字などを書くことよいことを確認する。 ○「探検カード」を作成するために、改めて見学に向かうことを確認する。 ○本時の学習を振り返る。	指導 <書②> 発言、プリント
4・5	◎書くために必要な事柄を、観点に沿ってメモをとったり整理したりすることができる。 主体的な学び	○課題を把握する。 分かりやすい報告文を書くために、再び見学を行い、3つに分けた「探検カード」を書こう。 ○見学を通し、①見つけたこと ②聞いたこと ③思ったことの3つの観点をもとに、「探検カード」に書く。 ○場所や具体的な数字などが書かれているかも含め、友達と交流する。 ○「記録カード」と比較し、変化に気付く。 「探検カード」を3つに分けて書くことで、自分の伝えたいことがはっきりする。 ○本時の学習を振り返る。	記録 <書③> 探検カード

6 (本時)	◎ 報告文を書く上での順序と構成の工夫を探し、気付くことができる。 対話的な学び	○ 課題を把握する。 分かりやすい報告文を書くために、書き方の秘密を発見しよう。 ○ 教師の報告文例（本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いたもの）と教科書の文例を比較し、形式を発見する。 ○ はじめ、中、おわりに分かれていることに気付く。 ○ はじめの構成で、探検場所を選んだ理由が書かれていることに気付く。 ○ 中の構成で、順序を表す言葉が配置されていることに気付く。 ○ おわりの構成で、思ったことについて書かれていることに気付く。 はじめ、中、おわりに書くことを分けることで、分かりやすい報告文になる。 ○ 以前の報告文を振り返り、改善点を見付ける。 ○ 本時の学習を振り返る。	指導 <書④> 発言、プリント
7	◎ 自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序や伝えたい内容に沿って構成を組み立てることができる。 主体的な学び	○ 課題を把握する。 分かりやすい報告文を書くために、探検カードを並べ替え、文をつなげよう。 ○ はじめの部分に探検場所を選んだ理由を入れる。 ○ 「探検カード」の中のどのカードを使うか選択する。 ○ 心に残ったことを見学した順序で書くという観点で、構成を工夫する。 ○ おわりの部分で、思ったことに触れる。	記録 <書⑤> 発言、プリント

		○構成について，探検場所が同じグループに分かれて交流する。 書く順番に気を付けることで，伝えたい中身がはっきりした報告文になる。 ○本時の学習を振り返る。	
8	◎探検カードのようなメモから，報告文へと書き換えるとともに，文のつなぎ方，句読点の打ち方や，かぎ（「」）の使い方を理解することができる。	○課題を把握する。 分かりやすい報告文を書くために，探検カードをどのような文にへんしんさせればよいのだろうか。 ○段落を分けることを知る。 ○カードが常体の場合，敬体に書き換える。 ○言葉を補って文をつなげることの必要性に気付く。 ○文章を構成する上で足りない情報をカードに書き足す。 段落を分け，足りない言葉を足していくと分かりやすい報告文に近づく。 ○本時の学習を振り返る。	記録 <書⑥> 発言，プリント <言①> 発言，プリント
9・10	◎自分の組み立てたカードをもとに，語と語や文と文との続き方に注意しながら，内容のまとまりが分かる文章を書くことができる。	○課題を把握する。 今までの学習をもとに，分かりやすい報告文を書こう。 ○探検カードの構成表をもとに，報告文を書く。 ○順序を表す言葉を入れる。 ○はじめ，中，終わりの構成に注意して書く。 ○報告文①と読み比べて，成長した点を考える。	記録 <書⑦> 報告文

		組み立て表をもとに考え、順序を表す言葉を入れると、分かりやすい報告文を書くことができる。 ○本時の学習を振り返る。	
11	◎自分の文章の間違いを正したり、語と語や文と文の続き方を確かめたりするとともに、読みやすい報告文になることを目指して、文のつながり方、句読点の打ち方や、かぎ（「」）を上手に使うことができる。 対話的な学び	○課題を把握する。 より良い報告文にするため、書いた文を読み返し、間違いを直して清書しよう。 ○推敲する際の留意点（順序の言葉、段落分け、句読点や「」の使い方）について話し合う。 ○報告文を音読して、間違いを探し、チェックする。 ○近くの友達と推敲し合う。 間違いを直すことで、読みやすく、分かりやすい報告文を完成させることができる。 ○本時の学習を振り返る。	記録 <書⑧> 報告文 <言①> 報告文
12	◎文章の報告会を開き、内容や表現の良いところを伝え合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。 主体的な学び	○課題を把握する。 報告文を友達と交流し、学習を振り返ろう。 ○友達の作文の内容や表現の良いところを見付け、交流をする。 ○感想カードに記入する。 ・はじめ、中、おわりの構成 ・順序を表す言葉 ・会話文 ・具体的な数字 ○友達の作文を直したり、友達から褒めてもらったりすることを通して、自分の文章の良いところに着目する。 ○本時の学習を振り返る。	指導 <書⑨> 発言、プリント

		○単元全体の学習を振り返る。	
生 活 科	「町探検報告会」で、 町探検で知った情報を 交流することができる。	○課題を把握する。 「町探検報告会」を開き、美瑛のま ちの良いところを報告文で伝えよう。 ○探検場所の違う人同士がグループとな り、自分の見学場所ではないところの 報告を聞き、美瑛の良さに気付く。 ○友達の報告文を聞き、 ・初めて知ったこと ・面白かったことや驚いたこと ・もっと詳しく知りたいこと などを交流する。 美瑛には、自分たちの知らなかった よいところがたくさんある。これか ら探していこう。	

6 本時の学習（12 時間扱い 6／12）

(1) 目 標

報告文を書く上での順序と構成の工夫を探し、気付くことができる。 （書くこと）

(2) 本時における 17 次研究との関わり

研究内容 2－(1)① 学習課題の提示

単元の学習を見通すために、単元のゴールとなる言語活動を示すとともに、課題文に言語活動を示す。

本単元の学習では、上手な報告文を書く学習に取り組む。国語の学習では、単元の学習過程が児童の課題解決の過程となるよう、単元を通して問題を解決する言語活動を設定し、毎時間の学習がその言語活動につながるようにすることが大切である。常に目的意識をもって学習に取り組ませたいと考えた。

そこで、本時の学習では、課題を「上手な報告文を書くために、書き方の秘密を発見しよう」とし、本時の学習が単元の学習のどこに位置付くのかを確認しつつ、「町探検報告会」というゴールを意識させながら学習に取り組ませる。

研究内容 2－(1)② 解決の過程

個の主体的な学びを豊かなものにするため、学びの成果を得るに至った自分自身の課題解決の過程を自己評価させる。

国語科においては、どのような国語の力が身に付いたのか、また、どのような学習を経て理解できたのかを児童が自覚できることが大切である。

そこで、本時の解決の過程について、勉強になった考え方や友達の発表を振り返らせる。自分の学習にどうつながったのかを考えさせることにより、本時の学習を自覚することができ、次時への学習意欲や、自己評価能力の向上へとつなげていく。

研究内容 2－(2)① 論点の明確化

単元のゴールである教科書の報告文例と本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いた教師の報告文例の双方を用意し、その文例の比較をしながら、構成の工夫に気付かせる。

本時の学習では、報告文を書く上での順序の言葉や構成の工夫に気付かせることを目標としている。それらを与えられた情報で知るのではなく、自ら気付くことで、今後にも使える力として生きていくであろうと考えた。

そこで、本時の学習では、教科書の報告文例と本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いた教師の報告文例を用意し、その文例を比較させる。その中で、自分たちの書いた報告文のどこを改善すれば良い報告文にすることができるのか、最終的な視点を「構成の工夫」に絞り、段階的に気付かせていく。

研究内容 2－(2)② 思考の活性化

学習内容を確実に理解させるため、以前書いた報告文を読み直し、構成についての視点をもって改善点を考えさせる。

本時の学習を確実に理解させるためには、実際に自分で文章を読み返し、改善する点を考えることが大切である。

そこで、自分たちが前時までに書いた報告文を用いて、本時に学習した「構成」を意識して文章の改善点を考える推敲の時間を設けた。低学年では、学んだことをすぐに自分の報告文に活用させることが有効であり、1時間の中に推敲の時間を設けることで、学習の内容や方法が確実に定着することができると思う。

(3) 展 開 (6 / 12)

□ 1 単位時間の学習課題 □ 単元を通して問題を解決する言語活動 □ まとめ □ 白抜き研究との関わり

教師の活動	児童の思考や活動
1 単元を通して問題を解決する言語活動を確認させる。	1 学習計画を確認し、単元を通して問題を解決する言語活動を確認する。
「町探検報告会」を開き、美瑛のまちの良いところを報告文で伝えよう。	
2 前時までの学習を想起させる。	2 前時までの学習を想起する。
3 課題を把握させる。	3 本時の課題を確認する。
学習課題の提示 ※ノートに課題を書く。	
分かりやすい報告文を書くために、書き方の秘密を発見しよう。	
4 単元のゴールである教科書の報告文例と本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いた教師の報告文例の範読をする。	4 単元のゴールである教科書の報告文例と本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いた教師の報告文例を提示し、範読を聞く。
「2つの報告文の違いを考えながら聞きましょう。その時に、できる人は違う部分を枠で囲んだり線を引いたりしながら聞きましょう。」	・探検した場所 ・探検場所を選んだ理由 ・順序を表す言葉 ・構成の工夫
5 2つの報告文の違う部分に枠で囲んだり線を引かせたりする。	5 2つの報告文の違う部分に線を引く。
「違う部分を赤の枠で囲んだり線を引いたりしましょう。」	
6 黒板の掲示文の違う部分に付箋を貼らせる。	6 黒板の掲示文の違う部分に付箋を貼る。
「2つの違う部分に付箋を貼っていきましょう。」	
7 分かりやすい報告文とはどのような工夫がされているかを、同じ場所に付箋を貼った者同士で交流させる。	7 分かりやすい報告文とはどのような工夫がされているかを、同じ場所に付箋を貼った者同士で交流する。
「2つの報告文のうち、分かりやすいのはどちらでしょう？同じ場所に付箋を貼った人と交流しながら考えましょう。」	・はじめ、中、おわりに分かれている。 ・はじめに、探検場所を選んだ理由が書かれている。 ・中に、順序を表す言葉が配置されている。

8 全体で交流させる。 論点の明確化 ・付箋の多い部分に着目させる。 ・構成の工夫（はじめ、中、おわり）に着目させる。 ・はじめにある理由、中にある順序の言葉、おわりにある思ったことに気付かせる。	・おわりに、思ったことが書かれている。 ・分かったことが3つ書かれている。 など 8 全体で交流する。
【評価場面】 <書④>発言，ワークシート A 例文から，報告文を書く上での構成と順序の工夫を探し，自分の言葉で説明しようとしている。 B 例文から，報告文を書く上での構成と順序の工夫を探し，考えている。	
9 学習のまとめをさせる。 ・本時で取り組んだ学習について確認させる。	9 学習のまとめをする。
書くことを，はじめ，中，おわりに分けることで，分かりやすい報告文になる。	
10 以前書いた報告文を推敲するため，改善点を見付けさせる。 思考の活性化 11 本時の学習について振り返らせる。 解決の過程 (1)書き方の秘密について分かったか。 (2)今日の授業で勉強になった考え方や友達の発表を書かせる。	10 以前書いた報告文を推敲するため，改善点を見付ける。 11 本時の学習内容の理解度を4件法で振り返る。また，今日の授業で分かったことや難しかったこと，理解に結びついた場面を振り返る。

(4) 板書

まちのよさを伝える文を書くためのヒント

「まちたんけんほうこく会」をひらき、
びえいのまちのよいところをこうりゅうしよう。

わかりやすいほうこく文を書くために

書きかたのひみつをはっけんしよう。

かだい

- ・本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いた教師の報告文例の全文揭示
- ・はじめに、たんけんばしょをえらんだりゆうが書かれている。
- ・はじめ、中、おわりに分かれている。
- ・はじめに、つぎになど、じゅんじよをあらわすことばをつかっている。
- ・わかったことが3つ書かれている。
- ・おわりに、思ったことが書かれている。

教科書の報告文例の揭示
(付箋での交流の際にも使用)

書くことをはじめ、中、おわりにわかることで、わかりやすいほうこく文になる。

まとめ

ふりかえり 月 日 名前 ()

- (1) わかりやすいほうこく文を書くために、はじめ、中、おわりに分けて書くことのたいせつさについてわかりましたか。

4 3 2 1
(わかった) ← → (わからなかった)

- (2) ベンキョウになった考え方や友だちのはっぴょうを書きましょう。

--

- (3) きょうのがくしゅうでわかったことやむずかしかったことを書きましょう。

--

【本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いた教師の報告文例】

ほいく園の様子

じむ室へ 行きました。じむ室で 先生に しつもんしました。
「ほいく園には、先生と 子どもたちは、何人 いますか。」
先生は、すぐに こたえて くれました。
「先生が 十八人で、子どもは 八十五人 います。」
そういえば、それより 前に、ほいく園に つくと、先生が はたけを 見せて くれました。はたけでは、いちよう組が なすや とうもろこしの なえを うえて いました。いちよう組の 先生が、
「しつかり あなを ほりましょう。」
と 教えて いました。

二階^かの ホールを 見ました。大ホールでは、二人の先生が、たくさんの ふとんを しいて いました。
左がわの 小ホールには、うめ組が きゅうしよくを たべて いました。うめ組には、妹が います。妹は、ぼくを 見て、「どうして。」と いう かおを して いました。

【教科書の報告文例】

ほいく園の様子

ぼくは、生活科の 時間に 町たんけんで 行ったほいく園の 様子を 書きます。
どうしてかと いうと、妹が ほいく園に かよっているからです。また、ほいく園では、どのようなことを しているのかも しりたかったからです。

ほいく園に つくと、はじめに、先生が はたけを 見せて くれました。はたけでは、いちよう組が なすや とうもろこしの なえを うえて いました。いちよう組の 先生が、
「しつかり あなを ほりましょう。」
と 教えて いました。

つぎに、じむ室へ 行きました。じむ室で 先生にしつもんしました。
「ほいく園には、先生と 子どもたちは、何人 いますか。」
先生は、すぐに こたえて くれました。
「先生が 十八人で、子どもは 八十五人 います。」

さいごに、二階^かの ホールを 見ました。大ホールでは、二人の 先生が、たくさんの ふとんを しいて いました。
左がわの 小ホールでは、うめ組が きゅうしよくを たべて いました。うめ組には、妹が います。妹は、ぼくを 見て、「どうして。」と いう かおを して いました。

ほいく園を たんけんして、ぼくが かよって いたようち園とは ちがう ところを 見つけました。とくに、先生の 数が 多い ことに おどろきました。

7 研究協議の主な内容

(1) グループ協議の内容

【研究内容 2-(1)② 解決の過程】

- ・自己評価能力を高めるために自己評価を蓄積することはとても有意義であり、短時間でも積み上げることでより効果が上がる。
- ・振り返りカードの中に「難しかったけどまたやりたいです」と書いている児童がいた。振り返ったことが次につながっており、もっとできるようになりたい、分かるようになりたいという学ぶ意欲を引き出し、自分自身をしっかりと見つめ直す、素晴らしい振り返りであった。
- ・学習の最後に学び方の振り返りを行うことにより、自己評価能力の育成につなげることができた。
- ・確かな力を身に付けるために、振り返りとして書かせる視点を明確に示す必要がある。

【研究内容 2-(2)① 論点の明確化】

- ・論点を明確にすることで、児童が本時で把握する必要のある言葉に気付くことができた。
- ・違いを見付けやすくするために全文を提示することで、児童が違いを見付けるという学習活動に自信をもって取り組むことができた。
- ・付箋を貼ることで児童達の考えが可視化されていたことが良かった。また、付箋を貼るだけなので、どの児童にも取り組みやすい良さもあった。
- ・報告文の定義について、児童に確認することが必要であった。
- ・児童に2つの文を比べる目的をはっきりさせるために、発問の工夫が必要であった。

【研究内容 2-(2)② 思考の活性化】

- ・思考の活性化として推敲に取り組ませることにより、はじめ、中、終わりの構成を意識して取り組む姿が見られた。
- ・自分の文章を直したいという気持ちが活動に表れていた。
- ・対話の時間の確保及び困っている児童への支援という視点から、本時の学習内容を「構成を学ぶ時間」として理解させ、次時に推敲の時間を設定することも考えられる。

(2) 指導主事の助言

《上川教育局教育支援課義務教育指導班指導主事 中嶋 由佳》

① 思考を広げるための論点を明確にした話合いの工夫について

- ・話合い活動をする際には、話し合う論点を明確にすることが大切である。本時では、2つの文章を比較し、違いはどこにあるのかという論点で交流させた。その後の全体交流では、「順序を示す言葉があるとなぜ良いのか？」という問いかけにより、論点が焦点化され、充実した話合い活動となっていた。
- ・「はじめ」が書かれていることにより、ある児童が「理由が書いてあって分かりやすい」と発言した。2つの文章を比較させることで、教師がねらっていた構成の工夫に児童が気付いた瞬間であった。

② 確かな学びにつながる思考の活性化について

- ・単元や本時の目標に迫り、学習内容のより確実な定着を図ることが必要であり、「分かったつもり」を「確かな分かった」につなげるよう、意図的に学習展開を工夫することが大切である。
- ・友達の発表や先生の説明を聞いて「ああなんとなく分かった」となっていたものを、自分の報告文に生かし、「本当に分かった」につなげる活動として、推敲の時間が位置付けられていた。
- ・「はじめに、次に、最後に」という順序を表す言葉と、「はじめ、中、終わり」という構成の工夫を混同して理解してしまっている児童もいたので、書き直していく時間の中で補ってほしい。

③ 単元の指導計画の工夫について

- ・学習指導要領では、単元や題材など、内容や時間のまとまりを見通した単元の構想をすることが求められている。
- ・学習全体を見通す場面を最初に位置付け、単元の最後には、この単元を通して自分が学んだこと、できるようになったことを振り返る場面が、しっかりと位置付けられている。
- ・「最後にこんなことができるような児童にしたい」、「こんな姿にしたい」、「そのためにこの時間ではどんな内容をどれぐらいやるのか」ということを意識して単元を構想することが大切である。

8 事後分析

(1) 「深い学び」を充実させる視点

国語科の「書くこと」領域において、低学年では特に「書きたいという思いを逃さずに書く活動に転化する」ことが大切である。そこで、本単元では、児童の「書きたい」という思いを高めるため、問題を見出して解決策を考える姿を目指す「個の問いの顕在化、切実な課題の設定」の視点を重視し、単元構成を行った。

まず、「切実な課題の設定」として、単元の2時間目に、生活科で行った探検と、それを記録したカードをもとに、報告文を書かせた。この活動により、記録カードだけでは分かりやすい報告文を書くことは難しいことに自ら気付く、報告文を書くための取材と、報告文に必要な技能の2つの側面からの学びが必要であることを理解し、上手な報告文を書きたいという意識を高めることにつなげた。

次に、「個の問いの顕在化」を図るため、単元の3～5時間目に、教師が教える場面として教科書の例示と使用した記録カードを比較し、記録カードの改善点を考えさせるとともに、児童が考える場面として、改善点を反映させた記録カードを使って、再度見学の時間を設定した。記録カードの改善点を考えさせたことで、以前はただ発見したことを箇条書きで記述していたが、「見たこと」「聞いたこと」「思ったこと」などに分けることにより、書きたいことが明確になることに気付くことができた。再度見学の際には、探検カードに分類ごとに分けて記載するとともに、具体的な数値や、実際に会話したことなどについても記録するなど、主体的な学びへとつなげることができた。

単元の6時間目は、個の問いを顕在化するために、教科書の報告文例と本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いた教師の報告文例を比較させるとともに、自分が書いた文章

を推敲する時間を設定した。この時間に学んだ「はじめ・中・終わり」の構成の工夫をすぐに使って推敲できるため、学習内容や方法の定着につなげることができた。

このような単元構成を行ったことにより、12時間目に報告文を友達と交流した場面では、互いの報告文の内容や書き方の良いところに着目し、自分の文章の良いところに気付き、書くことへの意欲をさらに高めることにつなげることができた。

(2) 学習課題の提示について

国語の学習では、単元の学習過程が児童の課題解決の過程となるよう、単元を通して問題を解決する言語活動を設定し、毎時間の学習がその言語活動につながるようにすることが大切である。そこで、本時の学習では、課題を「上手な報告文を書くために、書き方の秘密を発見しよう」とし、本時の学習が単元の学習のどこに位置付くのかを確認することで、「町探検報告会」というゴールを意識させながら学習に取り組ませた。

単元のゴールを確認し、意識させるとともに、報告文の書き方に焦点を当てた課題を設定することで、児童は目的意識をもち続けて活動に取り組むことができた。

(3) 解決の過程

本単元の学習では、学習内容に対しての理解度を明確に把握させ、学習の過程を振り返らせることで、次時の学びにつなげることが大切である。そこで、学習の終わりに自己の変容に気付かせるための自己評価を位置付けた。

児童は、自分の理解度を4件法と記述で振り返ることにより、その時間の学びがどうであったのかを具体的に振り返ることができた。また、学習の過程を振り返らせることで、自分の学習の成果を実感させ、今後の学習の見通しをもたせることができた。ただ、振り返りの視点についてはさらに吟味する必要がある。

(4) 論点の明確化

本時の学習では、報告文における「はじめ、中、終わり」の構成について理解することが大切である。そこで、構成に着目できるように、教科書の例文と、本時の学習内容に関わる部分を意図的に抜いた教師の例文を比較させるとともに、どこが違うのかを付箋を用いて示させた。

児童は、黒板の前に貼ってある付箋をもとにして違いを全体で交流することにより、構成のはじめには理由が、終わりには思ったことが書かれていることに気付くことができた。

(5) 思考の活性化

本時の学習内容を確実に理解させるためには、自分で書いた文章を読み返し、改善する点を考えることが大切である。そこで、本時の学習では報告文を推敲させる活動を設定した。

推敲する活動で、本時の学習で学んだことを活用する場面を設定したことにより、本時の学習内容を確実に理解することにつながった。

児童は、構成の初めには理由を、構成の終わりには思ったことや感じたことを書くことができた。構成の工夫と順序の言葉を混同する児童がいたことから、推敲する際の視点をより明確にしておく必要があった。

9 本実践を通じた成果と課題

<研究内容2-(1)① 見通し>

- 単元を通じた言語活動を「町探検報告会を開き、美瑛の町の良いところを報告文で伝えよう」と設定し、常に本時の導入の場面で確認を続けたことにより、単元のゴールを意識して学習を続けることができた。
- 単元の初めに「分かりやすい報告文」について確認したが、そのイメージを全体で共有することが難しい現状であったことから、毎時間確認するなど丁寧な指導が必要であった。

<研究内容2-(1)② 振り返り>

- 毎時間の終末場面に振り返りを継続的行ったことにより、次時への意欲の向上につながった。
- 学習の過程を振り返る際、どの部分がどのように良かったのかを具体的に振り返らせる必要があった。

<研究内容2-(2)① 思考を広げる対話>

- 2つの例文を比較したり付箋を活用したりすることで、構成の工夫や順序の言葉に気付くことができた。
- 全体交流を通して、文章の違いから分かりやすい報告文を書くためのポイントへと児童の考えを広げるきっかけを作ることができた。
- ただの情報交換や一方的な教えにならない対話にするために、対話が必要な場面とその理由を精査していく必要がある。

<研究内容2-(2)② 確かな学びに向かう対話>

- 学んだことを自分の報告文に活用する場面を、意図的に細分化して設定したことにより、即座に学習内容を転化することができ、学習内容の確実な理解につなげることができた。
- 単元の終末において、交流を通して報告文を推敲する場面を設定したことにより、自分では気付くことのできなかった改善点を発見し、より読みやすく相手に伝わる報告文へと近付けることができた。
- 単元を通して相手意識や目的意識を明確にした交流を継続したことにより、お互いに気付かなかったことに気付かせる学習活動を展開することができ、自分の考えをより確かなものにする学習へとつながった。
- 低学年という発達段階や時間配分などを考慮し、より効果的に資質・能力を高めることができるよう単元構成を工夫する必要がある。

10 研究ノート

(1) 単元の2時間目と12時間目の作文を比較することで見られる児童の変容

【単元2時間目の作文】

美瑛町立美瑛小学校

がソリンスタンドのようす

わたしは、がソリンスタンドを
たんけんしてきました。がソリン
がなくなりそうにな。たらち
もんすると言。てました。がソリ
ンは、外国からあさひ川までふね
ではこぶそうです。ねだんがかわ
るのは、がソリンが上るとがソリ
ノスタンドも上ないといけないし
下るとがソリンスタンドも下ない
といけないと、言。てました。
タイヤのし。るいもきました。
タイヤのし。るいは太し。るいと

【単元12時間目の作文】

美瑛町立美瑛小学校

がソリンスタンドのようす

わたしは、がソリンスタンドに
行きました。
えらんだりゆは、がソリンの
ねだんがどうしてかわるのかがし
りたか。たからです。
はじめに、
車はなんたいくくるんですか。
と聞くと、
「2500だいから3000だいまで
くる。」
と、言。てました。
よくくる人は、

単元の2時間目では、聞いた情報を羅列する文章になっていた。そのため、伝えたい内容が明確ではなく、分かりにくい報告文であった。単元の中で再取材、文章構成の工夫などを学習したことで、探検場所を選んだ理由を加えたり、伝える内容を精選したりすることができ、読み手を意識した分かりやすい報告文を書くことができるようになった。

(2) 深い学びを充実させる単元構成の工夫

問題を見出して解決策を考える力を育成するために、個の課題意識を高める場面を設定することで、児童の深い学びを充実させることを目指した。そこで、本単元において、どのように個の課題意識が高まっていったか、本単元の指導計画と児童の姿で紹介する。

児童の書きたいという思いを逃さずに書く活動に転化する場면을意図的に設定した単元構成

単元の指導計画

時	学習課題（○）と主な学習活動（・）
1	単元を通した課題 「町探検報告会」を開き、美瑛のまちの良いところを報告文で伝えよう。 ○報告文をどのように完成させるのか、学習の計画を立てよう。 ・生活科で書いた記録カードを準備させ、読ませる。 ・生活科で書いた記録カードをもとに、まずは書いて、その後に改善するという単元の見通しをもたせる。
2	○記録カードをもとに、報告文①を書こう。 ・報告文を書き、出来栄えを考える。 ・報告文を書くために、①探検カードの秘密 ②書き方の秘密 を探る必要性を確認する。
3	○分かりやすい報告文を書くために、「探検カード」の秘密を発見しよう。 ・①見つけたこと ②聞いたこと ③思ったこと に分けて書く点に着目する。
4	○分かりやすい報告文を書くために、 ・再び見学を行い、3つに分けた「探
5	検カード」を書こう。 ・見学を通し、3つの観点をもとに、「探検カード」に書く。

「美瑛の町の良いところ」を伝えるために、生活科で行った探検の際に記録したカードをもとに、報告文を書くぞ！

本 時

○分かりやすい報告文を書くために、書き方の秘密を発見しよう。

- ・教師の報告文例と教科書の文例を比較し、形式を発見する。
- ・以前の報告文を振り返り、改善点を見付ける。

【2度目の探検後、報告文の書き方の秘密を掘り下げ、上手に書きたいという意識の向上を図る場面】

書いてみたけど失敗。何を直せばうまく書けるのだろう？

【児童に敢えて失敗させることで、個の課題意識の向上を図る場面】



改善した探検カードをもとに、再び探検に出發だ！

【児童の「再度見学に行つて探検カードを書き直したい」という思いを生かす場面】



さあ、今までの勉強をもとに、報告文を書くぞ！

【8時間目までの学習をもとに、書きたいという思いを形に表す場面】



同じ探検グループで報告文を見直して、より良く直そう！

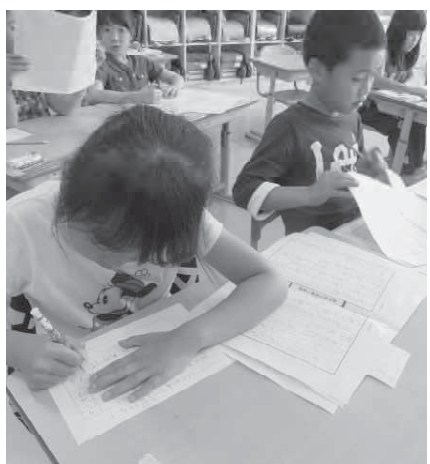
【さらに良いものにしようとする個の課題意識をさらに高める場面】



最終ゴール

交流を通して良い部分をたくさん褒めてもらった。友達の良い部分は今度真似してみよう！

【自らの成長を振り返り、次時への意欲化を図る場面】



7	○分かりやすい報告文を書くために、探検カードを並べ替え、文をつなげよう。 ・「探検カード」の中のどのカードを使うか選択する。 ・構成について、探検場所が同じグループに分かれて交流する。
8	○分かりやすい報告文を書くために、探検カードをどのような文に変身させればよいのだろうか。 ・段落を分けること、敬体を使うこと、文を補うことの必要性に気付く。
9	○今までの学習をもとに、分かりやすい報告文を書こう。
10	・探検カードの構成表をもとに、報告文を書く。 ・報告文①と読み比べて、成長した点を考える。
11	○より良い報告文にするため、書いた文を読み返し、間違いを直して清書しよう。 ・推敲する際の留意点について話し合う。 ・近くの友達と推敲し合う。
12	○報告文を友達と交流し、学習を振り返ろう。 ・友達の作文を直したり、友達から褒めてもらったりすることを通して、自分の文章の良いところに着目する。 ・単元全体の学習を振り返る。
生活科	○「町探検報告会」を開き、美瑛の町の良いところを報告文で伝えよう。 ・探検場所の違う人同士がグループとなり、自分の見学場所ではないところの報告を聞き、美瑛の良さに気付く。

上川教育研修センター研究協議の流れ

○全体説明～協議の流れ

<研究内容2のグループ討議、演習、発表> (30分)

- ① 参観者は各自、本時での2つの観点から自分で選んだグループに移動する。
 - ・ 研究内容2-(1) ・ 学習課題の提示
・ 解決の過程
 - ・ 研究内容2-(2) ・ 論点の明確化
・ 思考の活性化
- ② 発表者をグループ内で互選する。
- ③ 協議メモに書いた内容を紹介し合う。
- ④ 模造紙に意見をメモしながら、項目ごとに成果と課題をグルーピングする。
- ⑤ 発表者は、成果と課題をグルーピングしたものに小見出しを付け、画用紙をホワイトボードに掲示する。

<全体交流>

- ① 発表者が前に出て、各グループで出された成果と課題を1点ずつ発表する。
- ② 全体の成果と課題を司会が確認する。

<研究内容1のリフレクションタイム> (20分)

- ① 活動前に説明
- ② 本単元における、指導計画について振り返りをする。(KKAシート)*
- ③ グループ内で感想と記述内容の交流をする。
- ④ アンケート記入タイム

研究内容1

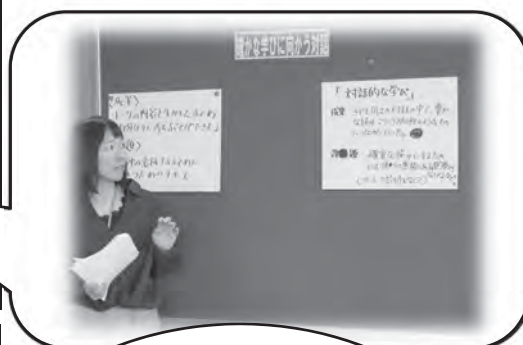
思考し問い続ける過程の重視
既習内容や経験と関連付けた思考の促進
個の問いの顕在化、切実な課題の設定
資質・能力が活用・発揮される場面の設定

※KKAシートとは、センターで作成したリフレクションシートであり、K:昨日までの実践、K:今日学んだこと、A:明日から取り組みたいことの3つの項目で構成されている。

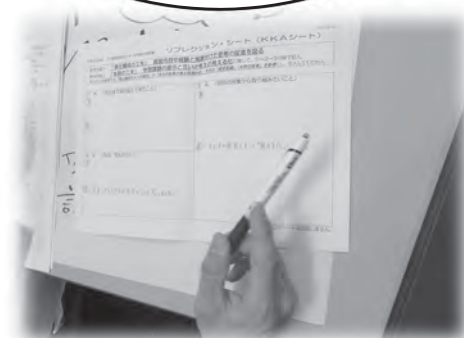


授業参観する際には、こちらの協議メモに気付いたことを観点別に記入していきます。

授業後の研究協議では、記入した協議メモをもとに、自分で協議グループを選択します。



KKA シートは、単元全体を個人で振り返り、明日からの日常での授業に活用してもらうことを目的としているため、記入後のシートは回収せずに、持ち帰ってもらいました。



第Ⅳ章 研究協力校の授業実践

○旭川市立朝日小学校 第5学年 理科
授業者 福島 顕 勝 教諭
研究部 石塚 泰 鑑 教諭

○旭川市立高台小学校 第4学年 算数科
授業者 森 走 平 教諭
研究部 関 山 雅 人 教諭

○旭川市立大町小学校 第6学年 国語科
授業者 鈴木 一 朗 教諭
研究部 荒井 香 織 教諭

○比布町立比布中学校 第1学年 社会科
授業者 梶 田 貴 裕 教諭
研究部 渡 邊 舞 子 教諭

平成30年度 上川教育研修センター協力校研究授業（旭川市立朝日小学校）

時	主な学習活動
1	○流れる水や川について、今まで自分が経験してきたことや授業で学んできたことなどを想起する。 ○ペーパン川が増水したときの写真、牛朱別川が増水したときの映像、石狩川が増水したときの写真を見て、流れる水がもつ力のすごさを知る。 ○日常では穏やかで小さな川（ペーパン川）でも、増水時には川が激変して決壊し、氾濫することがあるという自然災害の恐ろしさに気付く。 ○単元を通して学習問題を設定する。 水害を引き起こすほどの流れる川の水には、どのような働きがあるのだろう。 ○本時の学習を振り返る。
2	○学習課題を把握する。 学習計画をつくり、学習の見通しをもとめる。 ○流れる水の働きとは何かについて考える。 ○流れる水の働きを確かめる実験方法を考える。 ○水害を引き起こすほどの流れる水の働きは、場所によって違うことを考える。 ○単元を見通した学習問題を解決するには、どのような順番で学習すればよいかを検討する。 川の上流・中流・下流の違い、流れる川の水の働きや水量が増える原因を追究すれば、水害を引き起こすほどの流れる川の水の働きが解明できそうだ。 ○本時の学習を振り返る。
3	○学習課題を把握する。 上流、中流、下流では、どのような違いがあるのだろう。
4	○石狩川の上流（大雪山）、中流（旭川）、下流（札幌）の写真を見る。 ○上流、中流、下流の違いについて、教科書やインターネットを使って表や図にまとめる。全国の川のとも比較する。 ○実際の自然現象にあてはめるとどうなのか、その共通性を考える。 ○教科書の写真や映像を見て、流れる水の働きの何にあてはまるのか、自分の言葉で説明する。 ○本時のまとめをする。 上流：傾斜は急。川幅は狭い。流れは速い。石は多くて角ばっている。 中流：傾斜は少し緩くなる。川幅は少し広い。石は大きい。川原がある。蛇行が見られる。 下流：傾斜はゆるい。川幅は広い。流れはゆっくり。石は丸くて小さい。 ○本時の学習を振り返る。
5	○学習課題を把握する。 流れる水には、どのような働きがあるのだろう。 ○予想を立て、実験結果を予想しながら実験方法を考える。 ①地面を削る働き ②土や石を運ぶ働き ③土や石がたまる働き ○検証実験では、条件制御の考え方を働かせて何を揃えるのかを確認する。 ○実験計画を立てる。 ○本時の学習を振り返る。
6	○学習課題を把握する。（前時からの続き） 流れる水には、どのような働きがあるのだろう。
7	○予想が正しければ、得られるはずの実験結果がどうなるのかを確認する。 ○検証実験をする。 ・川を直線にして調べてみる。 ・川をS字（蛇行）にして調べてみる。 ○実験結果を記録する。 ○予想と実験結果を同時に確認することができるワークシートを活用して実験結果を整理する。 ○自分で考えた予想、グループ内でワークシートを活用した対話、他のグループとの実験結果の交流を通して流れる水の働きについて分析・考察をする。 ○本時のまとめをする。 流れる川の水には、土を削ったり、運んだり、積み重なったりする働きがある。 これらの働きを、侵食、運搬、堆積という。 ○本時の学習を振り返る。
8	○学習課題を把握する。 流れる水の量を増やすと、流れる水の働きはどのように変わるのだろう。 ○流れる水の働きがどうなるのか、実験結果を予想しながら実験方法を考える。 ○検証実験では、条件制御の考え方を働かせ、変える条件は水の量であることを確認する。 ○実験の分担と記録の仕方を確認する。 ○本時の学習を振り返る。
9 (本時)	○学習課題を把握する。（つづき） 流れる水の量を増やすと、流れる水の働きはどのように変わるのだろう。 ○検証実験の予想や実験方法、記録の仕方、条件制御で変えるものを確認し、実験の準備をする。 ○検証実験をする。 ○実験結果を記録する。 ○予想と実験結果を同時に確認することができるワークシートを活用して実験結果を整理する。 ○自分で考えた予想、グループ内でのワークシートを活用した対話、他のグループとの実験結果の交流を通して、流れる水の働きについて分析・考察をする。 ○本時のまとめをする。 流れる水の量を増やすと、「侵食」「運搬」「堆積」の働きが大きくなる。 ○本時の学習を振り返る。

研究内容1-(1)②

深い学びを充実させる視点

【知識を相互に関連付けてより深く理解する姿を目指し、既習内容や経験と関連付けた思考の促進を図る単元構成を行う。】

そのために

「習得的な学び」と「活用的な学び」を意図的に組み合わせた単元構成を行う。

5・6・7時間目

流れる水の働きについて、予想と実験方法を考え、実験を通して、侵食・運搬・堆積という働きがあるという知識を得る「習得的な学び」の時間を設定。

8・9時間目

水の量を増やしたときの流れる水の働きを追究する「活用的な学び」の時間を設定。

11・12時間目

今までに学んだ流れる水の働きを使って水害のメカニズムを説明したり水害を防ぐ工夫を考えたりする「活用的な学び」の時間を設定。



「習得的な学び」と「活用的な学び」を意図的に組み合わせていくことで、いつでも、どこでも未知の状況においても活用できる、質の高い知識・技能となって、児童の思考に蓄えられていくと考える。

学んだことを自然現象に当てはめて活用する学習

日 時 平成30年9月11日（火）6校時 実施

児 童 旭川市立朝日小学校5年1組 38名

指導者 福 嶋 顕 勝

<学校の概要>

学校の様子	朝日小学校の校区は、旭川市東部の朝日地区に位置し、東方遥かには大雪山連峰を望むことができる。子供たちは元気はつらつとして学習活動に励んでいる。近年、校下は大規模マンション等の建設により人口の動向は見られるが、児童数は減少傾向にある。 本校は、①学校生活の基盤となる「しなやかな」学年・学級経営、②インクルーシブ教育の考え方による特別支援教育、③「進んで学ぶ子」を育む教育課程の編成・実施・評価、④目標と高い志を大切にしたいチーム力・学校力の向上の充実を図り、「世界に目を広げ進んで学び 豊かな心で未来を拓く たくましい子」の育成に向けて取り組んでいる。
研究の内容	子供が主人公の学習を創造する ～主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善～ 子供が『深い学び』に至るために、「どのように学んでいく子にしたいのか」「どんなことを理解させたいのか」という『目的意識』を教師が明確にもち、それをしっかり位置付けた単元レベルの授業づくりを目指している。 【研究内容1】 見通しをもたせる工夫 【研究内容2】 学びをつなぐ教師のはたらきかけ 【研究内容3】 丁寧で確かな振り返りの設定

1 単元名 「流れる水のはたらき」（教育出版 5年）

2 単元について

(1) 教材観

本単元に関わる学習指導要領の目標および内容（抜粋）は、次のとおりである。

【学習指導要領】～第5学年（理科）の目標と内容～

1 目 標

- (1) 流水の様子を条件、時間、水量、自然災害などに目を向けながら調べ、見いだした問題を計画的に追究する活動を通して、生命を尊重する態度を育てるとともに、流水の働きの規則性についての見方や考え方を養う。

2 内 容

B 生命・地球

- (3) 地面を流れる水や川の様子を観察し、流れる水の速さや量による働きの違いを調べ、流れる水の働きと土地の変化の関係についての考えをもつことができるようにする。

ア 流れる水には、土地を侵食したり、石や土などを運搬したり堆積させたりする働きがあること。

イ 川の上流と下流によって、川原の石の大きさや形に違いがあること。

ウ 雨の降り方によって、流れる水の速さや水の量が変わり、増水により土地の様子が大きく変化する可能性があること。

本内容は、第4学年「B(3)天気の様子」の学習を踏まえ、「地球」についての基本的な見方や概念を柱とした内容のうちの「地球の内部」、「地球の表面」にかかわるものである。ここでは、地面を流れる水や川の働きについて興味・関心をもって追究する活動を通して、流水の働きと土地の変化の関係について条件を制御して調べる能力を育てるとともに、それらについての理解を図り、流水の働きと土地の変化の関係についての見方や考え方を養うことができるようにすることがねらいである。

平成30年度実施した全国学力・学習状況調査の理科では、「地球」に関する問題として増水による土地の変化について出題された。「知識」の問題として堆積作用について、科学的な言葉や概念を理解しているか、また、「活用」の問題として実際の自然や日常生活などの他の場面や他の文脈において、学習で身に付けた知識・技能を活用しているかどうかを問うものであった。特に平成27年度の実施において「課題として見られた、予想が確かめられた場合に得られる実験結果を見通して実験を構想すること」や「より妥当な考えをつくりだすために、実験結果を基に分析し、考察して、その内容を記述すること」に今回も課題が見られたため、予想が確かめられた場合に得られる実験結果を見通して実験を構想することを重視していく。

(2) 児童観

児童は、「台風接近」で、台風は洪水や土砂崩れなどの災害を起こす可能性があることを学んでいる。また、本校で実施した「防災教室」（水害）では、集中豪雨等で川が増水したときに、自分の命を守るために目の前に起きていることをどう判断し、どう行動すればよいのかを学習している。

事前アンケートで児童の実態を把握するとともに、本年度の全国学力・学習状況調査の本校第6学年及び全国の実態を踏まえる。

【事前アンケート】

①	理科の勉強は好きだ。	89%	⑦	地面に足のかかとでコースを掘り、溜まった雨水を川のように流して遊んだ経験がある。	70%
②	理科の授業の内容はよくわかる。	94%	⑧	大人と一緒に川へ行き、川の石を集めたり、石投げをして遊んだりした経験がある。	65%
③	理科の学習は大切だ。	95%	⑨	旭川市以外の川の上流や下流の方へ行って、川の様子を実際に見たことがある。	30%
④	観察や実験の進め方や考え方が間違っていないか振り返っている。	74%			
⑤	自分の考えがうまく伝わるよう文章や話の組立てなどを工夫して発表している。	65%			
⑥	理科の学習を普段の生活の中で活用できないか考えている。	76%			

【平成30年度全国学力・学習状況調査 理科】

	調査項目	本校	全国
①	堆積作用について、科学的な言葉や概念を理解している。	91.2%	83.6%
②	土地の侵食について、予想が確かめられた場合に得られる結果を見通して実験を構想できる。	52.9%	55.4%
③	より妥当な考えをつくりだすために実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述できる。	29.4%	20.1%
④	より妥当な考えをつくりだすために、複数の情報を関係付けながら、分析して考察できる。	61.8%	59.8%

第Ⅳ章

事前アンケートによると、理科の授業に対しては興味・関心が高い。しかし、実験を構想することや根拠を基に説明すること、多様な視点から自分の考えを振り返ること、学習したことを実際の自然や日常生活にあてはめて用いることに課題が見られた。これらのことから、流れる水や川が児童にとって身近な存在ではないと考えられる。

平成 30 年度全国学力・学習状況調査より、理科として、より妥当な考えをつくりだすために、実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述できること、土地の侵食について、予想が確かめられた場合に得られる結果を見通して実験を構想できることなどに課題があることが分かった。

そこで、理科室でのモデル実験と実際の川とを関連を付けながら、実感を伴った理解を図っていくことが重要であると考ええる。

(3) 指導観

児童が主体の学習になるためには、単元の目標や児童の実態を的確に把握し、児童に身に付けさせたい資質・能力を明確にしながら、問題解決に向かって児童の思考が流れるように学習計画を構想することが大切である。

また、深い学びを実現するためには、児童が強い問題意識の基でモデル実験等を行い、主体的に問題解決した結果として知識を確実に獲得する「習得的な学び」と、実際の自然や日常生活などの他の場面において、学習で身に付けた知識・技能を活用する「活用的な学び」とを有機的に組み合わせることが重要だと考え、単元をデザインした。

本単元では、平成 30 年 7 月に旭川市内を襲った大雨による洪水や冠水などの被害から、身近に起こりうる自然災害に適切に対応することにつながる学習を根底に、実験や資料等を活用しながら流水の働きを見いだし、水害のメカニズムを追究する学習を展開していく。

事象との出会い、問題設定場面では、旭川市を流れる普段の石狩川、牛朱別川の様子と 7 月 3 日の大雨時の川の様子を比較させながら、流れる水の働きの大きさに驚くような事象との出会いを工夫する。そこから「流れる水のパワーってすごいんだ」「水害を引き起こす流れる水の働きってどのようなものなのか」という学習問題につなげ、単元のゴールイメージを児童にもたせる。

問題追究場面では、問題を解決するために必要な知識・技能を獲得する場面を設定する。まず、流水の働き「侵食」「運搬」「堆積」について実験を通して理解させ、次に、流れる水の速さや量による働きの違いについて、特に実験結果を見通して実験を構想したり、実験結果を基に分析し、考察したりする問題解決能力を育成しながら学習問題を解決するための知識を蓄える。さらに、上流から下流の様子、川原の石の大きさや形など、川そのものについて理解させる。

まとめの場面では、水害発生メカニズムについて、獲得した知識や技能を関連付けながら、自分の言葉で科学的に分かりやすく説明できるようにする。さらに、理科を学んでいることが身近な自然現象や私たちが生きている生活とも密接なつながりがあることにも気付かせていく。

活用場面では、川による災害とその対策について考えることで、災害を防ぐための工夫や取組について理解を広げさせていく。

また、「パフォーマンス・シート」を活用し、児童に学習内容の定着状況を確認させた

り，学びの成長を実感させたりしていく。

(4) 学びの基盤

学びの基盤に関わり，本学級では「学びに向かう集団づくり」に取り組んできた。

① 「教室環境の整備」について

- ・ユニバーサルデザインを取り入れ，教室正面掲示については，全学級統一され，児童の視覚に入る情報を精査している。
- ・日常的に ICT を活用できるよう，大型テレビ，タブレット，インターネット環境を整備している。

② 「学習規律の確立」について

- ・児童が達成状況を確認しながら取り組んでいる。
「本気で勉強に取り組む」～学習道具，机上の整頓，姿勢について。
「話をよく聞く」～話し手の意図をつかみながら聞く。大事なことはメモしながら聞く。
「考えをのべる」～根拠を明らかにして自分の考えを話す。相手の考えを引用したりまとめたりして話す。

③ 「支持的風土の醸成」について

- ・「心をこめてあいさつする」「はっきりと返事をする」「友達のよさを認め合う」ことを意識させている。

3 単元の目標

流れる水の働きの規則性について，「時間的・空間的」なものの見方や「条件を制御する」考え方を働かせながら解決の方法を発想し，水の流れによってどのように地形が変化していくのかをより深く理解している。

4 評価規準

単元の評価規準			
自然事象への関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象についての知識・理解
○自然の力の大きさを感じとり，流れる水や川の様子を意欲的に追究しようとしている。	○流れる水や川の様子と流量や流速との関係に問題を見だし，計画的に追究して，流れる水のはたらきと土地の変化について考察し表現している。	○流水による土地の変化について調べ，その結果を記録できる。	○流れる水のはたらきと土地の変化との関係について理解している。
学習活動における具体的評価規準			
① 増水した川の映像を見て，流れる水の働きに興味・関心をもって，自分なりの学習課題をもとうとしている。 ② 増水した川の映像を	① 流れる水の働きについて自分の予想を確かめる適切な実験方法を考え，表現している。 ② 流れる水の働きについてモデル実験と実	① 流れる水の働きについてモデル実験をして確かめ，その結果を記録できる。 ② 川の上流，中流，下流の違いについて資料等を活用して調べ，そ	① 流れる水には，土地を侵食したり，石や土などを運搬したり堆積させたりする働きがあることを理解している。 ② 川の上流，中流，下

第Ⅳ章

見て、流れる水の働きに興味・関心をもち、学習の見通しをもとうとしている。 ③ 流れる水の働きで学習したことを、身近な自分の生活や水害などの災害に当てはめようとしている。	際の川の様子とを関係付けて考え、表現している。 ③ 流れる水の働きを基に災害を防ぐための工夫について考え、表現している。	③ の結果を記録できる。長雨や集中豪雨により川が増水することについて資料等を活用して調べ、その結果を記録できる。	流によって川原の石の特徴や川の様子が違うことを理解している。 ③ 川が増水すると土地が大きく変化して災害が起きる場合があり、災害を防ぐための工夫や取組がなされていることを理解している。
---	---	--	---

5 単元の指導計画と評価計画

(1) 単元の指導計画における 17 次研究との関わり

研究内容 1-(1)② 「深い学び」を充実させる視点

知識を相互に関連付けてより深く理解する姿を目指し、既習内容や経験と関連付けた思考の促進を図る単元構成を行う。

本単元の学習では、地面を流れる水や川の働きについて興味・関心をもって追究する活動に取り組む。いつでも、どこでも未知の状況においても活用できる、質の高い知識・技能を身に付け、それらの知識を相互に関連付けてより深く理解する姿を目指すためには、「習得的な学び」と「活用的な学び」を教科や領域の特性や単元、題材などのまとまりの中で意図的に組み合わせていくことが大切である。

そこで、本単元の指導計画では、3，4 時間目で川について知識を得る時間を設定した。児童は、今までの生活経験や既習事項と 3，4 時間目で獲得した知識を土台に、5 時間目以降の課題解決に取り組んでいく。8，9 時間目に水の量を増やしたときの流れる水の働きを追究し、11，12 時間目に今までに学んだ流れる水の働きを使って水害のメカニズムを説明したり、水害を防ぐ工夫を考えたりする「活用的な学び」を授業の中に意図的に設定し、「習得的な学び」と組合せることで、質の高い知識・技能を身に付けさせることができると思う。

※下線部について、朝日小学校では、「習得的な学び」と「活用的な学び」を次のようにおさえている。

「習得的な学び」とは、今までの生活や学習の中で既に獲得してきた様々な知識・技能を整理したり、適切なものを選択したり、つなげたりしながら学習問題を解決するための土台づくりを行っていくものである。

「活用的な学び」とは、各教科等における「見方・考え方」を働かせながら問題を解決したり、解決策を創造したりする追究活動をしていくことで、「習得的な学び」で体得した知識・技能が確実に定着し、更に児童の思考が広がり、深まっていく学びである。

(2) 単元の指導計画と評価計画

1 単位時間の学習課題

まとめ

学習問題及び学習問題設定の意図

時	目 標	主な学習活動	評価規準及び方法
1	◎増水した川の映像を見て、流れる水の働きに興味・関心をもって、自分なりの学習課題をもつことができる。	○流れる水や川について、今まで自分が経験してきたことや授業で学んできたことなどを想起する。 【事象との出会い】 ○ペーパン川が増水したときの写真、牛朱別川が増水したときの映像、石狩川が増水したときの写真を見て、流れる水がもつ力のすごさを知る。 ○日常では穏やかで小さな川（ペーパン川）でも、増水時には川が激変して決壊し、氾濫することがあるという自然災害の恐ろしさに気付く。 ○単元を通した学習問題を設定する。 水害を引き起こすほどの流れる川の水には、どのような働きがあるのだろうか。 ○本時の学習を振り返る。	指導 →指導に生かす評価 記録 →記録に残す評価 指導 〈関①〉 発言、ノート
2	◎増水した川の映像を見て、流れる水の働きに興味・関心をもち、学習の見通しをもとうとしている。 主体的な学び	○学習課題を把握する。 学習計画をつくり、学習の見通しをもとう。 ○流れる水の働きとは何かについて考える。 ○流れる水の働きを確かめる実験方法を考える。 ○水害を引き起こすほどの流れる水の働きは、場所によって違うことを考える。 ○単元を見通した学習問題を解決するには、どのような順番で学習すればよいかを検討する。 川の上流・中流・下流の違い、流れる川の水の働きや水量が増える原因を追究すれば、水害を引き起こすほどの流れる川の水の働きが解明できそうだ。 ○本時の学習を振り返る。	指導 〈関②〉 発言、ノート
3 ・ 4	◎川の上流、中流、下流の違いについて資料等を活用して調べ、その結果を記録できるとともに、川の上流、	川の上流、中流、下流によって川の様子や川原の石が違うことなどを自ら調べ、川についての知識を得ることは、水害を引き起こすほどの流れる川の水の働きを解明するための大きな手掛かりになるのではないかな。	

	中流，下流によって川原の石の特徴や川の様子が違うことを理解している。	○学習課題を把握する。 上流，中流，下流では，どのような違いがあるのだろう。 ○石狩川の上流（大雪山），中流（旭川），下流（札幌）の写真を見る。 ○上流，中流，下流の違いについて，教科書やインターネットを使って表や図にまとめる。全国の川とも比較する。 ○実際の自然現象にあてはめるとどうなのか，その共通性を考える。 ○教科書の写真や映像を見て，流れる水の働きの何にあてはまるのか，自分の言葉で説明する。 ○本時のまとめをする。 上流：傾斜は急。川幅は狭い。流れは速い。 石は多くて角ばっている。 中流：傾斜は少し緩くなる。川幅は少し広い。 石は丸い。川原がある。蛇行が見られる。 下流：傾斜はゆるい。川幅は広い。流れはゆっくり。石は丸くて小さい。 ○本時の学習を振り返る。	記録 〈技②〉 発言，ノート 指導 〈知②〉 発言，ノート
5	◎流れる水の働きについて自分の予想を確かめる適切な実験方法を考え，表現している。	日常的な穏やかな川の流れを想定した水の働きを調べる実験をすることによって，水害を引き起こすほどの流れる水の働きが解明できるのではないか。 ○学習課題を把握する。 流れる水には，どのような働きがあるのだろう。 ○予想を立て，実験結果を予想しながら実験方法を考える。 ①地面を削る働き ②土や石を運ぶ働き ③土や石がたまる働き ○検証実験では，条件制御の考え方を働かせて何を揃えるのかを確認する。 ○実験計画を立てる。	記録 〈思①〉 発言，ノート

		○本時の学習を振り返る。	
6 ・ 7	◎流れる水の働きについてモデル実験をして確かめ、その結果を記録できるとともに、流れる水には、土地を侵食したり、石や土などを運搬したり堆積させたりする働きがあることを理解している。 対話的な学び	○学習課題を把握する。（前時からの続き） 流れる水には、どのような働きがあるのだろう。 ○予想が正しければ、得られるはずの実験結果がどうなるのかを確認する。 ○検証実験をする。 ・川を直線にして調べてみる。 ・川をS字（蛇行）にして調べてみる。 ○実験結果を記録する。 ○予想と実験結果を同時に確認することができるワークシートを活用して実験結果を整理する。 ○自分で考えた予想，グループ内でワークシートを活用した対話，他のグループとの実験結果の交流を通して流れる水の働きについて分析・考察をする。 ○本時のまとめをする。 流れる川の水には、土を削ったり，運んだり，積もらせたりする働きがある。 これらの働きを，侵食，運搬，堆積という。 ○本時の学習を振り返る。	指導 〈技①〉 観察，ノート 指導 〈知①〉 発言，ノート
8	◎流れる水の働きについて自分の予想を確かめる適切な実験方法を考え，表現している。	集中豪雨を想定した流れる水の働きを調べる実験をすることによって，水害を引き起こすほどの流れる水の働きが解明できるのではないか。 ○学習課題を把握する。 流れる水の量を増やすと，流れる水の働きはどのようなになるのだろう。 ○流れる水の働きがどうなるのか，実験結果を予想しながら実験方法を考える。 ○検証実験では，条件制御の考え方を働かせ，変える条件は水の量であることを確認する。 ○実験の分担と記録の仕方を確認する。 ○本時の学習を振り返る。	記録 〈思①〉 発言，ノート

第IV章

9 (本時)	◎流れる水の働きについてモデル実験と実際の川の様子とを関係付けて考え,表現している。 対話的な学び	○学習課題を把握する。(前時からの続き) 流れる水の量を増やすと,流れる水の働きはどのようなになるのだろう。 ○検証実験の予想や実験方法,記録の仕方,条件制御で変えるものを確認し,実験の準備をする。 ○検証実験をする。 ○実験結果を記録する。 ○予想と実験結果を同時に確認することができるワークシートを活用して実験結果を整理する。 ○自分で考えた予想,グループ内でのワークシートを活用した対話,他のグループとの実験結果の交流を通して,流れる水の働きについて分析・考察をする。 ○本時のまとめをする。 流れる水の量を増やすと,「侵食」「運搬」「堆積」の働きが大きくなる。 ○本時の学習を振り返る。	記録 〈思②〉 発言,ノート
10	◎長雨や集中豪雨により川が増水することについて資料等を活用して調べ,その結果を記録できる。	どのようなときに川が増水するのかを調べることによって,水害が起きる可能性を予想できるのではないか。 ○学習課題を把握する。 どのようなときに,川の水が増えるのだろう。 ○予想を考え,資料やインターネットを使って根拠となるデータを集める。(月別の降水量や水位) ①台風説 ②雪解け水説 ③梅雨などの長雨説 ④ゲリラ豪雨説 ○統計を調べ,月別の降水量や水位等の傾向を掴む。 ○本時のまとめをする。 台風,雪解け水,長雨,ゲリラ豪雨などによって川の水が増水する。 ○本時の学習を振り返る。	指導 〈技③〉 資料,インターネット

11	◎流れる水の働きで学習したことを、身近な自分の生活や水害などの災害に当てはめようとしている。	○学習課題を把握する。 水害発生メカニズムについて、流れる水の働きで学んできたことを生かし、自分の言葉で科学的に分かりやすく説明しよう。 ○上流、中流、下流の川全体のことを意識しながら、流れる水の働き、水害が起こす土地の変化についてまとめる。 ○単元を通した学習問題のまとめを書く。 流れる水の働きには、「侵食」「運搬」「堆積」がある。流れる水の量や速さを増すことによって流れる水の働きが大きくなる。 だから、大雨が降ることによって川の流れの速さや量が増し、そのため、流れる水の働きの「侵食」「運搬」「堆積」の働きが大きくなる。 つまり、侵食の働きが大きくなることで川の岸や堤防などが削られ、川の氾濫や土砂崩れが起きる。運搬の働きが大きくなることで大木、岩、大量の土砂、車、家なども流してしまう。堆積の働きが大きくなることで、たくさんの土砂を川の下流に積もらせる。 ○水害発生メカニズムについて、流れる水の働きで学んできたことを生かし、自分の言葉で科学的に分かりやすく説明する。 ○本時の学習を振り返る。	指導 〈関③〉 発言、ノート
12	◎流れる水の働きを基に災害を防ぐための工夫について考え、表現していると同時に、川が増水すると土地が大きく変化して災害が起きる場合があり、災害を防ぐ	水害を引き起こすほどの流れる川の水の働きについて追究してきたことは、災害を防ぐための工夫や取組がなされていることの理解にもつながるのではないか。 ○学習課題を把握する。 水害を防ぐために、どのような工夫や取組がなされてきたのだろう。	記録 〈思③〉 発言、ノート

	ための工夫や取組がなされていることを理解している。 対話的な学び	○水害を防ぐためにつくられたものがどのような役割を果たしているのか、今までに学んだ「流れる水の働き」の知識も生かして、自分なりの言葉で説明する。 ①堤防，砂防堰堤，ブロック，ダムなど ②蛇行の多い川を直線的な川にする改修工事 ③川の水の逃げ道をつくる改修工事 ○牛朱別川の歴史を知る。 ・昔，牛朱別川は蛇行が多くて川の氾濫が多発。 ・昭和初期に牛朱別川の大工事。真っ直ぐな川へ。 ・牛朱別川を分流。永山新川をつくる。 ○本時のまとめをする。 人は，水害を防ぐために，堤防やブロック，ダムなどをつくったり，川の流れを変える改修工事をしたりしてきた。 ○本時の学習を振り返る。	指導 〈知③〉 発言，ノート
--	---	--	--

6 本時の学習（12時間扱い 9／12）

（1）目 標

流れる水の量を増やすと，地面を削ったり，運んだり，積もらせたりする働きが大きくなることを，今までに学んだ流れる水の働きの知識も生かしながら自分の言葉で説明する。

（思考・表現）

（2）本時における 17 次研究との関わり

研究内容 2－(1)② 学びの成果

児童が学びの成果を実感するために，本時における児童自身の学ぶ姿を明確にして，自分の学習の過程と学びの成果を振り返らせる。

本時の課題を解決するため，授業の始まりに，自分がどのようにしてゴールを目指すのか児童自身が学ぶ姿を明確にして，自身の学びの立ち位置や変容を自分事として自覚させることが大切である。その上で，振り返りに取り組ませることが次の学習への意欲化につながるものであると考えた。

そこで，導入場面において，本校で使用している「パフォーマンス・シート」を活用して本時の学習における自身の学ぶ姿を明確にもたせた上で，振り返りにおいて学習内容の理解度について 4 件法で評価させ，学習した内容について記述させることにより，本時の学びの成果を実感させる。

研究内容 2-(2)② 思考の活性化

学習内容や学習方法について確実に理解させるために、予想と実験結果を比較させ、多面的に分析させる。

理科の第5学年では、学習の過程において、問題についての予想や仮説を基に、解決の方法を発想するといった問題解決の力を育成することに重点をおいて指導することが大切である。

そこで、水の量が増えたときの実験結果を多面的に分析できるよう、予想と実験結果を同時に確認することができるワークシートを活用する。実験結果から得られる情報を整理させることで児童の思考を活性化させ、より深い考察へとつながることで学習内容や学習方法について確実に理解させる。その際、これまでに学習した「浸食」「運搬」「堆積」の知識を関連付けて考えられるよう配慮する。

(3) 展 開 (9/12)

1 単位時間の学習課題

まとめ

白抜き 研究との関わり

教師の活動	児童の思考や活動
1 学習計画で、本時の学習を確認させる。	1 本時の学習課題を確認する。
流れる水の量を増やすと、流れる水の働きはどのようなになるのだろう。	
2 パフォーマンス・シートに自己課題を設定させる。	2 パフォーマンス・シートに自己課題を設定する。
3 条件制御で水の量を変えること、今までに学んだ知識も十分に活用しながら検証実験をすることを確認させる。	3 予想、実験方法、記録の仕方などを確認する。
4 検証実験をさせる。 ・タブレットを活用して記録させる。	4 検証実験をする。
5 実験結果を記録させる。	5 実験結果を記録する。 ・予想と実験結果を同時に確認することができるワークシートを活用して実験結果を整理する。
6 実験結果を分析して考察させる。 ・水の量を増やしたときの流れる水の働きについて、実験の予想と比較してどうだ	6 実験結果を分析して考察する。 ・水の量を増やしたときに予想される実験結果と実際の実験結果、他のグループの実

第Ⅳ章

ったのか、侵食、運搬、堆積に焦点を当ててどのように変化していくのか、その規則性を発見させる。 ・実験結果として記録したワークシート、タブレットの映像、モデル実験の実物などを手掛かりにして対話をさせ、自分の考えを醸成させる。 思考の活性化	験結果を比較しながら、分析・考察する。 ・水の量を増やすことによって流れる水の働きがどのように変わるのか、予想と実験結果を同時に確認することができるワークシート、タブレットの映像、モデル実験の実物なども活用して説明する。
【評価場面】＜思①＞ 発言、ノート A 流れる水の量を増やすと、土を削ったり、運んだり、積もらせたりする働きが大きくなることを、今までに学んだ知識、検証実験の結果、友達の発言なども生かしながら自分の言葉で説明する。 B 流れる水の量を増やすと、土を削ったり、運んだり、積もらせたりする働きが大きくなることを、実験結果を基に説明する。	
7 本時のまとめをする。	7 結論を書く。
流れる水の量を増やすと、「侵食」「運搬」「堆積」の働きは大きくなる。	
8 本時の学習について振り返らせる。 学びの成果 9 次時につなげる。	8 本時の学習を振り返る。パフォーマンス・シートに記入し、ノートに授業の振り返りを書く。

(4) 板書

◎流れる水のはたらき

学習課題

流れる水の量を増やすと、流れる水のはたらきはどのようなになるのだろう。

予想

流れる水のはたらきは大きくなる。

実験方法

- ・ペットボトルの注ぎ口のチューブを太くして、流れる水の量を増やす。

条件制御

実験結果

- ・川の外側と内側の両方が大きく削られた。
- ・大量の砂が、下流の方に運ばれた。
- ・流れのゆるやかなところに大量の砂がたまった。

結論

流れる水の量を増やすと、「しん食」「運ばん」「たい積」のはたらきは大きくなる。

※ 移動式黒板には、予想と実験結果を同時に確認することができるワークシートを貼る。

7 研究協議の主な内容

(1) グループ協議の内容

【研究内容2-(1)② 振り返り】

- ・パフォーマンスシートを用いて、本時の学習内容やゴールを、見通しと振り返りの段階で2回確認する機会が設定されており児童が主体的に学ぶ手助けとなっていた。
- ・振り返りで記述させた内容が授業の感想となっていたため、より充実させるには、パフォーマンスシートの内容を盛り込み、記述させる視点を明確にして取り組ませる必要があった。

【研究内容2-(2)② 確かな学びに向かう対話】

- ・ワークシートや実験設備、タブレットなど、学習環境が充実しており、それらを活用して児童が自分の考えを構築していた。
- ・前時までの学びである侵食、運搬、堆積の知識を用いて対話をしたことで、確かな学びに近づくことができた。
- ・どのような内容について対話や考察させるのか、視点を絞って考察させると更に効果的である。
- ・対話のインプットとアウトプットのバランスを考えることが大切である。

(2) 指導主事の助言

《上川教育局教育支援課義務教育指導班指導主事 齊藤 誠》

○ 単元作りについて

- ・単元のゴールを意識して、単元の週末場面から単元構成を考えていくことが大切である。
- ・本時のゴールへと向かうためには、以下の4点が大切である。
 1. 妥当な実験方法を考える
 2. 条件制御をして考えていく（教科横断的に必要）
 3. 分析、考察、記述する
 4. 科学的な言葉を用いて説明する
- ・本時で必要な知識が前時までに身に付いていた。それは、そのための単元構成がなされていたからである。本時の実験がうまくいったことへとつながっている。
- ・本時のゴールを達成するために、何が必要なのか、それが前時までにできていたのかということを視点に単元を構成していくことが大切である。

《旭川市教育委員会教育指導課主査 馬場 大輔》

① 本時における思考の活性化について

- ・思考の活性化は、確かに分かったという実感へつなげるために大切である。
実験結果を科学的な視点で分析できているのか、本時の現象を実際の川に当てはめて考えることができているかが、本時場面での確かな理解へとつながる点である。

② 実験の目的について

- ・実験の目的を見失わないようにするために、2つの予想を行わせていた。1つは問題に対する予想で、もう1つは予想が正しかった場合の実験結果の見通しである。

第Ⅳ章

- ・ 前時までの実験結果と本時の実験結果を比較させることで、流れる水の量を増やしたときの水の働きについて違いが明確になっていた。

③ 実験のまとめについて

- ・ 実験をまとめる際には、共有と精査が大切である。本時では、教師が精査しなくても、児童がそれぞれの実験グループの結果から考察することができていたことが良かった。

④ 主体的な学びについて

- ・ 教師が、何を学ばせたいのかをはっきりさせておくことで、児童に何を振り返らせたいのかをはっきりしてくる。

8 事後分析

(1) 「深い学び」を充実させる視点

本単元では、流れる水や川の様子を観察し、水の速さや量に目を向けながら調べ、見出した問題を計画的に追究する活動を通して、流れる水の働きと土地の変化との関係について説明できることが大切である。そこで、知識を相互に関連付けてより深く理解する姿を目指す「既習内容や経験と関連付けた思考の促進」の視点を重視し、単元構成を行った。

9時間目までは、問題を解決するために必要な知識・技能を獲得する場面として設定した。流水の働き「侵食」「運搬」「堆積」について実験を通して理解させ、次に、流れる水の速さや量による働きの違いについて、結果を見通して実験を構想したり、結果を基に分析・考察したりする問題解決能力を育成しながら学習問題を解決するための知識を蓄えた。

10～12 時間目では、児童は、水害発生メカニズムについて、獲得した知識や技能を関連付けながら、自分の言葉で科学的に分かりやすく説明する時間を設け、川による災害とその対策について考えさせることで、災害を防ぐための工夫や取組についての理解を深めることができた。

(2) 学びの成果

本時の導入で、「問題解決のために、自分がどのようにしてゴールを目指すのか」、「自身の学びの立ち位置」を確認し、本時の学習における自身の学ぶ姿を明確にさせた。

児童は、振り返りにおいて自身で確認した学ぶ姿をもとに、学習内容の理解度を記述し、本時の学びの成果や変容を実感することができた。

(3) 思考の活性化

本時では、水の量が増えたときの実験結果を多面的に分析できるよう、予想と実験結果を同時に確認することができるワークシートを活用した。

また、実験結果から得られる情報を整理させることで、児童の思考が活性化し、より深い考察へとつながり、学習内容や学習方法について確実に理解させることができた。

また、児童が実験を通して、グループで話し合いながら気付いたことや分かったことを考察していく際、実験器具の充実や自分たちで撮影したタブレットを活用することで、児童が結果を分析・考察する際に、既習内容と比較・関連付けて考えることができた。

9 本実践を通じた成果と課題

<研究内容2-(1)①見通し>

- 事象との出会いや、獲得した知識を活用する思考の場の設定など、単元の構成を工夫したことで、実験の結果や考察から水害発生メカニズムについて考えるというゴールイメージを明確にもつことができた。
- 実験結果を考察する場面において、ゴールに向かう考察をうまく考えられない児童がいた。単元の学習問題を毎時間確認し、実験結果の分析・考察につなげる必要があった。

<研究内容2-(1)② 振り返り>

- 単元の導入で、「水害を引き起こすほどの流れる川の水のはたらきをなんとか解明しよう」という思いを児童にもたせ、児童とともに学習計画を立て、学習計画をもとに毎時間の振り返りに取り組ませることで、児童は、学びの成果を確認し、単元の終末では、自身の変容を実感するとともに、次の学びへの意欲をもつことができた。
- 振り返りを書く時間を十分に取ることができない場面があった。時間を確実に保証することが重要である。

<研究内容2-(2)① 思考を広げる対話>

- 予想と実験結果を同時に確認することができるワークシートや実験の様子を撮影した動画を活用することで、論点を明確にした活発な対話ができるようになった。

<研究内容2-(2)② 確かな学びに向かう対話>

- 実験結果を分析・考察して、自分の言葉で表現し、「自分の予想と比較して実験結果はどうだったか」などの視点で対話を設定したことで、内容の確実な理解につながった。
- 考察場面の時間をあまり確保できなかった。短時間でも内容の濃い考察ができるよう、考察の書き方や考察・分析の「視点」をより明確に示す工夫が必要であった。

5年 パフォーマンス・シート

「流れる水のはたらき」 12時間

名前

☆単元を通した学習問題☆ 水害を引き起こすほどの流れる川の水とは、どのようなはたらきがあるのだろう。

時	②	③ ④	⑤	⑥ ⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
学習内容	学習問題を解決するための学習計画をつくる。	川の上流、中流、下流の違いについて調べる。	流れる水のはたらきについて、予想と実験方法を考える。	流れる水には、どのようなはたらきがあるのかを調べる。	水の量を増やしたときの流れる水のはたらきについて、予想と実験方法を考える。	水の量を増やしたときの流れる水のはたらきについて、予想と実験方法を考える。	どのようなときに川の水が増えるのかを調べる。	流れる水のはたらきについて単元のまとめをする。	水害を防ぐための工夫について考える。
☆☆☆	どうすれば学習問題が解決できるのかを考え、まとめ方を意識しながら学習の見直しをもち。	川の上流、中流、下流の違いについて教科書やインターネットなどを調べて表にまとめ、水のはたらきと関係付けながら理由を分かりやすく説明する。	流れる水のはたらきについて、自分の予想を確かめるための実験方法を考え、分かりやすく説明する。	目標と5字の川の水のはたらきについて、実験結果をもとに分かりやすく説明する。	水の量を増やしたときの流れる水のはたらきについて、自分の予想を確かめる実験方法を考え、条件制御の考え方をはたらかせて分かりやすく説明する。	水の量を増やしたときの流れる水のはたらきについて、実験結果をもとに分かりやすく説明する。	どのようなときに川の水が増えるのか、天候、降水量、地形などの自然条件を考えながら分かりやすく説明する。	学習問題に対する自分の考えを書くとともに、今まで学習してきたことを関係付けながら分かりやすく説明する。	水害を防ぐための工夫について、学んだことを生かして説明するとともに、身近な生活の中から他の工夫も見つけてみる。
☆☆	どうすれば学習問題が解決できるのかを考え、学習の見直しをもち。	川の上流、中流、下流の違いについて教科書やインターネットなどを調べて表にまとめる。	流れる水のはたらきについて、自分の予想を確かめるための実験方法を考える。	目標と5字の川の水のはたらきについて、実験結果をもとに考える。	水の量を増やしたときの流れる水のはたらきについて、自分の予想を確かめる実験方法を考える。	水の量を増やしたときの流れる水のはたらきについて、実験結果をもとに考える。	どのようなときに川の水が増えるのか、身近な自然と関係付けながら考える。	学習問題に対する自分の考えを書く。	水害を防ぐための工夫について、学んだことを生かして説明する。
☆	流れる水のはたらきについて調べたいことを考える。	川の上流、中流、下流によって、川の様子が違うことが分かる。	流れる水のはたらきについて、予想する。	流れる水のはたらきが分かる。	水の量を増やしたときの流れる水のはたらきについて、予想する。	水を増やしたときの流れる水のはたらきが分かる。	川の水が増えることが分かる。	流れる水のはたらきについて、分かったことをまとめる。	水害を防ぐために、どんなものをつくらなければならないかが分かる。



1 時間目

三角形の作図の問題を提示し、単元の見通しをもたせる場面を設定。

2・3時間目
分度器で角度を測定する活動時間を十分に確保する場面を設定。

【知識を相互に関連付けてより深く理解する姿を目指し、既習内容や経験と関連付けた思考の促進を図る。】

1時間目に学習内容を活用して三角形を作図するという単元の見通しをもたせる時間を設けた。

2, 3 時間目には, 分度器で角度を測定する活動時間を十分に確保し, 知識や技能の定着を図っていく。4 時間目では, 既習内容を活用して 180° より大きな角の測定について考える場面を設定した。

5, 6 時間目ではこれまでの学習内容を活用して、角や三角形の作図に取り組む場面を設定した。

4時間目

既習内容を活用して 180° より大きな角の測定について考える場面を設定。

6時間目

これまでの学習内容を活用して、
角や三角形の作図に取り組む場面
を設定。

既習内容を関連付けながら

角の大きさの単位と測定について理解する学習

日 時 平成30年10月22日（月）5校時 実施

児 童 旭川市立高台小学校4年3組 35名

指導者 森 走 平

<学校の概要>

学校の様子	旭川市北部，高台の地に位置し周囲にはまだ自然が残されており，樹木や野鳥の種類も多く，散策コースや歩くスキーコース等も設置されている。近くには，キャンプ場やストレッチ施設を備えたグリーンスポーツ公園や市営プールがあり，恵まれた環境にある。また，校下には公営の福祉施設が集積された福祉村や養護学校があり，本校では地域の特色を生かした交流教育を進めている。保護者は学校教育への関心が高く，協力的であり，PTA活動も活発である。
研究の内容	「進んで学び，考え，深め合う子供の育成」 (1)研究の重点 ①自ら課題解決を進んで取り組む子供 ②自分の考えをもち，互いに伝え合う子供 (2)研究の内容 ①課題解決に進んで取り組むための手立て ・見通しのもとせ方（課題提示，課題解決の方法や手順） ・問題意識が持続する授業展開 ②考えをもち，互いに伝え合うための手立て ・考えを深めたり広げたりする対話 ・確かな学びに向かう対話

1 単元名 「角」（教育出版 4年 下）

2 単元について

(1) 教材観

本単元に関わる学習指導要領の目標および内容（抜粋）は，次のとおりである。

【学習指導要領】～第4学年（算数科）の目標と内容～

1 目 標

(2) 角の大きさの単位と測定について理解できるようにする。

2 内 容

B 量と測定

(2) 角の大きさについて単位と測定の意味を理解し，角の大きさの測定ができるようにする。

ア 角の大きさを回転の大きさとして捉えること。

イ 角の大きさの単位「度(°)」について知ること。

第3学年では、二等辺三角形や正三角形の指導と関連して、図形の構成要素としての角の意味を扱った。角の大きさは辺の開き具合で決まることを押さえるとともに、二等辺三角形や正三角形の角の大きさを直接比較によって調べることも経験させてきている。

本単元では、回転の大きさを表す量としての角の理解を図る。回転の角については、2つの円形の紙を組み合わせて回転させる操作を通して、角の大きさが連続的に変化していくことを捉えさせる。そして、長さやかさなどの測定と同じように、任意単位（三角定規の角）を用いて角を測定し数値化する段階を経て、普遍単位「度(°)」と測定の計器として分度器を導入する。特に、分度器を用いて角度を測定したり、角を作図したりすること、図形の角の大きさに着目し、角の大きさを柔軟に表現したり、図形の考察に生かしたりすることを大切にする。

(2) 児童観

算数科の学習においては、問題に対するそれぞれの考え方や解き方をグループで交流し、対話を通して理解を深める場面を設定してきた。

【事前アンケート集計】

①	算数の学習は大切だ。	91.6%
②	学習したことを、授業の中で自分なりに振り返ったり、まとめたりしている。	88.9%
③	新しい問題に出合ったとき、それを解いてみたい。	83.3%
④	自分の考えを友達や先生に分かりやすく説明することができる。	75.0%
⑤	自分の考えを進んでノートに書いたり、発表したりする。	69.4%
⑥	新しい問題に出合ったとき、今まで学習した内容や言葉を使って考えている。	47.2%

この結果から、問題に対して諦めずに取り組み、学び合いの中で自分に合った解き方を獲得することができるようにさせるために、ペアやグループの学習を多く取り入れる。また、普段の生活とどんな関わりがあるのかということ、身の回りから想起させたり練習問題で取り上げたりしながら、自分の生活との関わりが意識できるようにしたい。

新しい問題を解いてみたいという思いをもち、1単位時間の内容を理解していても、既習事項を生かせずに戸惑ってしまう児童がいる。このことから、既習内容を関連付けながら適切に活用し、課題を解決する力を育てたい。

(3) 指導観

本単元では、三角形の作図問題（単元の最終問題）を導入で示し、「分からない・できない」から「解くためには何が分かる・できるようになればいいか」という単元のゴールイメージを児童にもたせる。

はじめに、「角」とは「一つの点から出ている2本の辺が作る形」であり、「角度」とは「2辺の開き具合で決まる」ということを、2枚の円形の教具を重ねて回転させ、必要な大きさの角を作る活動を丁寧に扱いながら指導していく。

第IV章

次に、角の大きさについての感覚を養っていく際、「直角(90°)より大きい小さいかの見当を付けてから測定すること。」や、「 180° より大きい角の測定や作図においても、角の大きさを加法的な見方だけでなく、減法的な見方でも考えられること。」を児童に確実に身に付け、既習内容と関連付けながら適切に活用し、課題を解決することを本単元の重点としていきたい。

そのために、分度器を用い様々な角の大きさを丁寧に測定したり、作図したりする活動を設定する。分度器は、ものさしなどに比べて日常生活で用いる機会が少ないだけに、その仕組みをよく理解して、いろいろな角度を分度器で実際に測定する活動を、実物投影機を用いながら指導していく。また、児童が使う分度器を全て統一する。そうすることで、一斉指導もしやすくなると考える。基線を間違えたり、内側と外側の目盛りを読み間違えたりせず、確実に測定できるよう、単元を通してこれらの活動を豊富に取り入れていく。

最後に、単元のゴールである「分度器を用いた三角形の作図」では、既習内容と関連付けながら、「1辺の長さとお端の角度」が分かれば作図できること、第5学年で学習する「合同な図形」に本単元の学習内容が直接的につながることを意識しながら丁寧に指導していく。

(4) 学びの基盤

学びの基盤に関わり、本学級では以下の点を大切にしてきた。

- ① 「教室環境の整備」について
 - ・落ち着いて学習できるよう教室の教具の配置の工夫などを心がけてきた。
 - ・「SUN・3ストーン（きらきらした石）」を蓄積し、児童が心を一つにして頑張ってきた成果を視覚化しよう心がけてきた。
- ② 「学習規律の確立」について
 - ・休み時間に、次の時間の学習用具を準備することを指導してきた。
 - ・机上に余計な物は置かず、必要なものを決められた場所に置くことを指導してきた。
 - ・返事をし、立ってみんなに聞こえる声で発表することを指導してきた。
- ③ 「支持的風土の醸成」について
 - ・一人一人が発表しやすい雰囲気を醸成するために、うなずきながら聞くことや、ペアやグループでの話し合い活動を多く取り入れ、指導してきた。
 - ・最後まで発表できなくても、「〇〇が分かりません。」や、「〇〇まで話し合うことができました。」等でも立派な発表だ、という意識で自信をもって発表できるように指導してきた。

3 単元の目標

角の大きさを回転の大きさとして捉え、角の大きさの意味や、単位と測定の意味について理解するとともに、角の大きさの単位「度($^\circ$)」について知り、分度器を用いて、角の大きさを測定したり、角を作図したりする。

4 評価規準

単元の評価規準			
数学への 関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形についての 技能	数量や図形についての 知識・理解
角の大きさについて関心をもち、角の大きさに着目して、身の回りにある図形を捉えようとする。	角の大きさについて、単位のいくつ分とみて数値化することを考えている。	分度器を用いて角の大きさを測定したり、必要な大きさの角を作図したりすることができる。	角の大きさを回転の大きさとして捉え、角の大きさの単位（度）と測定の意味について理解している。また、角の大きさについての豊かな感覚をもっている。
学習活動における具体の評価規準			
①角の大きさに関心をもち、角の大きさに着目して図形を捉えようとしている。 ②角の大きさに関心をもち、身の回りのものの角度を調べようとしている。	①角の加法性を用いて、180 度より大きい角の大きさの測り方を考えている。	①分度器を用いて、角の大きさを測定することができる。 ②分度器を用いて、角や三角形を作図することができる。	①回転した量としての角の大きさの意味、分度器の機能と使い方、角の大きさの単位「度（°）」を理解している。 ②三角定規の角の大きさについて理解し、角の大きさを加減計算できることを理解している。 ③角の大きさについて豊かな感覚をもっている。

5 単元の指導計画と評価計画

(1) 単元の指導計画における 17 次研究との関わり

研究内容 1－(1)② 「深い学び」を充実させる視点

知識を相互に関連付けてより深く理解する姿を目指し、既習内容や経験と関連付けた思考の促進を図る。

本単元の学習では、分度器の仕組みをよく理解して、いろいろな角度を分度器で実際に測定したり、角の作図をしたりしながら、最終的には三角形の作図をする活動に取り組む。知識を相互に関連付けてより深く理解する姿を目指すためには、既習事項を活用する場面を、児童の課題解決の過程に沿って設定することが大切である。

そこで本単元指導計画では、1 時間目に、「既習内容を活用して三角形を作図する」という単元の見通しをもたせる場面を設定する。2・3 時間目には、分度器で角度を測定する活動時間を十分に確保し、知識や技能の定着を図っていく。

4 時間目では、既習内容を活用して 180° より大きな角の測定について考える場面を設定する。さらに、5・6 時間目では、これまでの学習内容を活用して、角や三角形の作図に取り組む場面を設定することで、既習事項を活用し、それらの知識を関連付け、より深く学習内容を理解することができると思う。

第IV章

(2) 単元の展開

1 単位時間の学習課題 1 単位時間の問題文 まとめ

時	目 標	主な学習活動	評価規準及び方法
1 2	◎角の大きさに関心をもち、角の大きさに着目して図形を捉えようとすることができるとともに、回転した量としての角の大きさの意味、分度器の機能と使い方、角の大きさの単位「度(°)」を理解できる。 ◎分度器を用いて、角の大きさを測定することができる。 主体的な学び	○問題を提示し、学習内容を活用して三角形の作図をするという単元の見通しをもつ。 ○問題を把握する。 角の大きさについて調べよう。 ○課題を把握する。 角の大きさを表すにはどうしたらよい？ 2枚の円を重ねて回す活動を通して、回転の量としての角の大きさの意味を知り、角の大きさの比較・測定の仕方を考える。 - 角の大きさの単位「度(°)」を知り、直角=90°を知る。 - 分度器を用いた測定の仕方を知る。 直角を90等分した1個分の大きさを1度といい、1°と書く。 度は角の大きさの単位で、角の大きさのことを角度ともいう。 ○本時の学習を振り返る。	指導 →指導に生かす評価 記録 →記録に残す評価 指導 〈関①〉 〈知①〉 〈技①〉 ・観察 ・発言 ・ノート ・プリント
3	◎三角定規の角の大きさを理解し、角の大きさを加減計算できることを理解することができる。	○問題を把握する。 3ページの⑤、⑥、⑦の角度は、それぞれ直角の何こ分で、何度でしょうか。 - 直角を単位にした角の大きさと、その表し方を知る。 指導事項 1 直角=90°，半回転の角度…2 直角=180° 3 直角=270°，1 回転の角度…4 直角=360° - 考えやすくするためにかきたす線…「補助線」 三角定規の角度を調べよう。 ○課題を把握する。 組み合わせでできる角度を調べよう - 三角定規の角の大きさを知る。また、三角定規の角を組み合わせでいろいろな大きさの角を作り、角の大きさは加減計算できることを知る。 角度も、長さや重さと同じようにたしたりひいたりすることができる。 ○練習問題に取り組む。 ○本時の学習を振り返る。	記録 〈知②〉 ・ノート ・プリント ・ワークシート

4 (本時)	◎角の加法性を用いて、180 度より大きい角の大きさの測り方を考えることができる。 対話的な学び	○問題を把握する。 図の角度は何度でしょう。 ○課題を把握する。 180° より大きい角度をもとめるにはどうする？ ・角の加法（減法）性を用いて、180° より大きい角の測り方を考える。 180° にたしたり、360° からひいたりしてもとめることができる。 ○練習問題に取り組む。 ○本時の学習を振り返る。	記録 〈考①〉 ・ノート ・プリント ・ワークシート
5	◎分度器を用いて、角や三角形を作図することができる。	○問題を把握する。 分度器を使って、35° の角をかこう。 ○課題を把握する。 角のかき方を考えよう。 ・分度器を用いて角を作図する。 角度を測ったときの手順を使って作図することができる。 ○練習問題に取り組む。 ○本時の学習を振り返る。	記録 〈技②〉 ・ノート ・プリント ・ワークシート
6	◎分度器を用いて、角や三角形を作図することができる。 主体的な学び	○問題を把握する。 右のような三角形をかこう。 ○課題を把握する。 分度器を使って、三角形を作図しよう。 ・1つの辺の長さや両端の角度から、分度器を用いて三角形を作図する。 角のかき方をもとにして、辺の長さや角度が決まっている所からかく。 ○練習問題に取り組む。 ○本時の学習を振り返る。	記録 〈技②〉 ・ノート ・プリント ・ワークシート
7	◎角の大きさに関心をもち、身の回りのものの角度を調べようとする。角の大きさについて豊かな感覚をもつことができる。 対話的な学び	○問題を把握する。 身のまわりの角度を調べよう。 ○課題を把握する。 道具を作って調べよう。 ・角度を測定する道具を作り、身の回りの角度を調べる。 分度器では測りにくい場所も測ることができる。 ○本時の学習を振り返る。	指導 〈関②〉 〈知③〉 ・観察 ・発言

第IV章

8	◎単元で学習したことを振り返り，学習内容を定着できる。	○前時までの復習問題に取り組む。	指導 〈技①・②〉 ・プリント ・ワークシート
---	-----------------------------	------------------	---

6 本時の学習（8時間扱い 4／8）

(1) 目 標

角の加法性を用いて，180度より大きい角の大きさの測り方を考えることができる。

（数学的な考え方）

(2) 本時における 17 次研究との関わり

研究内容 2－(1)① 学習課題の提示

問題場面を確実に捉えさせ学習の見通しをもたせるために，全体で整理する時間を取り，課題把握につなげていく。

児童一人一人が，目標を理解し，学習への興味・関心を高め，主体的に課題解決に取り組むようにするためには，単に目標を示すのではなく，児童が単元の学習で何を学ぶのか，どのような解決方法があるのかなどを見通すことができるようにする必要がある。

そこで，本時では，問題場面を確実に捉えさせるために，全体で問題場面を整理する時間を設ける。また，学習課題を提示後，児童とのやり取りを通して，既習事項を活用して答えの見通しをもたせたり，演算の決定や必要な用具を確認して方法の見通しをもたせたりする場を設定する。

研究内容 2－(2)① 互いの考えの見える化

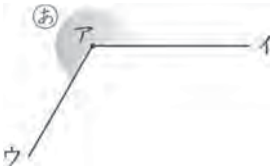
角の大きさの見方を広げるために，複数の求め方を並べて板書し，それぞれの求め方の共通点や相違点を考えさせる。

自分の考えを広げるためには，自分と違う考えに触れ，自分の考えを広げたり，見直したり，自分と同じ考えに触れ，自分の考えに自信をもったりするなど，対話を通して多様な考えに触れ，自分の考えを広げさせることが必要である。

そこで，本時では，児童と児童のやりとりを軸として，180°より大きい角の測定において，加法的な求め方と減法的な求め方の2つに分類して板書することで，共通点や相違点を明確にし，角の大きさを加法的な求め方だけでなく，減法的な求め方でも考えられることに気付かせる。その後，測定する角度によって，加法と減法のどちらがよいかを根拠をもって考え，選択することができる場を設定する。

(3) 展 開

1 単位時間の学習課題	まとめ	1 単位時間の問題文	白抜き 研究との関わり
--	--	--	---

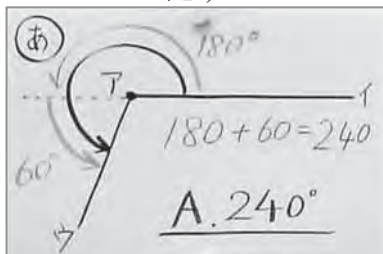
教師の活動	児童の活動
1 前時を振り返らせる。 「1 直角」「2 直角 180° (半回転)」「3 直角」「4 直角 360° (1 回転)」 2 問題を提示する。 ㊦の角度は何度でしょう。 	1 前時を振り返る。 2 問題プリントをノートに貼る。
3 問題場面を整理させる。 学習課題の提示 「何を使って測りますか。」 「180° より…」 4 課題を把握させる。 学習課題の提示	3 問題場面をノートにまとめる。 「分度器です」 「180° より大きい」 4 ノートに課題を書く。
180° より大きい角度をもとめるにはどうする？	
5 課題解決の見通しをもたせる。 学習課題の提示 「何直角と何直角の間ですか。」 「角の大きさは、何度ぐらいですか。」 (答えの見通し) 「何算で表すことができますか。」 「分度器を使って補助線をかいたり、たし たりひいたりを式で表すと今日の課題が クリアできそうですね。」 (方法の見通し) 6 個人で分度器を用い考えさせる。 プリントを配付する。 「最終的には、式で表して答えを書いてく ださい。」	5 答えの見通しをもつ。 「2 直角と 3 直角の間」 「250° ぐらい」 「たし算やひき算です」 「式で表すことができる」 「何だかできそうだ・・・」 6 個人で使って考える。 ・補助線、式、答えをプリントに記入する。

7 児童に考えを発表させる。

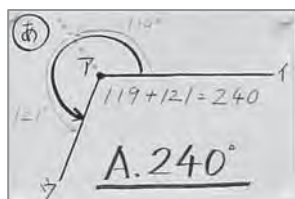
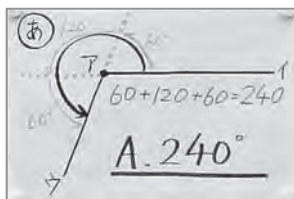
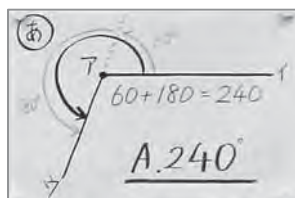
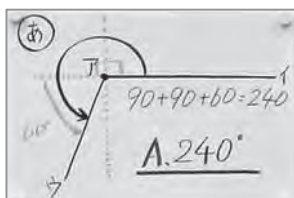
互いの考えの見える化

「この式に表した人は、どのような考え方をしているのでしょうか。」

<たす>



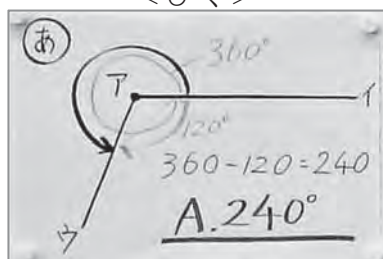
「考え方の説明をペアでしてみましょう。」



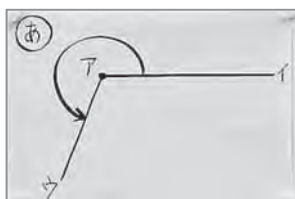
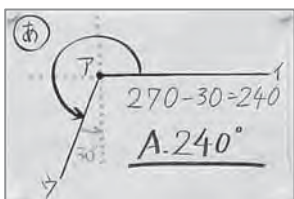
(児童に紹介する考え方)

「この式に表した人は、どのような考え方をしているのでしょうか。」

<ひく>



「考え方の説明をペアでしてみましょう。」



(児童に紹介する考え方)

・指名された児童は前に出て発表する。

$$\text{式 } 180 + 60 = 240$$

$$\text{A. } 240^\circ$$

「 180° (2 直角) になるように線をひきます。 180° から残りの角度は 60° なので、 180° と 60° をたすと角度を求めることができます。」

「 180° に残りの角度をたします。」

・起立して説明し合い、お互いの説明が終わったら着席する。

- ・ $90 + 90 + 60 = 240$
- ・ $60 + 180 = 240$
- ・ $60 + 120 + 60 = 240$
- ・ $119 + 121 = 240$

$$\text{式 } 360 - 120 = 240$$

$$\text{A. } 240^\circ$$

・「4 直角 (1 回転) で 360° なので、そこから、測りたい方と反対の角度 (120°) を引くと角度を求めることができます。」

「 360° から反対の角度をひきます。」

・起立して説明し合い、お互いの説明が終わったら着席する。

- ・ $270 - 30 = 240$

「それぞれの考え方の中で大きく 2 つの仲間に分けると・・・。」

「同じところはどこでしょう。」

「どの方法が分かりやすかったですか。」

「どうしてですか。」

9 まとめる。

「たし算とひき算に分けられる」
「 180° に、残った角度をたす考え方と、 360° から引く考え」

「たしてもひいても答えは 240° 」
「補助線をひいて考えたところ」
「式で表したところ」
「分度器を使ったところ」

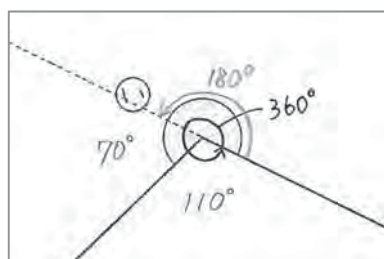
「 180° に残った角度をたす方法」
「 360° から引く方法」

「測る回数が少ないから」
「式が短いから」

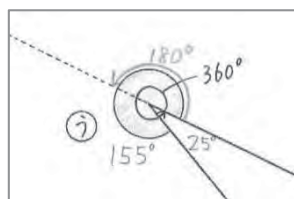
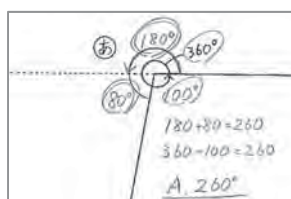
9 言葉でまとめる。

180° にたしたり， 360° からひいたりしてもとめることができる。

10 問題に取り組ませる。



(評価問題)



10 問題に取り組む。

- ・プリントを配付する。
- ・㊦は解説しながら一斉指導する。
- ・㊩，㊪に取り組む。

- ・㊦，㊩は 180° にたしても， 360° からひいても，どちらでもよいと思う。

- ・㊪は， 360° からひいた方がよいと思う。
→計算が簡単だから
→ 360° から少しひけばよいから

【評価場面】〈考①〉プリント

角の加法性を用いて， 180° より大きい角の測定の仕方を考え，説明することができる。

〈手立て〉 角度の情報 (180°) を追加する。

11 本時の学習について振り返らせる。 ・ 4 件法と記述 (1)今日の学習で分かったこと分からなかったこと (2)疑問や不安なこと (3)新しい疑問や次に学習したいこと	11 本時の学習を振り返る。また、なぜ分かったのかなどの学びの過程を振り返る。 ・ 「算数振り返りシート」に記入する。
---	--

10/22 P7~

④⑤の角度は何度でしょう。

① 180°より大きい角度をもとめるにはどうする?

＜見通し＞

- 2直角より大きい: たし算、ひき算
- 3直角より小さい: 式で表す

＜自分の考え＞ たす

式 $180 + 60 =$

A. _____

A. 240°

A. 240°

A. 240°

A. 240°

＜まとめ＞

180°にたしたり、360°からひいたりしてもとめることができる。

A. 260°

A. 250°

A. 335°

180°に残りの角度をたす

360°から反対の角度をひく

10 / 22 P. 7 ~

④ ①の角度は何度でしょうか。

- ・ 分度器
- ・ 180° より大きい

② 180° より大きい角度をもとめるにはどうする？

<見通し>

・ 2 直角	と	3 直角の間	250° <3い？>
180°		270°	

- ・ ほぼ線、矢印...
- ・ たし算、ひき算...
- ・ 式で表す...

<自分の考え>

式 $180 + 60 = 240$

A. 240°

式 $360 - 120 = 240$

A. 240°

① 180° に残りの 60° をたして、
 240° になる。

② 360° から反対の 120° をひいて、
 240° になる。

<まとめ>

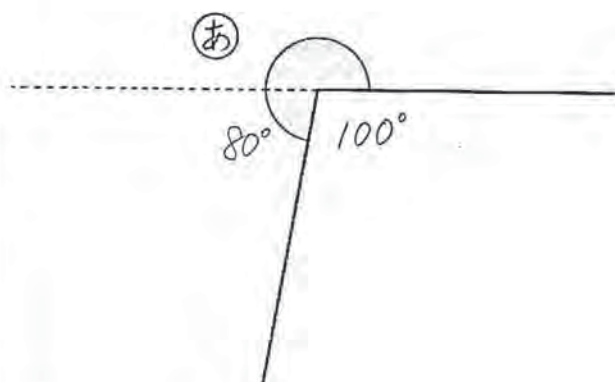
180° にたしたり、 360° からひいたりしてもとめることができる。

③ → プリント

<ふり返り>
→ ワークシート

(6) 問題プリント

たしかめ 180°より大きい角度のはかり方

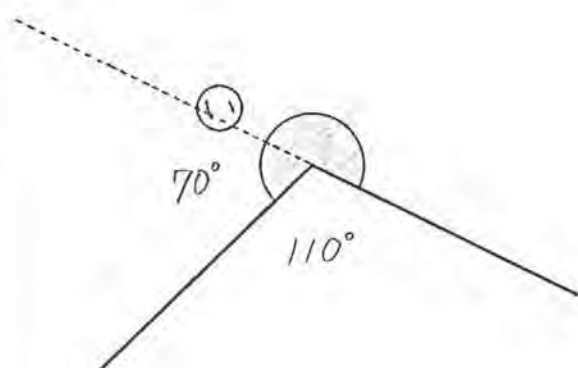
3 下の㉖から㉙の角度を、それぞれはかりましょう。

私は（たし算・ひき算）でもとめます。

㉖式

㉖式

A. _____

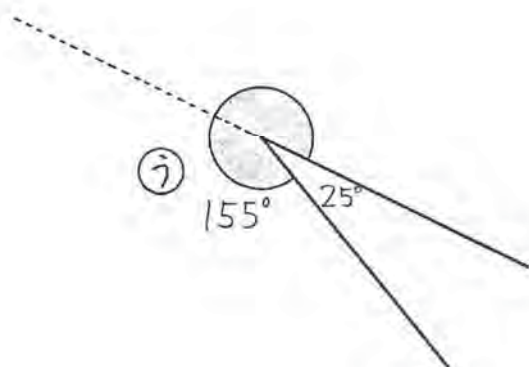


私は（たし算・ひき算）でもとめます。

㉗式

㉗式

A. _____



私は（たし算・ひき算）でもとめます。

㉙式

㉙式

A. _____

(7) 振り返りワークシート

「算数ふりかえりシート」 4年 組 氏名

くらすボス問題>

⑤

右の形は二等辺三角形です。
辺の長さや角度をはかって、
形も大きさも同じ二等辺三角形を
かきましょう。



①

月 日

4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

今日の学習で分かったこと・分からなかったこと

今日の学習で疑問や不安に思ったこと

次に学習してみたい・もっと知りたいこと・挑戦してみたいこと

②

月 日

4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

今日の学習で分かったこと・分からなかったこと

今日の学習で疑問や不安に思ったこと

次に学習してみたい・もっと知りたいこと・挑戦してみたいこと

③

月 日

4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

今日の学習で分かったこと・分からなかったこと

今日の学習で疑問や不安に思ったこと

次に学習してみたい・もっと知りたいこと・挑戦してみたいこと

④

月 日

4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

今日の学習で分かったこと・分からなかったこと

今日の学習で疑問や不安に思ったこと

次に学習してみたい・もっと知りたいこと・挑戦してみたいこと

7 研究協議の主な内容

(1) グループ協議の内容

【研究内容 2－(1)① 見通し】

- ・全員が参加できるように、ペアやグループで意見を交流し合い、学習の見通しをもつことができていた。
- ・前時までの学習内容の掲示物を活用して、しっかりと既習事項の確認ができていた。
- ・解決方法の見通しをもたせる場面では、与える情報を整理するなどし、時間配分を考える必要がある。

【研究内容 2－(2)① 互いの考えの見える化】

- ・自分と違う考えを説明させることで思考が広がり、まとめにつながる話し合いができていた。
- ・見える化はできていたが、比較したり、検討したりする時間があると良かった。
- ・問題場面の把握に時間をかけてしまい、考える時間が少なかった。

(2) 指導主事の助言

《旭川市教育委員会教育指導課主査 馬場 大輔》

① 見通し

- ・難問が解けない理由として、解決までのステップが複数になっていることが考えられる。つまり、長期的な見通しをもつことは難しいということがいえるのではないかな。
- ・本単元の計画では、単元の見通しをもたせていた。最後にこんなことができれば良いという単元の目的をもたせることで、長期的な見通しがもてるようになると考える。

② 評価について

- ・評価について、文部科学省から具体的な方向性はまだ出ていない。
- ・児童生徒の学習評価に関するワーキンググループでは、評価規準についての話題も出ている。今後の動向に注目する必要がある。
- ・努力を要する状況（C）の児童への手立てを行うことが大切である。

③ 終末の場面について

- ・算数においては、評価の観点に応じて意図と目的をはっきりもって問題に取り組む時間を確保することが必要である。算数の終末場面で問題に取り組む目的は、①理解できずにいる児童のため②学びの定着③考えの集束などが考えられる。
- ・1点目は、理解できずにいる児童のためである。どんなに活発に議論したとしても理解できずにいる児童が存在することも考えられる。そのような児童も問題を実際にやってみて分かることがある。
- ・2点目は、学びの定着のためである。算数においては、問題をもう一度解いてみることも振り返ることになると考えられる。
- ・3点目は、考えの収束である。いくつかの解き方がある場合、別な問題を解かせることで、よりよい考えはどれなのかということに気付くことができる。

④ その他

- ・指導案P.60の「学びの基盤」の7点は、授業の中で全て見る事ができた。
- ・きめ細やかで確かな学級経営であった。
- ・児童の興味をひきながら、ゲーム性も取り入れていた。

8 事後分析

(1) 「深い学び」を充実させる視点

本単元では、角の大きさを回転の大きさとして捉え、角の大きさの意味や、単位と測定の意味について理解するとともに、角の大きさの単位「度（°）」について知り、分度器を用いて、角の大きさを測定したり、角をかいたりすることをねらいとしている。そこで、本単元では、知識を相互に関連付けてより深く理解する姿を目指す「既習内容や経験と関連付けた思考の促進」の視点を重視し、単元構成を行った。

まず、単元の1時間目に、「既習内容を活用して三角形を作図する」という単元の見通しをもたせる場面を設定した。この活動により、見通しをもって学習に取り組めるだけではなく、毎時間の学習した内容が単元のゴールに向かっていくという意識を高めることにつながった。

次に、単元の2・3時間目には、角についての基本的な知識を身に付けるとともに、分度器で角度を測定する活動時間を十分に確保した。実物投影機を用いながら、分度器の使い方を丁寧に確認していくことで、様々な角の大きさを確実に測定する技能の定着につながった。単元の4時間目には、 180° より大きな角の測定について、既習事項を用いて考え、説明する場面を設定した。これまでの角の測定の仕方や、角の加法性などの既習内容を活用して考えることにつながった。5・6時間目では、これまでの学習内容を活用して、角や三角形の作図に取り組むことができた。

このような単元構成を行ったことにより、毎時間の学びがつながり、児童は既習内容や経験を活用しながら意欲的に課題に取り組むことができた。

(2) 学習課題の提示について

本時の学習では、課題を 180° より大きい角の測定の仕方を考えようとし、問題場面を整理する時間を設けることで、問題場面を確実に捉えさせた。また、学習課題を提示後、児童とのやり取りを通して、既習事項を活用して答えの見通しをもたせたり、演算の決定や必要な用具を確認して方法の見通しをもたせたりする場を設定した。

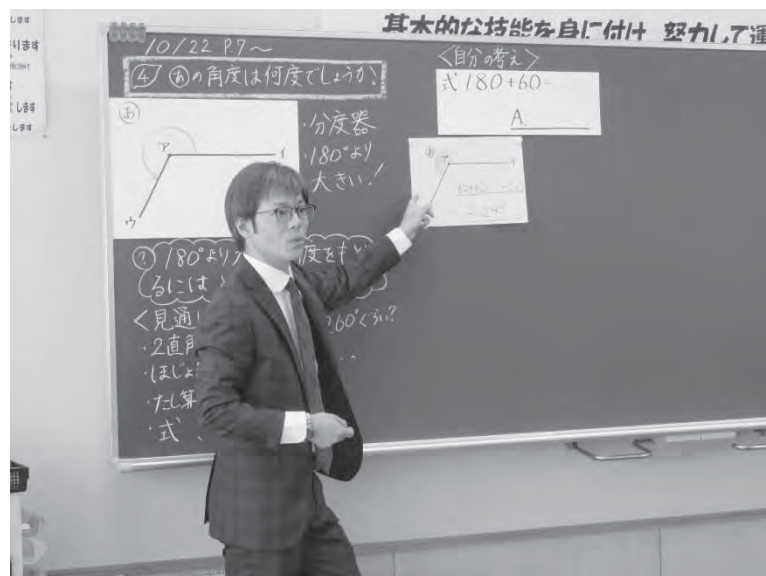
児童は本時に何を学ぶのかが明確に感じられるようになり、本時の学習課題の理解につながった。

(3) 互いの考えの見える化

本時の学習では、教師と児童のやり取りを軸として、 180° より大きい角の測定において、角の大きさを加法的な考え方だけでなく、減法的な考え方でも考えられることに気付かせるために、2つの考え方を並べて板書し、共通点や相違点を明らかにできるように、考えの見える化を図った。

児童は、自分と同じ考えか違う考えかを確かめることにより、自分が最もよいとする考

えをはっきりさせることができた。



9 本実践を通した成果と課題

＜研究内容 2－(1)① 見通し＞

- 児童全員が課題を把握しやすくするために、視覚的に分かりやすい教材作成や実物投影機の有効活用ができた。
- 課題解決の見通しで情報を与えすぎ、個人思考の場面で多様な考えが出てこないこともあったため、与える情報を精選する必要がある。
- 時間をかけすぎてしまい、その後の交流の時間を十分に取れなかったため、時間配分を工夫することが必要である。

＜研究内容 2－(1)② 振り返り＞

- 児童の理解度が一目で分かる「算数振り返りシート」のレイアウトを工夫し、今日の学習で疑問や不安に思ったことを記述させることで、意欲を持続させることにつながった。
- 「算数振り返りシート」を、教師が確認することで今後の支援計画を具体的に立てることができた。
- 記述する内容を精選する必要がある。早く書いた児童にはその場で発表させるなど、時間を有効に活用する工夫をすると良い。

＜研究内容 2－(2)① 思考を広げる対話＞

- 自分の考えに自信をもたせるために、友達に正しさや良さを認めてもらったり、分かりやすく言い換えてもらったりする場面を設定することで、児童の理解度の底上げにつながる。

＜研究内容 2－(2)② 確かな学びに向かう対話＞

- 角の大きさを加法的な見方だけでなく、減法的な見方でも考えられることを理解させることができた。まとめの内容を理解している児童が多く、練習問題にも意欲的に取り組むことができた。
- 児童同士が発言を大事に受け止め、テンポよく対話していた。予想よりも多様な考えが出なかったため、説明を加える場面もあったが、意図をもって話し合わせていたため、結果として確かな学びに向かうことができた。

平成30年度 上川教育研修センター協力校研究授業（旭川市立大町小学校）

時	目 標	主な学習活動	評価標準及び方法
1	◎朗読発表会（放送番組「やまなし」）に関心をもち、学習の見通しをもつことができる。 主体的な学び	○単元を通した課題を設定する。（言語活動の提示） 放送番組「やまなし」：自分の感じたことを朗読で表現して、全校児童に聞いてもらおう。 ○朗読とは何かを確認し、朗読するためには物語を深く読むことが大切であることをおさえる。 ○作者の人物像、情景描写、作品の題名に着目して読みを深めていくことを確認する。 ○教材文を音読して初読の感想を交流し、学習計画を立てる。 ○本時の学習を振り返る。	指導 （観①） 発言、ノート
2	◎「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生き方に個性をもつことができる。 対話的な学び	○課題を把握する。 「イーハトーヴの夢」を読んで、作者・宮沢賢治の生き方を考え方をしよう。 ○3つの視点で「イーハトーヴの夢」を読み、自分なりの宮沢賢治像を形成していく。 ・3つの視点 宮沢賢治の言葉、行動、他の作品 ○宮沢賢治はどんな考えをもった人だと思うか、自分でまとめる ○宮沢賢治に対するまとめ（印象）を交流する。 （例）宮沢賢治は自然を愛する人で、いつもみんなのことを考えていた人 ○本時の学習を振り返る。	指導 （観②） 発言、ノート、振り返りシート
3	◎擬態語や擬声語、比喩表現に着目し、役割や効果に気付くとともに、「五月」の幻灯を読み、想像したことを対比表にまとめたり交流したりすることができる。	○課題を把握する。 「五月」と「十二月」の幻灯を比べながら読もう。 －「五月」の情景を想像しよう。 ○次の3つの観点に沿って、叙述をもとに想像を広げる。 ・谷川の様子 ・かにかの会話の様子 ・出来事（上から来たもの） ○「五月」の情景を表にまとめる。 「五月」の表の作成をもってまとめとする。 ○本時の学習を振り返る。	記録 （観③） 発言、対比表、振り返りシート （音①） 発言、対比表
4	◎擬態語や擬声語、比喩表現に着目し、役割や効果に気付くとともに、「十二月」の幻灯を読み、想像したことを対比表にまとめたり交流したりすることができる。	○課題を把握する。 「五月」と「十二月」の幻灯を比べながら読もう。 －「十二月」の情景を想像しよう。 ○次の3つの観点に沿って、叙述をもとに想像を広げる。 ・谷川の様子 ・かにかの会話の様子 ・出来事（上から来たもの） ○「十二月」の情景を表にまとめる。 「十二月」の表の作成をもってまとめとする。 ○本時の学習を振り返る。	記録 （観④） 発言、対比表、振り返りシート （音②） 発言、対比表
5 本時	◎二枚の幻灯を比べ、共通点や相違点について、感じたことを交流し、題名「やまなし」について、自分なりの考えをもつことができる。 対話的な学び	○課題を把握する。 「五月」と「十二月」の幻灯を比べて、題名「やまなし」について考えよう。 ○「五月」の「かわせみ」がかにかの兄弟に与えたものはなにか考える。 ○「十二月」の「やまなし」がかにかの兄弟に与えたものはなにか考える。 ○なぜ題名を「やまなし」としたのか考える。 ○自分の考えを交流し、読みの妥当性を考える。 ○題名について自分の考えをまとめる。 わたしは…（以降、「自然の恵み」「本当の豊かさ」「命の大切さ」など共有したことを基礎として自分の考えを書いて、本時の学習のまとめとする） ○本時の学習を振り返る。 ○本時の学習から、自分の考える朗読にどう活かせるか考える。	指導 （観⑤） 発言、ノート、対比表、振り返りシート
6 ・ 7	◎学習を通して深まった作品や作者への理解をもとに、朗読の仕方を考えることができる。 対話的な学び	○課題を把握する。 どのように朗読したらよいか考えよう。 ○自分の朗読する場面を決める。 ○朗読記号を提示し、これまでに読み取ったことや宮沢賢治の思いを表現するにはどのように朗読したらよいかを、朗読記号を使って考える。 ○数人で読み合い、アドバイスし合う。 どのように朗読したらよいと考えて、朗読する。 ○本時の学習を振り返る。	指導 （観⑥） 対比表、ワークシート、振り返りシート
8	◎作者の生き方、考え方を知ったことで、より深く作品を味わいながら朗読で表現することができる。 主体的な学び	○課題を把握する。 校内放送番組「やまなし」の録音をしよう。 ○各自の担当する場面を、各々で練習する。 ○リハーサルをしてから、録音する。 ○なぜそのような朗読をしたのかを、物語の読み取りとの関連から解説する。 「やまなし」の朗読を録音する。 ○単元全体の学習を振り返る。	記録 （観⑦） 録音データ、振り返りシート

1 時間目

「自分の感じたことを朗読で表現して、全校児童に聞いてもらおう」という単元を通した課題の設定。

2・3・4 時間目

人物像、情景を読み取る時間を設定。

研究内容 1-(1)②

深い学びを充実させる視点

【知識を相互に関連付けて情報を精査して考えを形成する姿を目指し、児童が思考して問い続ける過程を重視した指導計画を立てる。】

そのために

単元の1時間目に単元の課題を設定し、朗読の仕方を考えるために、人物像、情景、題名を読み解く時間を設けた。

2時間目には、作者の人物像を捉える時間を設定し、3、4時間目には、情景を読み取る時間を設定した。そして、5時間目には、2～4時間目の情報をもとに題名について考える時間とした。

また、6時間目以降、2～5時間目の情報から自分なりの朗読を考えていく時間を取り、児童が思考し問い続ける過程となるよう単元を構成した。

5 時間目

前時までの、情報（人物像、情景）から、題名について考える時間を設定。

6・7・8 時間目

2～5時間目の情報から、自分なりの朗読を進める活動を設定。

研究協力校の授業実践 小学校第6学年 国語科

すぐれた表現を味わいながら読み、 自分の感じたことを朗読で表現する学習

日 時 平成30年11月1日（木）5校時 実施
児 童 旭川市立大町小学校6年1組 10名
指導者 鈴木 一 朗

＜学校の概要＞

学 校 の 様 子	旭川市の都心に近く、石狩川と国道40号線に囲まれた歴史のある地域である。校舎の裏手には河川敷公園、周辺には常磐公園や花咲運動公園、護国神社、市立図書館、市営プール、美術館などがあり、自然面・文化面において恵まれた環境にある。 本校は、①主体的な学習態度を育てる学習指導の充実、②全教育活動を通じて豊かな心を育む道德教育の充実、③子ども一人一人の個性や活動が光る学級経営の充実、④家庭・地域の良さを生かした教育活動の連携等を通して、「自他の良さを大切にしながら主体的に学び続ける子ども」の育成に取り組んでいる。
研 究 の 内 容	自分の思いや考えをもって、互いに高め合う子の育成 ～国語科「読むこと」の学習における学び合いを通して～ 言語活動を位置付けた単元の指導計画の作成と計画的な評価の充実、単位時間における学び合いの充実、学習課題の内容・提示の工夫、日常での学びの土台作りの充実を通して、児童自らが主体的に学びに向かう「互いに高め合う子」の育成を目指している。

- 1 単元名 「自分の感じたことを、朗読で表現しよう」
教材名 「やまなし」「資料－イーハトーヴの夢」（光村図書 6年 創造）

2 単元について

(1) 教材観

本単元に関わる学習指導要領の目標および内容（抜粋）は、次のとおりである。

【学習指導要領】～第5学年及び第6学年（国語科）の目標と内容～

1 目 標

- (1) 目的に応じ、内容や要旨を捉えながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。

2 内 容

C 読むこと

- (1) 読むことの能力を育てるため、次の事項について指導する。
- ア 自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。
 - イ 目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること。
 - エ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉え、優れた叙述について自分の考えをまとめること。
- (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
- ア 伝記を読み、自分の生き方について考えること。

児童は、1学期に「カレーライス」の単元で、人物同士の関わりを捉え、自分と比べた感想をまとめ、友達と交流することで読みを深める活動をしている。本単元では、「二枚の幻灯」として叙述されている「五月」と「十二月」の情景、場面についての描写を読み取り、「五月」と「十二月」の対比を通して、自分なりの朗読の仕方を考え、それを表現する活動に取り組む。その際、資料として示されている「イーハトーヴの夢」も読み、作者・宮沢賢治の思想や思いも手掛かりにして「やまなし」の世界観を自分なりに捉えていく。

児童は5年生の時に「大造じいさんとガン」の学習で、場面の転換や物語の山場の部分などに注目して登場人物の行動を写す細かい描写を読み取る学習をしてきた。その学習も踏まえることで、情景、場面についての描写、登場人物の相互関係や心情を捉え、優れた叙述について、自分なりの考えをまとめさせたい。

(2) 児童観

これまで国語科の学習においては、単元を通して問題を解決する言語活動を位置付け、児童に課題解決に向けた目的意識をもたせて学習を進めてきた。その学習過程において、自分の考えをもち、それを伝え合うことで自分の考えをより深めていく「学び合い」の場を設定してきた。

本学級の児童は、国語科の学習に対する関心は高い。昨年度実施したCRT学力検査においても同様の傾向が表れている。しかし、「読むこと」領域における数値結果は決して高いものではなかったが、実際、時間があれば図書室に行って黙々と読書をするなど、読書にも親しんでいる様子もあるため、一概に「読むこと」領域が苦手ということはいえない。

本学級の児童は、国語科の学習や読書に親しむ態度を身に付けているので、その姿勢を大切にして、文章を読み取る力をさらに高めていけるようにしたい。

(3) 指導観

本単元では、大町小学校の全校児童に対し（相手）、作品を味わってもらうために（目的）、校内放送で（場面）、朗読番組『やまなし』を企画して（方法）、朗読で表現する活動を行う。また、自分が捉えた作品世界への思いを表出、発信することも大切であり、朗読によっても自分の思いや考えを表現できることを実感させて表現活動の幅を広げ、読み取る力の向上につなげたい。

これまで作品を読み味わう際、優れた表現や美しい描写、人物の心情の変化などに着目して作品の世界を捉えていくことをしてきたが、そこに作者の思想や思いも加味して読むことによって、作品の世界をより深く捉えることができるようになる。本単元では、資料として宮沢賢治の生き方や考え方を描いた「イーハトーヴの夢」も読むことで、宮沢賢治の人物像を踏まえて、「やまなし」を読み進めていくことで文章を読み取る力を更に高めていくことができると考える。

(4) 学びの基盤

学びの基盤に関わり、本学級では以下の点を大切にしてきた。

- ① 「教室環境の整備」について
 - ・学習用具がすぐに取り出せるよう、教室内の教具の配置の工夫に心掛けてきた。
 - ・これまでの学習の成果が見えるように、学習の足跡が残る掲示に努めてきた。
- ② 「学習規律の確立」について
 - ・チャイムが鳴る前に学習準備をし、チャイムと同時に学習が始まるよう指導してきた。
 - ・学習用具を必要なものだけ机に出したり、学習時に良い姿勢をとったりするなど学習に向かう心構えを整えるよう心掛けてきた。
- ③ 「支持的風土の醸成」について
 - ・どのような考えも最後まで聞くことや、発表後に聞き手が反応を示すことを指導してきた。
 - ・友達の意見を肯定的に受けとめつつ、反論があれば意見を受けとめた上で自分の意見を返すことを指導してきた。

3 単元目標

場面の描写を捉え、作品で使われている表現を味わいながら、優れた叙述について自分の考えをまとめるとともに、作品の特徴や作者の思いを捉えて自分の感じたことが伝わるように朗読することができる。

(指導事項ア・イ・オ)

4 評価規準

単元の評価規準		
国語への 関心・意欲・態度	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
○物語の情景や言葉の使い方に興味をもったり、作者の考え方や生き方を知ったりしようとしている。	○読んで感じ取った自分の思いが伝わるように朗読している。(ア) ○二つの場面を比べたり、資料を読んだりすることで、作品の特徴や作者の思いを捉えている。(イ) ○場面についての描写を捉えて、優れた叙述について自分の考えをまとめている。(エ)	○語のリズムや表現のもつ美しさについて関心をもちながら、物語を朗読している。(イ(カ)) ○物語の構成について意識をもっている。(イ(キ)) ○比喩などの表現上の特色について気付いている。(イ(ケ))
学習活動における具体的評価規準		
① 朗読発表会に関心をもち、学習の見通しをもとうとしている。 ② 「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生き方に関心をもっている。	① 「五月」と「十二月」を読んで、想像したことを対比表にまとめたり、交流したりしている。 ② 題名について叙述に基づき、自分なりの考えをもっている。 ③ 学習を通して深まった作品や作者への理解をもとに、朗読の仕方を考えている。 ④ 作者の考え方や生き方を知ったことで、より深く作品を味わいながら朗読している。	① 擬態語や擬声語、比喩表現などに着目し、その役割や効果に気付いている。

5 単元の指導計画と評価計画

(1) 単元の指導計画における 17 次研究との関わり

研究内容 1-(1)② 「深い学び」を充実させる視点

知識を相互に関連付けて情報を精査して考えを形成する姿を目指し、児童が思考して問い続ける過程を重視した指導計画を立てる。

本単元の学習では、自分の感じたことを朗読で表現する活動に取り組む。児童が知識を相互に関連付けて考えを形成する姿を目指すためには、単元の学習のゴールを示して学習の見通しを明確にもたせるとともに、児童が深く思考するために必要と思われる情報を提示することが大切である。

そこで本単元の指導計画では、物語の読みを深めるために必要な情報を精査して学習を進められるようにした。2 時間目に作者・宮沢賢治の人物像を捉える時間を設定し、3 時間目は「五月」の情景、4 時間目には「十二月」の情景を読み取る時間を設定した。これによって児童は、5 時間目の学習において、作者の人物像・「五月」の情景・「十二月」の情景の 3 つの情報を精査して自らの考えを形成し、物語の読みを深めることができる。と考える。

この他にも、これまでの学習の内容を教室に掲示したり、シートにまとめて各自で見返すことができるようにしたり、宮沢賢治の他の作品にいつでも触れられるようにしたりして、児童が主体的に情報を精査して学びを深めていけるように、学習の環境を整えていく。

(2) 単元の展開

1 単位時間の学習課題 まとめ 言語活動

時	目 標	主な学習活動	評価規準及び方法
1	◎朗読発表会（放送番組「やまなし」）に関心をもち、学習の見通しをもつことができる。 主体的な学び	○朗読を発表する番組作りを提案し、そのために物語の内容を深く捉えていくことを確認する。 ○単元を通した課題を設定する。（言語活動の提示） 放送番組『やまなし』－自分の感じたことを朗読で表現して、全校児童に聞いてもらおう。 ○朗読とは何かを確認し、朗読するためには物語を深く読むことが大切であることをおさえる。 ○作者の人物像、情景描写、作品の題名に着目して読みを深めていくことを確認する。 ○教材文を音読して初発の感想を交流し、学習計画を立てる。 ○本時の学習を振り返る。	指導 →指導に生かす評価 記録 →記録に残す評価 指導 〈関①〉 発言、ノート

2	◎「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生き方に関心をもつことができる。 対話的な学び	○課題を把握する。 「イーハトーヴの夢」を読んで、作者・宮沢賢治の生き方や考え方を知ろう。 ○3つの視点で「イーハトーヴの夢」を読み、自分なりの宮沢賢治像を形成していく。 ・3つの視点→宮沢賢治の言葉、行動、他の作品 ○宮沢賢治はどんな考えをもった人だと思うか、自分でまとめる ○宮沢賢治に対するまとめ（印象）を交流する。 （例）宮沢賢治は自然を愛する人で、いつもみんなのことを考えていた人 ○本時の学習を振り返る。	指導 〈関②〉 発言，ノート，
3	◎擬態語や擬声語，比喻表現に着目し，役割や効果に気付くとともに，「五月」の幻灯を読み，想像したことを対比表にまとめたり交流したりすることができる。	○課題を把握する。 「五月」と「十二月」の幻灯を比べながら読もう。 －「五月」の情景を想像しよう。 ○次の3つの観点に沿って，叙述をもとに想像を広げる。 ・谷川の様子 ・かへの会話の様子 ・出来事（上から来たもの） ○「五月」の情景を表にまとめる。 「五月」の表の作成をもってまとめとする。 ○本時の学習を振り返る。	記録 〈読①〉 発言，対比表 〈言①〉 発言，対比表
4	◎擬態語や擬声語，比喻表現に着目し，役割や効果に気付くとともに，「十二月」の幻灯を読み，想像したことを対比表にまとめたり交流したりすることができる。	○課題を把握する。 「五月」と「十二月」の幻灯を比べながら読もう。 －「十二月」の情景を想像しよう。 ○次の3つの観点に沿って，叙述をもとに想像を広げる。 ・谷川の様子 ・かへの会話の様子 ・出来事（上から来たもの） ○「十二月」の情景を表にまとめる。 「十二月」の表の作成をもってまとめとする。 ○本時の学習を振り返る。	記録 〈読①〉 発言，対比表 〈言①〉 発言，対比表

5 (本時)	◎題名について，叙述に基づき，自分の考えをもつことができる。 対話的な学び	○課題を把握する。 「五月」と「十二月」の幻灯を比べて，題名「やまなし」について考えよう。 ○なぜ題名を「やまなし」としたのかを考える。 ○自分の考えを交流し，読みの妥当性を考える。 ○題名について自分の考えをまとめる。 わたしは…（以降，「自然の恵み」「本当の豊かさ」「命の大切さ」といった共有した言葉をもとにして自分の考えを書いて，本時の学習のまとめとする）。 ○本時の学習を振り返る。 ○本時の学習から，自分の考える朗読にどう活かせるか考える。	指導 〈読②〉 発言，ノート， 対比表
6・7	◎学習を通して深まった作品や作者への理解をもとに，朗読の仕方を考えることができる。 対話的な学び	○課題を把握する。 どのように朗読したらよいか考えよう。 ○自分の朗読する場面を決める。 ○朗読記号を提示し，これまでに読み取ったことや宮沢賢治の思いを表現するにはどのように朗読したらよいかを，朗読記号を使って考える。 ○数人で読み合い，アドバイスし合う。 どのように朗読したらよいか考えて，朗読する。 ○本時の学習を振り返る。	記録 〈読③〉 対比表 ワークシート
8	◎作者の生き方，考え方を知ったことで，より深く作品を味わいながら朗読で表現することができる。 主体的な学び	○課題を把握する。 校内放送番組「やまなし」の録音をしよう。 ○各自の担当する場面を，各々で練習する。 ○リハーサルをしてから，録音する。 ○なぜそのような朗読をしたのかを，物語の読み取りとの関連から解説する。 「やまなし」の朗読を録音する。 ○単元全体の学習を振り返る。	記録 〈読④〉 録音データ

学習計画・目標・自己評価チェックシート

放送番組『やまなし』 自分の感じたことを朗読で表現して，全校児童に聞いてもらおう

目 標

- ① 物語の場面の様子を捉えて，自分の考えをまとめよう。
- ② 自分の思いが伝わるように朗読しよう。

学習計画（全8時間）

	1 時間の振り返りはこちら⇒	ABCD
1	学習計画を立てて，朗読とは何か知って，最初の感想を交流する。	
	（学べたこと・なるほどと思ったこと・もっと学習したいことなどを書こう。）	
2	宮沢賢治はどんな考えをもっていた人だったのか自分なりにまとめる。	
	（学べたこと・なるほどと思ったこと・もっと学習したいことなどを書こう。）	
3	「五月」の情景をまとめる。	
	（学べたこと・なるほどと思ったこと・もっと学習したいことなどを書こう。）	
4	「十二月」の情景をまとめる。	
	（学べたこと・なるほどと思ったこと・もっと学習したいことなどを書こう。）	

5	「五月」と「十二月」を比べて、題名の意味について自分なりに考えをまとめ。	
	(学べたこと・なるほどと思ったこと・もっと学習したいことなどを書こう。)	
6 7	どのように朗読するか考える。	
	(学べたこと・なるほどと思ったこと・もっと学習したいことなどを書こう。)	
8	「やまなし」を朗読する。	
	(学べたこと・なるほどと思ったこと・もっと学習したいことなどを書こう。)	

単元の振り返りー「やまなし」の学習を振り返って

振り返りポイント	ABCD	一言
物語の場面の様子を捉えて、自分の考えをもつことができましたか？		
自分の思いが伝わるように朗読することができましたか？		
他の人の意見や感想を聞いて、「なるほど！」と考えることはありましたか？		
その他がらばったこと、できるようになったことなどを書こう		

6 本時の学習（8時間扱い 5／8）

（1）目 標

題名について、叙述に基づき、自分なりの考えをもつことができる。（読む能力②）

（2）本時における 17 次研究との関わり

研究内容 2－(1)② 学びの成果

自分で自分の学びの成果を実感させるために、振り返りシートを活用して学習内容の理解度を 4 件法で振り返るとともに、自分の言葉で学習の振り返りを記述させる。

自分の考えを明確にしたり深めたりするためには、学習を経た後の自分の変容に、気付くことが大切である。このことによって、児童自らが次の学習に向かおうとする主体的な態度を培うことができる。

そこで本単元の学習では、毎時間、振り返りの時間を設定し、学習内容の理解度を 4 件法で振り返らせるとともに、単位時間ごとの気付きや自分の考えの変容が見えるように、1 枚のシートにまとめた。これによって、自らの学びの成果を自分自身で確認することができると同時に、主体的に学習に向かう態度の育成につながっていくものとする。

研究内容 2－(2)② 教科の特性に応じたまとめ

物語の読みをより確かなものにさせるために、それぞれの考えの根拠を交流および共有し、それぞれの読みの妥当性を検討する学習のまとめに取り組ませる。

文学における叙述の解釈は、常に一つだけ正解をもっているわけではなく、作品中の他の叙述と関連付けたり、叙述と自分の経験、他者の捉え方などとを関連付けたりすることによって意味を生成する行為であると言える。その解釈は、いかなるものも許容されるわけではなく、あくまでも叙述を基に多様な手掛かりを関連付けながら創り出すものであり、児童一人でこうした行為の質を高めて行くことには限界がある。そのため重要になってくるのが、他者との読みの交流である。

そこで本時では、各自の読みを構築して交流した後の学習のまとめにおいて、それぞれの読みの妥当性を考える活動を行う。まとめは、教師が一方的に与えるのではなく、教師と児童または児童同士の対話を通して行うことが大切である。それぞれが、読みを構築する際に根拠とした叙述に立ち返り、他者の読みと自分の読みを積極的に交流および共有することで、物語の作品世界を確実に捉えることができ、児童はより確かな読みを構築することができる。と考える。

(3) 展 開 (5 / 8)

1 単位時間の学習課題 ☐ まとめ ☒ 白抜き研究との関わり

教師の活動	児童の思考や活動
1 前時までの学習内容を想起させ、本時の学習課題を把握させる。	1 掲示やノートを見ながら前時の学習内容を想起し、本時の学習課題を把握する。
「五月」と「十二月」の幻灯を比べて、題名「やまなし」について考えよう。	
2 課題解決に向かうために、課題を焦点化させる。 「宮沢賢治は、どうして『やまなし』という題名をつけたのか考えよう。」	2 宮沢賢治がどのような思いを込めて題名をつけたのかを考えていくことを理解する。
3 課題解決に迫るための手掛かりを確認させる。 「これまでの学習の中で、考える際の手掛かりになりそうなものは何でしょう。」	3 これまでの学習を振り返り、考える際の手掛かりになるものを確認する。 ①前時までに作成した「五月」と「十二月」の対比表 ②宮沢賢治の生い立ちや考え方
4 題名「やまなし」について考えさせる。 「宮沢賢治は、どうして『やまなし』という題名にしたと思いますか。」	4 これまでの学習を振り返りながら、どうして「やまなし」という題名をつけたのかについて、自分の考えをまとめていく。
・対比表を見て、「二枚の幻灯」が表している世界観を対比させて捉えさせる。 「『二枚の幻灯』を比べて、どんなことが伝わってきますか。」 「題名は、『かわせみ』でもなければ、『かわせみとやまなし』『二枚の幻灯』でもない。なぜ『十二月』しか出てこない『やまなし』なんだろう。」	・「『五月』は『〇〇〇…』ということを伝えたい幻灯で、『十二月』は『〇〇〇…』ということを伝えたい幻灯だと思う。」というように、対比して考える。 ・題名に対して様々に思いを巡らせて、意欲的につぶやく。
5 つぶやきながら自分の考えを確かめさせ、ノートに簡単にメモさせる。 ・全体的に考えをもてない様子が見えたら、近くの人と意見を交流させる。 「隣の人と、簡単に意見を交流してみましよう。」	5 自分の考えを支えるキーワードをノートにメモして、全体での交流に備える。 ・近くの人と意見交流をする。

6 全体で交流させる。 「なぜ題名を「やまなし」としたのでしょうか。」	6 全体で考えを交流する。 ・相づちを打ったり反論したり質問したりしながら交流する。
7 各自の考えを交流させながら、共有できる部分を考えさせる。	7 それぞれの考えを交流しながら、「やまなし」について共有できる部分を捉える。
8 題名「やまなし」について、自分の考えをまとめさせ、ノートに書かせる。 教科の特性に応じたまとめ	8 自分の考えを整理して、ノートに書く。
【評価場面】〈読む②〉発言，ノート 「五月」と「十二月」の世界観や宮沢賢治の思想を踏まえて、自分なりに題名「やまなし」について考えることができた。 <手立て>二枚の幻灯，作者像から出てくる言葉の共通点に着目させる。	
わたしは…（以降，「自然の恵み」「本当の豊かさ」「命の大切さ」といった共有した文言をもとにして自分の考えを書いて，本時の学習のまとめとする）。	
9 本時で取り組んだ学習について，振り返りシートを使って確認させる。 学びの成果	9 振り返りシートで，本時の学習の振り返りをする。
10 本時の学習から，自分の考える朗読にどう活かせるか考えさせる。	10 本時の学習から，自分の考える朗読にどう活かせるか考える。

(4) 板書

やまなし
宮沢賢治

課題

「五月」と「十二月」の幻灯を比べて、
題名「やまなし」について考えよう。

☆ 宮沢賢治は、どうして「やまなし」という
題名をつけたのだろう。

- ・ カワセミよりも、やまなしの方が
大事
- ・ 自然の怖さよりも自然の恵み
- ・ 世の中、明るく生きよう
- ・ 「十二月」の方を伝えたい
- ・ 「十二月」は平和
- ・ 自然の恵みのありがたさを伝えたい
- ・ 「十二月」が理想の世界

…

・ 自然の恵み
・ 本当の豊かさ
・ 命の大切さ

ここは、全体交流で出された意見を書き留めていく。

7 研究協議の主な内容

(1) グループ協議の内容

【研究内容2-(1)② 振り返り】

- ・振り返りシートにより、児童に見通しをもたせ、身に付ける力を意識させながら学習させることができた。
- ・振り返りの視点を、もっと明確で具体的にすることが必要である。

【研究内容2-(2)② 確かな学びに向かう対話】

- ・児童同士の対話で、豊かな読みとなり、自分たちなりのまとめを導くことができていた。
- ・教師の意図するまとめに向かうための手立てが必要である。
- ・対話の中で、情景の対比という視点が薄れていた。

(2) 指導主事の助言

《上川教育局教育支援課義務教育指導班指導主事 北河 剛治》

① 単元構成について

- ・答申が出され、主体的・対話的で深い学びでどのように学ぶかについて浸透しているが、主体的・対話的で深い学びは目的ではないことを再確認することが大切である。
- ・学びの実現に向けて、単元や内容のまとまりの中で身に付けさせたい資質・能力をはっきりさせることが必要である。
- ・本単元では、「自分の感じたことが伝わるように朗読することができるということにつなげたい」という身に付けさせたい資質・能力に向けた単元構成ができていた。
- ・主体的な学びの実現に向けて見通しでは、学習のゴールの設定、ゴールにおける児童の姿、単元の指導計画と単元構想の見通しをもつことが大切である。
- ・本時の授業では、全校児童に朗読するために深く読むという単元のどの段階を学んでいるのかという見通しをもたせることができていた。

② 主体的な学びの実現に向けて

- ・主体的な学びの実現では、視点を明確にした振り返りが大切である。
- ・振り返りの視点として、リフレクション、メタ認知、動機付けという視点があり、単元の中で、今日の振り返りは何をねらったのかを明らかにする必要がある。
- ・振り返りの視点を毎時間同じにする必要はなく、単元の中で意図して仕掛けることが大切である。

③ 対話的な学びの実現に向けて

- ・必然性が生まれる対話であることが大切である。
- ・対話的な学びの実現には、確認、アウトプット、深い学びという段階がある。
- ・対話的な学びの実現は、単元や内容のまとまりの中で、どのように構成していくかが大切であり、単位時間に絶対に作らなければならないものでもない。

④ 深い学びの実現に向けて

- ・単元の中で、児童に考えさせるためのことを教えていないと、表層的で浅いものになってしまうため、教えるべきことは教え、考えさせる場面では考えさせることが大切である。

《旭川市教育委員会教育指導課主査 馬場 大輔》

① 教科の特性に応じたまとめについて

- ・新学習指導要領では、学習過程が明記されており、「読むこと」では、構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有という学習過程があり、特に考えの形成を大切にする必要がある。
- ・本時のまとめを無理に一つにまとめるのではなく、児童がグループ討議を経て、自分なりの思いをプリントに書き、自分なりの考えをもつことができていた。

② 振り返りについて

- ・4件法と記述で振り返らせ、毎時間の内容がきちんと書かれており、3つの視点（学べたこと、なるほどと思ったこと、もっと学習したいこと）が示されていた。

③ 研究協議について

- ・日常の授業改善や今後の活用法など、明日につながる研究協議だった。
- ・KKAシートを使用した、自身の振り返りの文章化を研究協議で行うことで、個々の先生の学びとなり、日常に生きる研究協議となった。

8 事後分析

(1) 「深い学び」を充実させる視点

児童が知識を相互に関連付けて深い学びを充実させるためには、単元の学習のゴールを示して学習の見通しを明確にもたせるとともに、児童が深く思考するために必要と思われる情報を提示することが大切である。そこで、本単元では、「やまなしを朗読する」というゴールを明確に示し、情報を精査して考えを形成する姿を目指す「思考して問い続ける学習過程」の視点を重視した単元構成を行った。

単元の1時間目に何をどのように学習してどのような姿を目指すのかを明確に示した。児童は音読と朗読の違いを知って朗読に向かう意欲喚起が図られるとともに、朗読するためには、朗読する文章を自分なりに理解しなければならないということを確認できた。これにより児童は学習の見通しをもつことができた。

次に、2～4時間目を作者・宮沢賢治の人物像と、「やまなし」の2つの情景（「五月」「十二月」）を読み取る時間とし、5時間目を「やまなし」の世界観を自分なりに捉える時間とした。児童は2～4時間目で得た知識を相互に関連付けて、5時間目に「やまなし」の世界観を自分なりに捉えることができた。

6時間目以降は、2～5時間目の既習事項を自らの朗読に反映させる活動とした。朗読記号を使ってどのように朗読するかを考えた後で、朗読を録音して自分たちで聞き、客観的に自分の朗読を評価して改善点を探れるようにした。これらの手立てをとりながら作者の思いや作品に流れる世界観を、朗読という表現形式に結実させていくことで、既習の学習内容を様々に関連付けながら学習のゴールに向かって主体的に学びを深めていく児童の姿が見られた。

このような単元構成を行ったことにより、児童は、何を学ぶのかを明確に理解して、既習を関連付けながら情報を精査し、主体的に学びを深めていくことができた。

(2) 学びの成果

児童が主体的に学びに向かうようにするには、自らの学びの成果を実感させて学びの喜びを味わわせるとともに、次の学びに向かう意識を高めさせることが必要である。そこで本単元では、毎時間、振り返りの時間を設定して、4件法で振り返らせるとともにその時間ごとの気付きや自分の考えを記述させた。その際、振り返りのシートを1枚のシートにして提示することで、自らの変容や学びの成果を自分自身で確認できるようにした。

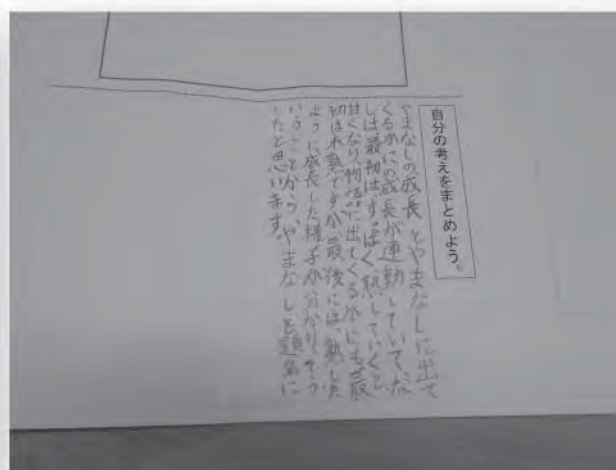
毎時間の振り返りが1枚のシートにまとめられているので、児童は自らの学習の歩みを確認しながら次の学習への見通しをもつことができた。

(3) 教科の特性に応じたまとめ

物語を教材とした「読むこと」の授業では、自分の読みを構築することが求められる。そのため、一方的なまとめにはならず、各自で作品世界に対する自分の考えを構築して学習のまとめとなる。ただし、叙述から大きくかけ離れた作品世界の構築は許容されるものではない。このような国語科「読むこと」領域の特性に合った学習のまとめになるように、本時の学習では、各自の考えを交流した後に、それぞれの考えの妥当性を考える活動を行った。その活動を経た後に、最終的に各自が自分の考えを記述して、それをもって本時の学習のまとめとした。

自分の考えを交流した後に、それぞれの意見を振り返って共有できる部分を考える活動を行い、作品を象徴するキーワードをいくつか確認することができた。このキーワードによって作品世界から大きく外れることのない各自の作品に対する考えを構築することができた。

しかし、共有の活動の際に教師がどのように関わっていくのか、これまでの学習をどのように関連付けさせていくのかなど、学びを深めていく手立ては、より吟味する必要がある。



9 本実践を通じた成果と課題

＜研究内容 2－(1)① 見通し＞

- 本単元の言語活動を「校内放送番組「やまなし」を放送して全校児童に聞いてもらおう。」とし、「やまなし」の朗読を全校児童に聞かせることを目的とした活動を提示したことで、単元のゴールをイメージして学習の見通しをもつことができた。
- 1 時間目に教師が実際に朗読の実演をして、同じ作品でも朗読の違いによって作品世界が大きく変わることを実感させるようにした。これによって自分たちも取り組んでみたいという意欲を高めることができた。

＜研究内容 2－(1)② 振り返り＞

- 毎時間の終末場面に振り返りを継続的行ったことで、学びの確認と次時以降の学習の見通しをもたせることができた。
- 記述での振り返りを行う際の観点を精査し、具体的に示すことができれば、児童の学びに向かう姿勢を、より効果的に形成させることができた。

＜研究内容 2－(2)① 思考を広げる対話＞

- 何についての意見を述べたらよいのかを明確に示すことで、児童は迷いなく自分の意見をまとめることができた。また、適宜、補助発問を投げかけることで、対話の論点を明確にさせることができた。
- 全体交流は、いろいろな考えを聞くことや、その考えを聞いてつなげていくことが重要であることを全員で確認した。これによって積極的な態度で安心して交流に取り組むことができたり、他の人の意見と自分の意見を比較して聞く態度ができたりして、のびのびと思考を広げることができた。
- 教師から示す対話のテーマが、学習課題の解決に確実に迫ることができるものになっているか、しっかりと吟味することが不可欠である。

＜研究内容 2－(2)② 確かな学びに向かう対話＞

- 2 時間目と 5 時間目の全体交流の場面では、いろいろな意見を聞く全体交流からキーワードを共有する交流へと目的を転換させたことで、学びを深める契機を児童に与えることができた。
- 全員で録音した「やまなし」の朗読を聞いたり、範読 CD の「やまなし」の朗読を聞いたりした。これによって主体的に他の人へのアドバイスや自分自身の振り返りを行うことができ、よりよい朗読を目指す姿が見られた。児童個々の確かな学びに結びつけることができた。
- 朗読の練習時間を十分に確保することは難しかった。

平成 30 年度 上川教育研修センター協力校研究授業（比布町立比布中学校）

時	目 標	主な学習活動
1	① アフリカ州の地理的・社会的・経済的・文化的な特色に対する関心を高め、学習の意欲をもつことができる。 主体的な学習	○アフリカ州の風景をパワーポイントで紹介しこの風景かを手紙する。 ○課題を把握する。 「アフリカ州を大観しよう。」 ○プリントを解きながら、アフリカ州の国名、自然環境などを確認する。 ○赤道の位置からアフリカ州の気候を考える。 ○教科書を読みながら、アフリカ州の特色を把握する。 ○本時の学習をまとめる。 「アフリカ州には 54 の国々があり、様々な民族、言語、気候が見られる。」 ○world map からアフリカ州の経済発展が遅れていることを把握する。 ○単元を通して課題を設定する。 「アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろう。」 ○本時の学習を振り返る。
2	② アフリカ州の歴史と、現代につながる発展について理解することができる。	○アフリカの国旗（アフリカ統一色を使っているもの）から共通点を見つけ出し、課題につなげる。 ○課題を把握する。 「アフリカ州の歴史と現代の課題を知ろう。」 ○アフリカの地図から直線的な国境線が引かれていることを読み取る。 ○奴隷船の船から多くの若くて健康なアフリカの男性が奴隷として連れていかれたことを理解する。 ○住民を無視した国境線や植民地政策が、現代の紛争や種族につながっていることを理解する。 ○本時の学習をまとめる。 「アフリカ州はヨーロッパの植民地となり、搾取されたり生活を無視した国境線が引かれたりしたことから、現代でも紛争や種族などの問題を抱えている。」 ○本時の学習を振り返る。
3	③ アフリカ州の産業や経済の発展について理解することができる。	○チョコに関するクイズから課題につなげる。 ○課題を把握する。 「アフリカ州の産業や経済の課題を知ろう。」 ○カカオの生産とチョコの消費のトップ 3 が異なる理由を知ることから、プランテーション農業について理解する。 ○砂糖産業の生産割合や輸出割合のグラフから、様々な砂糖産業が取れるが、その輸出に頼っていること（モノカルチャー経済）を理解する。 ○本時の学習をまとめる。 「アフリカ州は様々な農産物や鉱産資源が取れるが、工業化が遅れ他国での農産物が進みます。モノカルチャー経済となっているため、経済発展が遅れている。」 ○本時の学習を振り返る。
4	④ 地図やグラフからアフリカ州の豊かな国々と貧しい国々の共通点を探し、発展の要因を考察することができる。 協力的な学習	○アフリカ州の GDP 上位 20 カ国と、下位 20 カ国の地図を比較して本時の課題につなげる。 ○課題を把握する。 「アフリカ州の豊かな国々と貧しい国々の共通点は何だろうか？」 ○GDP が上位の国と下位の国の共通点を調べる。 ○シグソール学習で課題の資料から、GDP が上位の国と下位の国の共通点を調べる。 ○見つけ出したことを交流する。 ○本時の学習をまとめる。 「アフリカ州の豊かな国々は資源などに有利な沿岸部に多く、資源が豊富である。貧しい国々は物資の輸送が難しい内陸部に多く、教育が十分にされていない国や、紛争国でも紛争が多い国は多い。」 ○本時の学習を振り返る。
5	⑤ アフリカ州の経済発展が遅れている理由について、既習事項を基に考え、表現することができる。 主体的な学習	○前時の復習 ○課題を把握する。 「アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろう。」 ○既習事項を基に、課題に対する考えをキーワードや短文で書く。 ○書いた内容について全体で交流する。 ○交流した内容を輪読し、課題に対する考えを iPad で文章にまとめる。 ○課題に対する考えを交流する。 ○本時の学習をまとめる。 「アフリカ州は歴史的に植民地となっていた期間が長く、その影響で紛争が多く、インフラの整備や産業の発展が進んでいないため、経済発展が遅れている。」 ○本時の学習を振り返る。

1 時間目

「アフリカ州はなぜ経済発展しないのだろう」という単元の課題を設定。

研究内容 1-(1)②

深い学びを充実させる視点

【知識を相互に関連付けて情報を精査して考えを形成する姿を目指し、生徒が思考して問い続ける過程を重視する。】

そのために

単元の 1 時間目に単元の課題を設定し、最終時にその解決に取り組む時間を設けた。

また、2～4 時間目には、多面的・多角的に単元の課題の解決に取り組めるような知識・技能を習得できるように単元を構成した。

5 時間目には既習事項を活かしながら単元の課題に取り組む時間とした。

2・3・4 時間目

多面的・多角的に単元の課題の解決に取り組めるような知識・技能を習得する時間を設定。

5 時間目

前時までの、既習事項を活かしながら、自分の考えを構築し、単元の課題の解決に取り組む活動を設定。

研究協力校の授業実践 中学校第1学年 社会科

既習事項を活用して、多面的・多角的に考察し表現する学習

日 時 平成30年10月4日（木）5校時 実施
 生 徒 比布町立比布中学校1年A組 24名
 指導者 梶 田 貴 裕

<学校の概要>

学校の様子	比布中学校は、国道40号線沿いに位置し、豊かな田園に囲まれた歴史と伝統のある学校である。平成30年2学期より新校舎に移転、比布町立中央小学校と小中連携・一貫教育の充実をめざした学習活動に80人の生徒たちは伸び伸びと励んでいる。 本校は、自ら学び、意欲的に行動する生徒の育成を重点目標とし、①社会に生きる確かな学力の育成、②豊かな人間性と健やかな体の育成、③共につくる魅力ある学校づくりの推進の3つを重点施策にして取り組んでいる。
研究の内容	習得した知識・技能を活用して思考力・判断力・表現力を高める生徒の育成 ～ICTの活用と対話的な学びによる授業改善を通して～ 研修の重点は、①教師と生徒がタブレットを活用した授業の展開、②新学習指導要領における対話的な学びをおさえた授業とし、全教科でタブレットの活用と対話的な学びを位置付けた授業改善の実践を積み重ねている。

1 単元名 「アフリカの人々の暮らしとその変化」（教育出版 1年）

2 単元について

(1) 教材観

本単元に関わる学習指導要領の内容（抜粋）および内容の取扱い、次のとおりである。

【学習指導要領】

内容 （1）世界の様々な地域

ウ 世界の諸地域

世界の諸地域について、以下の（ア）から（カ）の各州に暮らす人々の生活の様子を的確に把握できる地理的事象を取り上げ、それを基に主題を設けて、それぞれの州の地理的特色を理解させる。

（ア）アジア （イ）ヨーロッパ （ウ）アフリカ
 （エ）北アメリカ （オ）南アメリカ （カ）オセアニア

内容の取扱い

ウについては、州ごとに様々な面から地域的特色を大観させ、その上で主題を設けて地域的特色を理解させるようにすること。その際、主題については、州の地域的特色が明確となり、かつ我が国の国土の認識を深めるうえで効果的であるという観点から設定すること。また、州ごとに異なるものとなるようにすること。

また、「この中項目は、世界の各州を対象として、それぞれの州内に暮らす人々の生活にかかわり、かつ我が国の国土の認識を深める上で効果的な観点から州内の特色ある地理

的事象を基に主題を設定し、その追求を通してそれぞれの州の地域的特色を理解させることを主なねらいとしている」とある。

本単元で扱うアフリカ州は、一人あたりのGDPが低い国が多く、世界の中で下位 10 カ国は全てアフリカ州の国々である。それらの国々の人々は、年間 500 ドル以下で生活している。また、一人あたりのGDPが上位 100 位以内に入っているのは、アフリカ州の 54 カ国中、わずか 7 カ国しかない。そこで、そのような地域的特色を理解させるために、本単元では、アフリカ州の経済発展が遅れている理由を主題として学習に取り組む。アフリカ州の経済発展が遅れているのは、かつてヨーロッパ諸国の植民地であったという歴史的な背景が強く影響している。それにより現代でも産業やインフラの未整備、紛争といった問題につながっている。アフリカ州の経済発展が遅れている様々な要因を単元の中で学習し、それを生かして最終時に主題に対する自分なりの答えを導き出させるようにしたい。

(2) 生徒観

社会科の学習においては、主題に基づいて単元の課題を設定し、毎時間の学びをワークシートに記述し、それを生かして単元の課題を解決する流れを大切にしてきた。

本学級の生徒にアンケートをとり、アフリカ州のイメージについて質問したところ、「黒人が多い」「ジャングルが多い」「いつも踊っていそう」「道路がある所が少ない」「事件が多そう」など多様な答えがあった。しかし、アフリカ州で知っていることについて質問したところ、「世界で一番大きいサハラ砂漠がある」「植民地だった」「資源が豊富」といった程度の答えで、空欄の生徒も多かった。また、授業の内容はわかるか（4 件法）質問したところ、全員が分かると回答した。社会は好きか質問したところ、90%以上が「好き」と答えたものの、社会は得意かの質問には、「得意」と答えた生徒は50%程度だった。苦手と答えた生徒の多くが覚えられないからということを経験しており、苦手と答えた生徒と、得意と答えた生徒の学力テストの平均点の差は 8 点あった。

以上のことから、アフリカ州に関してこれまでの生活体験の中で得てきた情報から、「なんとなく貧しい」「未開の地」「発展途上国」といったイメージはもっているものの、具体的な知識をもっている生徒は少ない。また、授業には意欲的に取り組み 1 単位時間の内容は理解している生徒は多いものの、内容の定着には不安があり自信をもっている生徒は少ない。そのため、毎時間の学習内容を精査し、大切な知識の復習を行ったり、ワークシートなどを活用して 1 単位時間ごとの知識の積み重ねを大事にしたりして、定着したことを実感できるよう指導していきたい。

(3) 指導観

生徒は、前単元のアジア州で、「アジア州はなぜ経済発展したのだろうか」という単元の課題を解決する学習を行った。単元の最初の時間に、単元の課題を設定し、2 時間目以降にその解決に関わることを学び、それを生かして最終時に自分なりの答えを書いた。

単元の課題を設定してその解決に取り組む場合、単元で学習した内容をしっかりと理解し、身に付けていることが必要となる。そこで、本単元では、単元のワークシート（右参照）に、1 単位時間で学んだことを記述させる。ワークシートを活用することにより、学んだことを一目で振り返り、単元の中でどのようなことを考えたのか、その足跡をたどることができる。単元の課題も常に念頭において学習に取り組むこともできる。

また、最終時には単元で学んだ学習内容や資料をもう一度振り返って精査したり、友達と意見を交流したりすることで多面的・多角的に課題に対する答えを考えさせたい。

上記のように、学びの過程において、知識を相互に関連付けてより深く理解させたり、情報を精査して考えを形成させたりすることで、深い学びの充実につなげていきたい。

(4) 学びの基盤

学びの基盤に関わり、本教科の授業では以下の点を大切にしてきた。

- ① 「教室環境の整備」について
 - ・ロッカーの使い方、各教科の学校保管可能な副教材の保管場所の統一など教室をきれいに使うことを指導してきた。
 - ・機器の使い方に慣れるため、一人一台タブレットを使う機会をできるだけ確保した。
- ② 「学習規律の確立」について
 - ・チャイム着席の徹底や授業準備の徹底に努めた。
 - ・授業の始まり、終了時のしっかりとしたあいさつの徹底に努めた。
- ③ 「支持的風土の醸成」について
 - ・日頃から、疑問点や理解不十分な点は恥ずかしがらず質問して解決する態度や学級全体で気兼ねなく学び合う態度の育成に努めた。
 - ・グループワークやペアワークを毎時間取り入れるようにし、互いに教え合い説明し合うように指導してきた。

3 単元目標

アフリカ州での社会的事象に関心をもち、様々な資料を活用しながら知識を身に付け、経済発展が遅れている理由を多面的・多角的に考察し表現している。

4 評価規準

単元の評価規準			
社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
○アフリカ州の地域的特色への関心を高め、意欲的に追求し、とらえようとしている。	○アフリカ州の経済発展が遅れている理由を多面的・多角的に考察し、適切に表現している。	○アフリカ州の地域的特色に関する様々な資料を読み取り活用することができる。	○アフリカ州での社会的事象を理解し、その知識を身に付けている。
学習活動における具体の評価規準			
① アフリカ州の地域的特色に対する関心を高め、学習の見通しをもとうとしている。	①アフリカ州の経済発展が遅れている理由について、既習事項を基に考え、表現している。	①地図やグラフからアフリカ州の豊かな国々と貧しい国々の共通点を読み取ることができる。	①アフリカ州の歴史と、現代につながる課題について理解している。 ②アフリカ州の産業や経済の問題点について理解している。

5 単元の指導計画と評価計画

(1) 単元の指導計画における 17 次研究との関わり

研究内容 1－(1)②「深い学び」を充実させる視点

知識を相互に関連付けて情報を精査して考えを形成する姿を目指し、生徒が思考して問い続ける過程を重視する。

本単元の学習では、「アフリカ州はなぜ経済発展しないのだろうか」という単元の課題を設定し、追及する活動に取り組む。新学習指導要領において、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、学習を見通し振り返る場面を設定する必要性が説かれていることから、1 単位時間ごとに課題や振り返る場面を設定するだけでなく、単元全体を見通して、単元の課題を設定する時間やその解決に取り組む時間を設定することが大切である。

そこで本単元の指導計画では、単元の 1 時間目に単元の課題を設定し、最終時にその解決に取り組む時間を設けた。また、2～4 時間目には、多面的・多角的に単元の課題の解決に取り組めるような知識・技能を習得できるように単元を構成した。5 時間目には既習事項を活かしながら単元の課題に取り組む時間とした。このような活動を通すことで、2～4 時間目に得た知識を相互に関連付け、単元の学習課題に対する自分の考えを形成することができると思う。

(2) 単元の指導計画と評価計画

1 単位時間の学習課題 まとめ 単元の学習課題

時	目 標	主な学習活動	評価規準及び方法
1	◎アフリカ州の地域的特色に対する関心を高め、学習の見通しをもつことができる。 主体的な学び	○アフリカ州の風景をパワーポイントで紹介しどこの風景かを予想する。 ○課題を把握する。 アフリカ州を大観しよう。 ○プリントの問題を解きながら、アフリカ州の国名、自然環境などを確認する。 ○赤道の位置からアフリカ州の気候を考える。 ○教科書を読みながら、アフリカ州の特色を把握する。 ○本時の学習をまとめる。 アフリカ州には 54 もの国々があり、様々な民族、言語、気候が見られる ○world mapper からアフリカ州の経済発展が遅れていることを把握する。 ○単元の課題を設定する。 アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろう。 ○本時の学習を振り返る。	指導 →指導に生かす評価 記録 →記録に残す評価 指導 <関①> 発言、プリント
2	◎アフリカ州の歴史と、現代につながる課題について理解することができる。	○アフリカの国旗（アフリカ統一色を使っているもの）から共通点を見つけ出し、課題につなげる。 ○課題を把握する。 アフリカ州の歴史と現代の課題を知ろう。 ○アフリカの地図から直線的な国境線が引かれていることを読み取る。 ○奴隷船の絵から多くの若くて健康なアフリカの男性が奴隷として連れていかれたことを理解する。 ○住民を無視した国境線や植民地政策が、現代の紛争や難民につながっていること理解する。 ○本時の学習をまとめる。 アフリカ州はヨーロッパの植民地となり、搾取されたり生活は無視した国境線が引かれたりしたことから、現代でも紛争や難民などの問題を抱えている。 ○本時の学習を振り返る。	指導 <知①> ワークシート

3	◎アフリカ州の産業や経済の問題点について理解することができる。	○チョコに関するクイズから課題につなげる。 ○課題を把握する。 アフリカ州の産業の課題を知ろう。 ○カカオの生産とチョコの消費のトップ3が異なる理由を知ることから、プランテーション農業について理解する。 ○鉱産資源の生産割合や輸出割合のグラフから、様々な鉱産資源が取れるが、その輸出に頼っていること（モノカルチャー経済）を理解する。 ○本時の学習をまとめる。 アフリカ州は様々な農産物や鉱産資源が取れるが、工業化が遅れ自国での製品化が進まず、モノカルチャー経済となっているため、経済発展が遅れている。 ○本時の学習を振り返る。	指導 <知②> ワークシート
4	◎地図やグラフからアフリカ州の豊かな国々と貧しい国々の共通点を読み取ることができる。 対話的な学び	○アフリカ州のGDP上位20カ国と、下位20カ国の地図を比較して本時の課題につなげる。 ○課題を把握する。 アフリカ州の豊かな国々と貧しい国々の共通点は何だろう？ ○GDPが上位の国と下位の国の共通点を探す。 ○ジグソー学習で複数の資料から、GDPが上位の国と下位の国の共通点を探す。 ○見つけ出したことを交流する。 ○本時の学習をまとめる。 アフリカ州の豊かな国々は貿易などに有利な沿岸部に多く、資源が豊富である。貧しい国々は物資の輸送が難しい内陸国に多く、教育が十分にされていない国や、沿岸国でも紛争が多い国は貧しい。 ○本時の学習を振り返る。	指導 <技①> ワークシート

5 (本時)	◎アフリカ州の経済発展が遅れている理由について、既習事項を基に考え、表現することができる。 主体的な学び	○前時の復習 ○課題を把握する。 アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろう。 ○既習事項を基に、課題に対する答えをキーワードや短文で書く。 ○書いた内容について全体で交流する。 ○交流した内容を踏まえ、課題に対する考えをタブレットで文章にまとめる。 ○課題に対する考えを交流する。 ○本時の学習をまとめる。 アフリカ州は歴史的に植民地となっていた期間が長く、その影響で紛争が多く、インフラの整備や産業の振興が進んでいないため、経済発展が遅れている。 ○本時の学習を振り返る。	記録 〈思①〉 タブレット（ロイロノートスクリール）
-----------	---	---	--

6 本時の学習（5時間扱い 5／5）

(1) 目 標

アフリカ州の経済発展が遅れている理由について、既習事項を基に考え、表現することができる。（思考・判断・表現）

(2) 本時における 17 次研究との関わり

研究内容 2－(1)① 課題解決の方法や手順

単元の課題を解決するために、単元における課題解決の過程を明記したワークシートを用いて本時の課題を確認させるとともに、本時の学習の流れを提示する。

本時の学習では、単元の課題である「アフリカ州はなぜ経済発展しないのだろう」の解決に向け、2～4時間目に学んできたことを活用し、自分の考えを構築させる学習に取り組む。社会科の学習では、単元の学習過程が生徒の課題解決の過程となるように設定し、毎時間の学習がその課題解決につながるようにすることが大切である。常に目的意識をもって学習に取り組ませたいと考えた。

そこで、単元の最終時にあたる本時では、単元における課題解決の流れが分かるワークシートを活用することにより、単元を通した本時の学習の見通しを生徒にもたせるとともに、対話的な学びを意図的に位置づけた学習の流れを提示する。

研究内容 2-(2)② 思考の活性化

学習内容や学習方法について確実に理解させるために、単元で学んだことを生かしながら、単元の課題を多面的・多角的に解決させる。

学習内容や学習方法を確実に理解させるためには、単元の課題解決に向け、様々な角度から考えさせることが大切である。本単元の「アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろう」という単元の課題について、「アフリカの歴史」「産業」「地形」「インフラ」など様々な角度から考えさせることで、多面的・多角的に課題解決に向かうことができ、学習内容や学習方法のより確かな理解を促すことができると考えた。

そこで本時では、これまでの学習で学んだことを記述したワークシートを活用し、友達との交流を通して多面的・多角的に課題に対して考えられるようにするとともに、友達の意見を参考にし、自分の考えを加除修正する対話的な場を設定する。

(3) 展 開 (5/5)

☐ 1 単位時間の学習課題 ☐ まとめ **白抜き** 研究との関わり

教師の活動	生徒の思考や活動
1 前時までの学習を振り返らせる。	1 タブレットで提示された前時までの内容をペアで振り返る。
2 課題を把握させる。 課題解決の方法や手順	2 単元を通じて出てきた課題を解決する時間であることを理解する。
アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろう。	
3 これまでの時間で活用した資料の一覧を配付する。	3 資料に目を通す。
4 前時までの学習内容をワークシートや資料を生かしながら確認させ、課題に対する自分なりの答えを考えロイロノートにメモさせる。終わったら教師機に提出させる。	4 単元を通して活用してきたワークシートや資料などを活用し、これまでに学んできたことを生かしながら、課題に対する答えを個人で考え、ロイロノートにキーワードや短文でメモする。
5 提出した生徒の考えを一覧でスクリーンに表示し、互いの考えを交流させ、黒板に考えをまとめる。	5 一覧になった意見を見ながら、互いの考えを交流し、考えを広げる。
6 交流した内容を踏まえ、課題に対する考えを文章にまとめさせる。必要であれば、資料も活用させる。	6 ロイロノートスクールを活用して、自分の考えを個人で文章にまとめる。

7 作成した文章は教師用タブレットに提出させる。	7 終わったら教師のタブレットに提出する。
8 数名に発表させる。アフリカの歴史について書いてある意見を取り上げ、共通点を見つけ、最も重要な要因を考えさせる。 思考の活性化	8 数名が発表する。 グループで最も重要な要因を考える。
9 他の人の意見を参考に、自分の意見を修正させる。 思考の活性化	9 自分の意見を修正し、早く終わったら追加の課題に取り組む。
【評価場面】 <思①> タブレット A アフリカ州の経済発展が遅れている理由について、既習事項を基に多面的・多角的にいくつかの資料や意見を関連付けて考え、表現している。 B アフリカ州の経済発展が遅れている理由について、既習事項を基に多面的・多角的に考え、表現している。	
アフリカ州は歴史的に植民地となっていた期間が長く、その影響で紛争が多く、インフラの整備や産業の振興が進んでいないため、経済発展が遅れている。	
10 本時の学習について振り返らせる。	10 単元のワークシートに本時の学習内容の理解度を4件法で振り返る。

(4) 板書

スクリーン (生徒の意見などを表示)	課題 アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろう。 資料1～8を貼る
-----------------------	--

7 研究協議の主な内容

(1) グループ協議の内容

【研究内容2-(1)① 見通し】

- ・単元の課題を常に意識できており良かった。前単元から一連の流れで行っていた。
- ・単元全体のつながりが見えるのが良かった。また、ワークシートを使うことによって自分の意見を振り返ることができていた。
- ・自分ができなかった部分や課題となることが明確になるので、生徒の主体性につながっていた。
- ・繰り返し行うことで、自分の考えをきちんとまとめることができるようになってきている。
- ・「次はこうしてみたい」と考えたこともワークシートに書かせることによって、より意欲を高めることができると感じた。
- ・生徒の変容がより分かるワークシートを作る必要がある。

【研究内容2-(2)② 確かな学びに向かう対話】

- ・多くの資料や意見から、自分の考えを多面的にまとめられていた。
- ・短い時間で思考したことをしっかり表現し、比較できていた。
- ・今までの学びと関連させて交流させたことが自信や確かな学びにつながっていた。
- ・どこで何を考えさせるのか吟味・精査する必要がある。
- ・単元の作り方が良かったので、生徒に前時までの内容が確実に積み上がっていた。
- ・書くことを保障する時間を与えたことで、確かな学びにつながり、深まりを生んだ。
- ・キーワードを使って字数内でまとめる力も必要ではないか。
- ・ICT環境が整っていることが条件である。

(2) 指導主事の助言

《上川教育局教育支援課義務教育指導班指導主事 関口 祐太郎》

① ICTの活用について

- ・ICTは、目的ではなく手段であり、生徒に身に付けさせたい力を達成させるために活用するものである。
- ・発問や指示、対話の場面を設定し、必要な部分は板書を残すなどの教師の行為は大事である。それを支援するのがICTである。
- ・ICTの活用により、教師の説明時間が短縮されたり、指示が的確になったりし、結果的に学習の分かりやすさにつながってくる。
- ・本時の授業では、コンパクトな導入であり、まとめに向かうまでの活動が精選されており、生徒たちに最も考えさせたいところに時間をかけることができていた。

② 単元について

- ・単元で身に付けさせたい資質・能力が明確であり、知識を相互に関連付けて情報を精査して考えを形成する姿を目指して、5時間の授業が構成されていた。
- ・身に付けさせたい力が明確になっていたことから、各時間での目標や活動が精選されていた。

③本時について

- ・対話場面を意図的に設定することで、生徒はタブレットを使いながら、自分が考えたことと友だちが考えたことをつなげることができていた。また、教師も板書を通して、生徒の知識を関連付けていた。板書と友だちの考えをもとに、知識を関連付けて文章を作ることができた。

④評価場面について

- ・本時の学習において、生徒は、アフリカ州の経済発展が遅れている理由について、既習事項を基に、多面的・多角的にいくつかの資料や意見を関連付けて考え、表現できていた。評価規準を一つにして、そこに向けて教師がどのような手立てをとっていくのか精選していくことで、生徒全員が目標に到達していくのではないかな。

8 事後分析

(1) 「深い学び」を充実させる視点

新学習指導要領では、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、学習を見通し振り返る場面を設定する必要性が説かれている。そこで本単元では「アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろうか」という課題を設定し、単元の最終時で、それまでに獲得した知識を関連付けて、情報を精査して考えを形成させることを目指し、単元構成を行った。

まず、前単元の流れをくみ、単元の1時間目には、世界のGDPが描かれている地図を利用して、単元の課題を設定し、本単元の見通しをもたせた。生徒は、アフリカ州は昔から経済発展が遅れていることを読み取り、単元の課題につなげることができた。

次に、単元の課題を解決するために必要な知識を獲得するために、2～4時間目で、アフリカの歴史、産業、地形、インフラなどについて学習した。その中で生徒は、アフリカ州はヨーロッパの植民地だったために、プランテーション農業などの産業に関する問題や、真っすぐな国境線などの地形に関する問題、それに関わる紛争やインフラの未整備などの問題が起きていることに気付くことができた。

単元の終末では、前時までで学んだことを生かして単元の課題に対する答えを考える場面を設定した。その際に、これまでに活用した資料を再度提示しながら、資料に基づいて答えを考えさせるとともに、友達との交流を通して、単元の課題に対する答えを多面的・多角的に考えさせた。

このような単元構成をすることにより、単元の最終時には、ほとんどの生徒がこれまでの学びを生かして考えを形成することができた。思考して問い続ける過程を重視したことにより、学んだ知識を相互に関連付け、情報を精査し考えを形成する姿が見られた。本単元で構成した学習過程は、生徒にとって分かりやすく、取り組みやすい面があった。

さらに、深い学びを充実させ、多面的・多角的な考え方や未知のことについても根拠をもって考えられる生徒を育てていくため、単元の課題を設定し、単元を通して学びを深めていくことに加えて、発展問題にも取り組む必要がある。

(2) 課題解決の方法や手順

単元における課題解決の流れが分かるワークシートを活用することにより、単元を通した本時の学習の見通しを生徒にもたせるとともに、対話的な学びを意図的に位置付けた学

習の流れを提示した。

前時までの流れが分かるワークシートを利用することにより、生徒は本時の課題の解決にスムーズに向かうことができた。また、本時の学習の流れを確認したことで、自分の考えを分かりやすく伝えることができるように、自分の文章を考えることができた。

(3) 思考の活性化

学習内容を確実に理解させるために、本時では、これまでの学習で学んだことを記述したワークシートを活用し、友達との交流を通して多面的・多角的に課題に対して考えられるようにするとともに、友達の意見を参考にし、自分の考えを加除修正する対話的な場を設定した。

生徒は、一度構築した自分の考えを、友達との対話で出てきた意見を生かしたり、ワークシートを見ながら既習事項を振り返ったりすることで、深めることができた。

9 本実践を通した成果と課題

＜研究内容 2－(1)① 見通し＞

- 1 単位時間の課題が単元の課題の解決に結び付くように設定したことで、主体的に学習に取り組むことができた。
- 単元の課題を「アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろう」と設定し、ワークシートや黒板に常に掲示し、学習の流れを示すことで、見通しをもって活動に取り組んだ。

＜研究内容 2－(1)② 振り返り＞

- 毎時間、振り返りを継続的行ったことにより、次時への学習意欲の向上につながった。
- なぜ学習内容が分かったのかを具体的に振り返らせる必要があった。

＜研究内容 2－(1)① 思考を広げる対話＞

- 本単元だけでなく、前単元から資料の読み取りの後に友達との交流を入れたことで、多面的・多角的に資料を読み取ることができ、考えを広げることができた。
- 生徒の意見を、板書に掲示した資料を用いて視覚的につなげることで、資料同士の関連を意識しながら考えさせることができた。

＜研究内容 2－(2)② 確かな学びに向かう対話＞

- 1 単位時間の課題だけでなく、単元の課題も生徒は意識していたので、課題に沿った話し合いができていた。
- 生徒同士で話し合うことによって再構築した考えを単元のまとめとして扱うことができた。
- 単元の内容をよく理解していたので、「経済発展が遅れている最大の要因は？」の問いに対し、全ての班が「ヨーロッパの植民地であったこと（歴史的背景）」と考えた。生徒の理解の状況に応じて、再構築するための時間配分を考える必要があった。

本単元（アフリカ州）のワークシート

p. 58-57 アフリカ州 ～人々の暮らしとその変化～

単元の課題 アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろうか？

予想 アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろうか？

今日学んだことや単元の課題への理由(後でわかるように少し詳しく)	今日の感想 (4で良かった、1で悪かった)
1 アフリカは、もともとヨーロッパの植民地であり、奴隷化されていた。後に独立した国々も、資源や労働力を輸出する立場にあり、経済的に不利な結果、1つの国に資源が偏り、民族対立が生じ、内戦が起きている。	4 3 2 1 理由: 奴隷化や資源の輸出
2 アフリカは、もともとヨーロッパの植民地であり、奴隷化されていた。後に独立した国々も、資源や労働力を輸出する立場にあり、経済的に不利な結果、1つの国に資源が偏り、民族対立が生じ、内戦が起きている。	4 3 2 1 理由: 奴隷化や資源の輸出
3 アフリカは、もともとヨーロッパの植民地であり、奴隷化されていた。後に独立した国々も、資源や労働力を輸出する立場にあり、経済的に不利な結果、1つの国に資源が偏り、民族対立が生じ、内戦が起きている。	4 3 2 1 理由: 奴隷化や資源の輸出

アフリカ州の経済発展が遅れている理由は、

(ここはiPadでまとめるよ)

p. 58-57 アフリカ州 ～人々の暮らしとその変化～

単元の課題 アフリカ州はなぜ経済発展が遅れているのだろうか？

予想 新しい技術がまだ行かない

今日学んだことや単元の課題への理由(後でわかるように少し詳しく)	今日の感想 (4で良かった、1で悪かった)
1 アフリカは「植民地」であることにより、資源を搾取されてきた歴史があり、独立後もその影響で民族対立や内戦などがあり、今でも問題の1つになっている。	4 3 2 1 理由: 資源の搾取、民族対立
2 アフリカではあまりもったいないように思っている。植民地時代に作られていたというところもあり、経済発展がうまくいっていない。車や機械の輸入も、土産品よりも高い。	4 3 2 1 理由: 植民地時代の遺産、輸入品の高価格
3 豊かな地域と貧しい地域がある。大きな差がある。教育の機会が少なく、衛生環境も良くない。経済発展が遅れている原因は、教育や衛生環境の悪さにある。	4 3 2 1 理由: 教育の不足、衛生環境の悪さ

アフリカ州の経済発展が遅れている理由は、

(ここはiPadでまとめるよ)

本単元の生徒のまとめ

アフリカ州の経済発展が遅れているのは、大きく考えて2つあると思います。

- 1、アフリカ州はヨーロッパの植民地にされていたから、プランテーション農業で輸出出来るものが限られている。この農業の問題点は、天候に左右されることと、価格が下がるのに伴って、儲けも少なくなるという事である。
- 2、アフリカ州では紛争や内戦がまだ起きていて、教育が進んでいないため、識字率も少ない。

これらが原因でアフリカ州の発展が遅れていると、考えました。

アフリカ州の経済発展が遅れているのは、ヨーロッパの植民地だったため、ヨーロッパに支配されていて、アフリカが独立するまで、かなりの年数がたったから。しかも、ヨーロッパに支配されていることによって、勝手に国境を決められ、民族対立が起こって、内戦が起こったため。

アフリカ州は、砂漠化が進行して難民の数が多いから経済発展が遅れたと思う。貧しい国では、インフラ整備がされていなく、それとともに教育があまりされていなく、紛争がたくさん起こっているから。プランテーション農業をしていて、経済面で考えると、ヨーロッパの方が儲けが多く、アフリカは経済的に難しいから。

第 V 章 研究の成果と課題

1 成 果

2 課 題

研究の成果と今後の課題

上川教育研修センターでは、第 17 次研究の研究主題を「深い学びを実現する学習指導の在り方」と設定し、研究内容を次の 2 つに分け、現行の学習指導要領の基で検証を行い、研究を進めてきた。

- 1 目標・課題・まとめ・評価が合致した単元の指導計画及び具体的な児童生徒の姿を見取る評価計画を作成すること。
 - 2 自己の学習を見通し振り返る主体的な学びと、思考を広げ確かな学びに向かう対話的な学びを重視した本時の展開を工夫すること。
- その結果、第 17 次研究 2 年次は、次のような成果と課題を明らかにすることができた。

第 17 次研究 2 年次のまとめ

《 成 果 》

- ① 深い学びで実現する姿とそれを目指すための単元構成における視点を例示したことにより、児童生徒の思考の流れに沿った単元の指導計画を充実させることができた。
- ② リフレクションを取り入れた研究協議を行うことにより、授業研究の成果と課題を分かりやすく実感を伴って共有できた。

第 17 次研究 3 年次に向けて

《 課 題 》

- ① 教える場面と児童生徒に思考・判断・表現させる場면을効果的に設定し関連させながら指導するなど、単元の指導計画をさらに充実させる必要がある。
- ② 対話的な学びのイメージを具体化し、自分の考えを広げ深める対話の充実を図る必要がある。

あとがき

当センターでは、「深い学びを実現する学習指導の在り方」を研究主題に掲げ、3か年計画で第17次研究に取り組んでまいりました。

2年次となる本年度は、1年次に構築した理論を受け、単元の指導計画と本時の授業展開の大きく2つの研究内容を柱として設定し、理論研究と実践検証を推進してまいりました。

とりわけ、研究員所属校（美瑛町立美瑛小学校）及び研究協力校（比布町立比布中学校、旭川市立朝日小学校、旭川市立大町小学校、旭川市立高台小学校）における授業公開では、参加された多くの先生方から貴重な御意見をいただき、研究理論を具体的に検証することができました。

この度、それらの成果をまとめた研究紀要第44号を発刊いたします。これもひとえに、北海道教育庁上川教育局並びに旭川市教育委員会の皆様の御指導・御助言、研究協力校の先生方の優れた実践、そして研究員所属校や参観いただいた先生方の御支援と御協力の賜物と、心より感謝申し上げる次第です。

本紀要の内容につきましては、改善点等があると存じますが、学校における校内研修はもとより個人研究や日常実践などに広く活用していただくとともに、多くの皆様の御批正、御指導をいただけましたら幸いに存じます。

次年度は、第17次研究の3年次となります。「上川の先生方にとって授業づくりに役立つ研究」として、これまで以上に理論と実践を充実させた研究成果をお示しできるよう全力を尽くしてまいります。

研究事業部長 清水 忠 明

主 要 参 考 文 献

- ◇新旧学習指導要領、新旧学習指導要領解説（文部科学省）
- ◇初等教育資料、中等教育資料（文部科学省）
- ◇中央教育審議会答申（文部科学省）
- ◇中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 報告（文部科学省）
- ◇評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（国立教育政策研究所）
- ◇上川教育研修センター研究紀要 第41号・42号・43号（上川教育研修センター）
- ◇平成29年度小・中学校教育課程編成の手引（北海道教育庁学校教育局義務教育課）

研 究 協 力 校

比布町立比布中学校	校長	田 澤 満
旭川市立朝日小学校	校長	木 下 俊 吾
旭川市立大町小学校	校長	指 川 文 徳
旭川市立高台小学校	校長	西 尾 直 樹



上 川 教 育 研 修 セ ン タ ー

所 長
副 所 長
事 務 部 長
研究事業部長
研 究 員

佐 藤 保
福 家 尚
佐 藤 美恵子
清 水 忠 明
遠 藤 聡 志
望 月 俊 綱
田 村 仁
吉 野 和 気
斎 藤 邦 彦

旭 川 市 立 愛 宕 小 学 校
旭 川 市 立 永 山 中 学 校
旭 川 市 立 北 光 小 学 校
美 瑛 町 立 美 瑛 小 学 校
旭 川 市 立 永 山 南 小 学 校
当 麻 町 立 当 麻 小 学 校

指 導 員

三 上 大 輔
佐 藤 徳 嗣
伊 藤 健 治
山 中 芳 子
北 河 剛 治
馬 場 大 輔
笹 谷 青 子
上 光 さゆり

旭 川 市 立 神 楽 小 学 校
旭 川 市 立 緑 が 丘 中 学 校
旭 川 市 立 西 神 楽 中 学 校
旭 川 市 立 旭 川 小 学 校
上 川 教 育 局 義 務 教 育 指 導 班
旭 川 市 教 育 委 員 会 教 育 指 導 課

担当指導主事

事 務 係

研究紀要 第 44 号

深い学びを実現する学習指導の在り方
～各教科における主体的・対話的な学びを通して～

発 行	平成 31 年 3 月 31 日
発行者	上川教育研修センター 旭川市 6 条通 4 丁目 電 話 (0166)24-2501 F A X (0166)24-2512 E-mail:kami-cen@educet.plala.or.jp
印刷所	藤田印刷株式会社 旭川市 3 条通 10 丁目 電 話 (0166)26-2188

試そう上川の力で

創ろう上川の力で

生かそう上川の力を

上川教育研修センター